
PAST DESIRE -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P A S T D E S I R E - h e a d -

【ZPDF】

Z6324C

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

とうとう戦争が始まった。ねえちゃんとアレイさんは戦地に赴いて、未熟な自分は王都で留守番・・・待つていて、すぐに強くなつて追いかけるから! (LAST DANCE · head · 続編)

- - - はじまり - - - (前書き)

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 http://nco

de.syo setu.com/n3660c/

【LOST COIN - tail】 http://nco

de.syo setu.com/n3665c/

【LAST DANCE - head】 http://nco

ode.syo setu.com/n4082c/

【LAST DANCE - tail】 http://nco

ode.syo setu.com/n4617c/

【PAST DESIRE - head】 (本作)

【PAST DESIRE - tail】 http://nco

ode.syo setu.com/n7899c/

ode.syo setu.com/n0921d/

【WORST CRISIS - head】 http://nco

ode.syo setu.com/n0973d/

- - - はじまり - - -

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国は穏やかな気候と豊かな國土に恵まれ、およそ450年もの間安定を保ってきた。その大きな支えとなつたのがレメゲトンと呼ばれる王国付きの天文学者たちだ。

初代グリモワール国王ユダ＝ダビデ＝グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア＝グリフィスと共に、72の悪魔を冥界から召還し、悪魔それぞれと契約した証に全部で72のコインを作つてレメゲトンにそれぞれ与えた。

レメゲトンたちは悪魔の強大な力を使役してグリモワール王国に反映の時代をもたらした。

しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減つていた。レメゲトンの数も今ではわずかに6名、所有するコインは23。

それは長く領土拡大の機会を狙つていたセフイロト国にとって好機といえた。

グリモワール国建国から466年目の夏、セフイロト国はグリモワール国に対して宣戦布告した。

これは短く、しかし激しい戦争の始まりだった。

その日は朝から緊迫した空気が屋敷内に漂つっていた。

理由は分かっている。

今日到着するというセフイロト國の大天使のせいだ。

もう何年も緊張状態にあつた両国の関係は、つい先日セフィラの王都乱入事件のあと最悪の事態を迎えた。

これは後から聞いた話だが、セフィラの王都侵入についてセフィロト国^{ガーネット}のネブカドネツアル王が言いがかりだと蹴つたらしい。これはセフィロト国を貶める行為だのなんだの、またレメゲトンがセフィラに対して攻撃を加えたの何だの様々によく分からぬ理由をつけて強引に開戦へと持ち込んだのだという。

セフィロトとの国境に駐留する炎妖玉騎士団^{ガーネット}が領権侵害したなどという虚言まで使うのだから、放つておいてもいつかは戦争になつてはいたと思う。

それでも実際にセフィラと交戦した自分たちからすれば先に手を出してきたのは敵の方だし、それも自分たちの方はといえばねえちゃんを取り戻すための正当な戦闘だつたのだからその言い分はおかしいと言えた。

それでも一介のレメゲトンが言つても国際的な場では聞き入れてもらえない、ということをねえちゃんが諭してくれた。

まだ太陽が東にある間に自分はねえちゃんと二人、馬車に乗つていた。ついこの間グリモワール國王子の誕生パーティーで着たばかりの漆黒のドレスに身を包んでジュデッカ城に向かう。

セフィロト國の大天使がセフィラであるという情報が入つていたからだ。

王国付きの天文学者レメゲトンに対し、セフィラは天使を召還するセフィロト國の神官だ。セフィラに対抗できるのは悪魔を召還して使役するレメゲトンだけだった。

その大使は同時に開戦宣言を行うだろ^う。

そうすればゼデキヤ王が必死で回避してきた戦争に突入してしま

う。
ねえちゃんも口数は少なく、自分もそれにつられて自然と黙り込んだ。

馬車は大きな車輪の音を立てながらパラティソ・ゲートを潜り抜けた。

到着すると、今まで一回しか入ったことのないあの広い謁見の間にはすでにじい様と眼鏡のレメゲトンのメイザースさん、ベアトリーチェさん、それに漆黒星騎士団長のクラウドさんがそろっていた。他にも見た事があるようなないようなヒトが何人も並んでいた。きっとこの間のサンのパーティで挨拶してくれたんだろうけど、ぜんぜん覚えていなかつた。

その場の空気はとても重く、口を開ける雰囲気ではなかつた。ねえちゃんに従つて、じい様とメイザースさん、ベアトリーチェさんに並ぶことにした。

階段の真下には黒い甲冑に身を包んだクラウドさんと白い甲冑を身につけた知らないヒトが控え、壇上には王様とサンとおやぢく王妃様と思われる女性が並んでいた。

漆黒の甲冑に身を包んだクラウドさんはとても真剣な顔をしていた。その横顔はとても凜々しくて漆黒星騎士団長の名に相応しかつた。その反対側で槍を持って佇むヒトは白い髪を蓄えていたけれどクラウドさんの倍くらいありそうな立派な体躯をしていた。頬に大きな傷があるのが少し怖かつたけれど、青い目に灯る光はとても優しそうだつた。

きつとこのヒトがねえちゃんが所属する輝光石騎士団の団長さんなんだろう。

太陽の光が差し込んで王様や王妃様の姿は見えない。

サンの姿を見ようと目を細めたけれど、逆光が眩しくて見えなかつた。

「遅くなりました。アレイスター＝クロウリー、ただいま参上しました。」

そこへアレイさんが颯爽と駆け込んできた。ねえちゃんの隣について軽く腰まである長い黒髪が風に靡いた。ねえちゃんの隣について軽く

息を整えている。ずいぶん急いでここまで来たらしい。

「クロウリー伯爵、レメゲトンならそれなりの節度を持つて行動していただきたい。今は国の大変なですから。」

冷たい声が向かいの列から響いた。

見ると綺麗に髪を撫で付けた壮年の男性がこちらを向いていた。アレイさんとは違った感じに目つきが鋭くて、厳格そうなヒトだった。着ている服にはところどころ金糸が織り込んである。

微かな記憶をつつきだしして、ライアット公爵という名前を引っ張り出してきた。

「申し訳ございません。」

アレイさんはそのヒトに向かってすぐに頭を下げ、謝罪した。ねえちゃんは珍しく頬を引きつらせている。あのヒトがあんまり好きではないらしい。

あのヒトが誰で、どんなヒトなのかをこいつそりとねえちゃんに聞こうとした時、謁見の間の正面扉が開いた。

息を呑んで見守っていると、衛兵さんに続いてセフィロト国の大使が3人入ってきた。

先頭を歩く男性は真っ白な神官服に身を包んでいた。袖口を青のラインが結んでいて、金のボタンが一列に連なっている。白いズボンが眩しく、さらには細いフレームの眼鏡をかけていた。ウェーブのかかった淡い茶の髪はふわりと風に浮かんだ。

その右後ろに見たことのない女性がいた。こちらは騎士の様相を呈していて、金の紋様が入った純白の鎧と銀の脛当でが目を惹いた。赤茶色のふわふわした髪を高い位置で縛っている。腰に手を当てて自信たっぷりに周囲を見渡している様子から気の強い性格が見て取れた。

そして、左後ろに控えていたのは……嫌と言つほどに見覚えのある手品師マジシャンの姿だった。

「ゲブラ」

小さな声でポツリと呟くと、ゲブラは気づいてこりと微笑んだ。顔が強張るのを止められなかつた。

3人はレメゲトンや他の貴族たちが見守る中、颯爽とした足取りで王様の壇の前まで進み出た。

それに従つて王様たちのいる壇を守るようクラウドさんと白い甲冑の壯年の騎士が階段の前に立ちはだかり、持つている槍を交差させた。

その手前で立ち止まつて3人は跪いた。

「遠路はるばる」苦労、セフィロト国の大使よ。長い挨拶はいらぬ、本題はもう分かつておる」

すぐ上のほうから王様の声が振ってきた。

すると先頭の白い神官服のヒトが一枚の紙を取り出した。茶色っぽいその紙は丸めて何か印で止めてあつた。おそらくあれがセフィロト国^{シンボル}の象徴なのだろう。

神官服のヒトは笑顔でその紙筒を差し出した。

「セフィロト国、ネブカドネツアル王より親書をお預かりしております」

その笑みは狡猾で悪意に満ちており、思わず一歩退きそうになるほどだった。

ひつしてこの紙切れたつた一枚で、グリモワール王国とセフィロト国との間に戦争が勃発した。

季節はちょうど夏を迎えていた。

SELECT・1 できるだけできないこと

「…して宣戦布告がなされたわずか2日後、信じられないニュースが王都に飛び込んできた。

なんと、王国最強の炎妖玉騎士団^{ガーネット}が守るカーバンクルが早々に落とされたというものだった。

「何ですって？！」

ねえちゃんは目を吊り上げた。

王様に呼び出されたいつもの書類に埋まつた部屋にねえちゃんの声が高らかに響いた。

眼鏡のマイザースさんが静かに戦況を告げる。

「大使が書簡を届けた日の午後にはすでに攻撃が始まっていたようです。準備が不完全だつた炎妖玉騎士団は応戦したものの被害は甚大、残つた兵を連れて団長であるバー・ディア卿が東の都トロメオに退いたそうです」

「宣戦布告をした瞬間に攻撃とは、してやられたな」

ゼデキヤ王も頭を抱えた。

同じく集まつていたじい様もアレイさんもベアトリーチェさんも暗い顔を隠そうとしなかつた。

「……すぐトロメオに向かいます」

「頼む、クロウリー伯爵。それにファウスト女伯爵、すぐに出発してくれ」

「御意」

「おそらくセフィロト国も戦にセフィラを投入しているはずだ。普通の兵だけではいくらも持たんだろう」

ねえちゃんとアレイさんは真剣な顔で頷いた。

「アリギエリ女爵、国家医師団から数名選出し、物資を届ける一団と共に戦地へ向かってくれ。到着後市民退去の指揮を執れ。準備ができ次第、輝光石騎士団^{ダイヤモンド}と現在トロメオから最も近い琥珀騎士団^{アンバー}を

向かわせる。老師とメイザース卿は戦況と敵の戦略を調べ、随時報告してくれ

「はい」

「現場の総指揮はバー・ディア卿に一任してある。被害を最小限に食い止め、トロメオを最終点としてセフィロト国の侵入を防ぎ、防衛ラインをカーバンクルまで戻したい。まずはそれからだ。とにかく国土を防衛する。人々への被害を増やすな」

「承知しました」

自分は一人呆然としていた。

自分が飲み込めない。一体今何が起きているんだろう。カーバンクルが陥落した?トロメオが戦場?被害を最小限に?

おれは いつたいどうしたらいい?

「すぐ行動に移ってくれ」

「はっ!」

短い返事をしてみなぞぞに散つた。

自分は動く機会を失つて王様の前に一人佇んだ。

「ラック、君はまだレメゲトンになつて日が浅い。記憶喪失の話も聞いている」

ゼデキヤ王は帝王の光を灯した瞳で自分を射抜いた。

「だから、まだ戦場に出るのは早い。まずは漆黒星騎士団で経験を積んで欲しい。フォーチュン騎士団長に話を通してある」

「クラウドさんのこと?」

「そうだ。君はレメゲトンだ。アガレスとフラウロスを扱うことが出来る。それはグリモワール王国にとつて大きな戦力だ」

王様はラースの名を出さなかつた。

「だが、戦闘に関しても実生活に関しても経験が浅い。それこそ、記憶のある3年前に君の人生が始まつたようなものなのだから」

「うん、そうだね。おれにできることはすごく少ないよ。この間ねえちゃんを探しに行つてすごく分かつたよ」

自分の無力さが。無知さが。

前回はアレイさんがいてくれたからよかつたけれど、一人にされると何も出来ないということを身にしみて感じ取った。

「貴重なレメゲトンを無闇に戦場に放り込むことは出来ない。君はフォーチュン侯爵の元へ向かいなさい」

「ねえちゃんとアレイさんは？」

「すぐに戦地へ向かう」

「つ！」

言葉にならない痛みが胸を貫いた。頭の中で轟音が鳴り響くような衝撃。

戦争は、国同士の殺し合いなんだって誰かが言つた。

その場所にねえちゃんとアレイさんが行つてしまつんだ。

「ねえ、王様……おれも行きたいよ……」

「それはできない。君にはまだ早い」

「でも、おれの知らない遠くで一人が危険な目に遭つてるなんて、耐えられないよ……！」

ねえちゃんがいなくなつた時、何を捨てても探しに行こうと思つた。

王様はそれを許してくれた。

でも、今回は一緒に行けないのだという。

「おれが弱いから？　おれがまだ何も知らない子供だから……？」

「それがわかつていいならすぐにフォーチュン侯爵の元へ向かいなさい。今ならインフェルノ・ゲートの外にある訓練所にいるはずだ」「分かりました」

本当はすごくすごく嫌だつた。

ねえちゃんだけでなくアレイさんまで行つてしまつなんて。

でも王様の黄金のオーラはそんな有無を言わせなかつた。その代わりに王様はぽつりと一瞬悲しい表情を見せた。

「大切にしている者たちが危険な目に遭うのは私も辛い。だが、それを乗り越えねばもつと多くの人が傷つくことになる。私はグリモ

ワールの民をみな平等に愛している」

愛している、と言つた王様の表情に胸を締め付けられた。

田の前にいるのはただ、ヒトが傷つく事を厭つ一人の男性の姿だった。

「もしよかつたらラック、君の力も貸して欲しい。そのために自分の力を磨くんだ。もっと洗練された力で持つて大切な者たちを守つて欲しい。ファウスト女伯爵やクロウリー伯爵のように」

「うん、わかった」

とてもこの王様を好きになれそうな気がした。ねえちゃんやアレイさんがこの王様に従う理由が少しだけ分かる気もした。

だから、『一つだけ』守るうと決めたねえちゃんのためじゃなく、自分のためでもなく、自分の大好きなこの世界を守るために強くなりたいと思つたんだ。

そのためだつた寂しいのだつてきつと我慢できるはずだ。

すぐにはねえちゃんに戻つて訓練所に行く準備をしよう。足早に城内を歩いていると、プロンドを靡かせたサンが後ろから駆けてきた。

「ラック！」

グリモワール国の皇太子は、自分に追いつくと並んで歩き出した。

「どうどう……戦争になっちゃったね」

「うん。実はまだよくわかんないんだけど。急に周りが慌しくなつてきたよ」

そう言つて笑うと、サンはすぐ真剣な顔で言つた。

「ねえラック。この間言つたこと……僕はいつでも待つてゐるから。嫌になつたらいつでもいい、僕のところに来て。そうしたら僕は君を守つてあげられる」

サンが言つたのはレメゲトンをやめて王都にじどまり、戦場に出ない役職に就くことだった。

自分は既にそれを躊躇の夜に断つてゐる。

「ごめんね、サン。おれ出来る限り強くなりたいんだ。ねえちゃん」とアレイさんにはやく追いつきたいから。あ、戦いが好きなわけじゃないよ? ただ、大切な人が危険な目に遭つたのを見てるだけのは嫌なんだ」

はつきりとそう言つと、サンはとても悲しそうな顔で笑つた。

「僕も同じだよ? ラックが危険な目に遭つたのは嫌だ」

その表情にはつと胸を突かれた。

自分が思うだけじゃなくて、自分が思われているところひとつ忘れてはいけないのだ。

「お願い、辛かつたらいつでも帰つてきて。僕は待つてゐるから

「……ありがとう、サン」

とても嬉しかった。自分を心配してくれた事が。

でも、もう心に決めていた。もっと強くなる。大切な人を自分で守れるよう。そのためにいくらでも努力しよう、と。

ねえちゃんのお屋敷に戻ると、みな慌しく動いていた。マリー・ばあやさんも総出で戦地へ発つ準備をしてゐる。忙しそうだったから誰にも声をかけられず、扉のところに呆然と立ちつくしているとねえちゃんがやってきた。

ブロンドの髪はサンと一緒にだつた。

でも、金の瞳は今まで見たことないくらいに悲しそうな色をしていた。

「……ねえちゃん」

「ごめんね、ラック。本当は傍にいていろんな事を教えてあげたかったのに、私は行かなくちゃいけないわ」

「うん、王様に聞いたよ。おれはクラウドさんのところに行く。もつともつといろんなことを学んでくるよ」

「ラック……」

「でもね、すぐに強くなつてねえちゃんのところに行へから、待つて！」

「さうがんばって笑つた。

でも無理したのがばれてしまつてゐるのか、ねえちゃんはすぐ泣きそうな顔になつてしまつた。

そんな顔は見たくないからがんばって笑つたのに。

「辛くなつたのならやめたつていいのよ？ きっとマユレク殿下があなたを守つてくださるわ。」

諭すように言つたねえちゃんの言葉に首を振つた。

「おれは誰かに守つて欲しいわけじゃないよ。自分が強くなつて大切な人を守りたいんだ。ねえちゃんが遠くで危険な目に遭わないよう、肩を並べて戦いたいんだ」

言つてゐるうちに悲しくなつてきた。

でも、これから旅立つねえちゃんに不安を与えたくなかった。

契約に向かうアレイさんを見送つたときの気持ちにとてもよく似ていた。行かないで欲しい。でも、止められない。

「だからがんばる！ ねえちゃん、お願ひ！」

ねえちゃんの胸に飛び込んでぎゅっとしがみついた。

そうしたら少し不安が消えてくれる気がした。

「死なないで」

口にしないでおこつて思つてゐた言葉だったのに、転がるように口から滑り出た。

その瞬間に胸がきゅーっと締め付けられて、鼻の奥がツンとした。それでも必死に泣くのを我慢してねえちゃんを見上げて笑つた。

「馬鹿ね」

ねえちゃんはそんな自分の頭を優しく撫でてくれた。

それはすぐ嬉しさばなにたまらなく切なくて、また泣きそうになるのをこらえるのに必死だつた。

何度も喉まで出かかつた「行かないで」という言葉を胸の奥に封

印
し
た。

SECT・2 行かないで

それから幾許もしないうちに、大きな馬車がねえちゃんを迎えてきた。

レメゲトンの正装に身を包んだアレイさんが馬車から降りてきた。横では使用人のヒトたちがねえちゃんの荷物を積み込んでいた。ねえちゃんはそつちに指示を出していて、ヨハンもそれを手伝っているようだった。

自分はその様子を一階の廊下の窓から見下ろしていた。

「……ねえちゃん」

最後に見送る時だけ下りよつ。そうじやないと、ねえちゃんの顔を見たら今度こそ泣いてしまうかも知れない。

そう思つてその場を離れようとすると、とても聞きなれたバリトンの声がした。

「おい、くそガキ」

「……アレイさん」

正装のアレイさんはいつもより凜々しく見えた。

これから戦場に向かう姿はとても勇ましい、グリモワールを代表するレメゲトンの威厳があつた。

「世界の終わりみたいな顔しやがつて」

「アレイさんも行っちゃうんだね」

「ガキの戯言を聞かなくていいかと思うと清々する」

アレイさんはまたイジワルなことを言つ。

でもこの深いバリトンが聞けなくなると思つとすく寂しくなつた。

だつて何週間か前にアレイさんに会つてから、新しい世界に飛び込んでからはずっと一緒にいてくれたんだから。

ねえちゃんもアレイさんもどつちが欠けてもおれの世界は成立しないんだ。

その一人が同時にいなくなるなんて……

「泣きそうな顔をするんじゃない。もう一度と会えないわけじゃないだろ？？」

「そうだよ、そうだけじゃ」

王様が言つてゐることもねえちゃんたちが行かなくちゃいけないって事も戦争のことも自分の力量不足も全部納得したはずだったのに、心はついてこなかつた。

「行かないで」つて言つにそつになる。

でもそれだけは言つちゃいけな。すぐへ困らせるとなるか

5。

王様の考えもアレイさんの義務も願いも全てを否定することになつてしまつから。それだけは言つちゃいけない。

ぐつと我慢していると、アレイさんはぽんと頭に手を置いた。

「俺の前で我慢するな。見ちゃいられない」

「だつて……だつて……」

言つちゃだめだ。言つちゃだめだ。

アレイさんは屈むようにして紫の瞳で覗き込んだ。アメジスト紫水晶にはとても優しい光が灯つていた。

軽く唇の端が上がつた。

これまで数えるほどしか見たことのない笑顔だつた。

「ねえさんの前では言えなかつたんだろ？」

アレイさんは反則だ。

そんな優しい顔されたら、我慢できなくなつちゃうじゃないか。

「うつ……だつて……」

ぱりぱりと涙が零れ落ちてきた。

アレイさんの前で泣くのは一回田だ。一回田はラースに左腕を食べられた後だつた。あの時のアレイさんはとても優しく大きく包み込んでくれたんだ。

「分かつてのにつ……おれが弱いから……一緒にに行けな……」

紫色が滲んでいった。

拭つても拭つても涙は次から次へと流れ出してきた。

「でも、ほんとは、ほんとは……」

言つちやだめだ。それだけは。

無理やり口を閉じて、下を向いた。

涙がぽたりと床に落ちた。

俯いたままアレイさんの胸元に額を預けた。涙は止まってくれなかつた。

アレイさんは背に手を回してくれた。相変わらずその大きな手は温かくて優しくて、もつともつと泣いてしまった。

「顔、上げる」

無理だよ。

アレイさんのバカ。

胸元をぎゅっと掴んだ。額をますます強く押し付けて、絞り出すように言った。

「傍にいてくれるって言つたじゃん……」

あの舞踏の夜に。優しい瞳で見下ろして。

ずっと傍にいてやるって言つたのに。

「おれだって知らない場所でアレイさんが危険な目に遭うのなんてやだよ。すぐ助けられるように傍にいたいよ。おれに出来ることなんて……すごく少ないけど

だから今はもっと強くなるしかないんだ。

それはわかっているんだけど。

アレイさんが悲しそうな声で言つた。

「約束を破るつもりはなかつたんだ」

「知つてる。戦争だつて……王様が……この国を守つてつて……でも。それでも。

「うそつき

それは間違いじゃないけど、恐ろしくハガママな言葉だった。

アレイさんのせいじゃないのに。

見上げると、悲しげな紫の瞳が見下ろしていた。

もう我慢できなかつた。

「行かないでよ、アレイさん……！」

言つちやだめだつて思つてたのに。ずっとずっと我慢してたのに。自分はいつからこんなにもワガママになつてしまつたんだろ？。紫の瞳が辛そうな色を映じた。

「すまない」

ポツリと呟いた言葉はめちゃくちやに胸を締め付けた。

どうしようもなく切なくなつて、大声で泣き出したくなつた。

「どうしても行かなければならぬんだ」

滲んだ視界で紫色が近づいてくる。

額に軽く唇で触れた感触があつた。

少し驚いて目を開けると、今度は頬に一つキスをした 眠れな

い夜によくねえちゃんがそうしてくれたみたいに。

「俺はミコレク殿下のようにお前を安全な場所に匿う術など持たない。だから……待つている。お前が自分で俺と同じ位置に立てるようになるまで」

アレイさんはもう一度強く抱きしめてくれた。

足が地面から離れて、ふわりと浮いた。

「代わりにお前がいる王都を、この国を守つてやるから」

心地よいバリトンが響いている。

静かな鼓動が伝わってきて、温かな体温が触れて少しづつ心が落ち着いてくるのを感じた。

やつぱりここは世界で一番安心できる場所らしい。

満足するまでその安心を胸いっぱいに吸い込んでから、ゆっくり

の黒髪に頬を寄せながら小さく呟いた。

「「めんね、アレイさん。ワガママ言つちやつたよ」

首に手を回しました。

耳元で心地よいバリトンが響く。

「構わない。その方が……嬉しい」

「 そうなの？」

なぜワガママを言った方がいいんだろうか。

きっと困るからと思つてねえちゃんには絶対言わなことにしてるのよ。田の前で泣かないようすこじく我慢しているのよ。でもアレイさんが相手だとあんまりその我慢はまづましくいかないんだ。

なぜなんだろ？

きっとその気持ちを突き詰めていけば自分がねえちゃんに抱く好きという感情と、アレイさんに対しても抱く感情は別のものだつて気づいたはずなのに、このときの自分はそんなこと考えようとも思つてなかつた。

紫の瞳に灯る優しい光の意味を知りうともしてなかつた。

だからアレイさんがイジワルな理由も、抱きしめてくれる理由も、たまに優しくなる理由だつてぜんぜん分かつちゃいなかつたんだ。ワガママを言ってくれた方が嬉しいって言つてくれる」とも理解できなかつた。

自分がいろんなことに気がついたのはずつとずつと後のことでの、その時にはすでに掛け替えのないものをこいつも失つてしまつた後だつたんだ。

いっぽい泣いたせいなのか、ねえちゃんを笑顔で見送る事が出来た。

アレイさんはねえちゃんにものすゞく睨まれていて、とても屈づらそうにしていた。その視線は悪意とにつよつ嫉妒に近いもののような気がした。

首を傾げつつもねえちゃんに微笑みかける。

「行つてらっしゃい、ねえちゃん」
ブラックルビ

「漆黒星騎士団ではいい子にしてるのよ?」

「うん、だいじょうぶだよ!」

自然に笑了。もうだいじょうぶだ。

それを見てねえちゃんは少しだけ悲しそうな顔をした。

「もうあまり一緒にいられないかもしれないわね……寂しいわ」「どうして?」

「何でもないわ。私の可愛いラック。元氣でいるのよ?」
ねえちゃんは笑つて額に一つキスをしてくれた。

「行つてくるわ」

「うん。待つてて、強くなつてすぐに行くからー!」

大きく手を振つた。

馬車が小さくなつていいく。見えなくなるまでずっと手を振り続けた。腕も肩も痛くなつたけどやめなかつた。

最後に馬車が消えてしまつてから、もう一度涙が出そつになつたけれど、ぐつとこらえた。

泣かないぞ。強くなるんだ。

次にねえちゃんとアレイさんで会つままでに見違えるくらい強くなつて驚かせてやる!

すぐに自分の部屋に引っ込んでタンスをひっくり返した。漆黒星^{ブラックルビー}

騎士団と合流する準備をしなくてはいけない。

いま、気分が高揚しているうちにこの家を出なくては、またきっと不安になつてしまつ。

しかし王都に来てからやたらと服が増えてしまつたせいでなかなかうまくいかない。その様子を見かねたアイリスとリコ里斯が手伝ってくれた。

「このお服はどうなさいますか？」

「それはいいよ、置いていく。邪魔になるだけだ」

「こちらは？」

「そつちは持つてくれ、お気に入りだし」

ほとんど荷物がそういう頃、テーブルの花瓶に刺してある羽根のことを思い出した。純白のマルコシアスさんの羽根と、青みがかったクローセルさんの羽根だ。

「あ、そうだ。ねえ、アイリス。この間みたいにマルコシアスさんの羽根縫い付けてよ」

そう言うとアイリスの顔が曇つた。

「あ、あの、ラック様。実は……」

リコ里斯も困ったように見ている。相方に比べて少し大人しいアイリスは言いづらそうに言葉を紡いだ。

「その、マルコシアス様の羽根……悪魔の羽根が、その、私には少し毒気が強いらしく……」

「どうしたの？」

首を傾げると、代わりにリコ里斯が言った。

「この間羽根を縫いつけた後、アイリスは体調を崩してしまったのです。悪魔の羽根は普通の人にとってあまりよい影響を与えないですから」

「え、そうなの？」

「コイン自体も耐性のない者が触れていると精神が崩壊すると聞きます。私達のように一般の者にとつて悪魔の気は毒に近いものなの

です」

驚いた。

自分にとつてコインはお守りで、羽根は加護だ。むしろ身につけていなくてはいけないものだった。身につけているどころか一つは左手の甲に埋め込まれていてるぐらいだ。

「ごめん、アイリス。体調を崩しただなんて知らなかつたんだ」

「いいえ。でも、羽根を縫いつけて差し上げる」とは出来ないのです

「いや、おれ、自分でやるよ」

「でも、ラック様。お裁縫はあまりお得意では……」

「隣で教えてくれるかな、アイリス」

そう言つとアイリスは大きなブラウンの瞳で微笑んだ。

「ええ、喜んで」

裁縫をするのはとても苦手だった。

ずっとねえちゃんがやつてくれていたし、王都に着てからはアイリスに任せっきりだつたからだ。隣で見ていたから何となくやり方はわかるけれど、見ると実際やるのは大違いだった。

思うように針が進まない。

「やはり私がやりましょうか?」

「だめだよ、アイリスが体調崩すなんて。それに、おれまだまいろんな事できるようにならないといけないんだから!」

「ねえちゃんとアレイさんに追いつくために。」

「馬にだつて乗れないし剣は使えないし言葉遣いは駄目だし、できるようにならなくちやいけないことはいっぱいあるんだよ?」

「でもまだラック様はお若いですし、時間をかけて覚えていけばよいのでは?」

「ダメだよ。早くねえちゃんとアレイさんに追いつかなきやいけないんだ、おれは」

「人が大切で、隣に立つて守りたい存在だから。」

力を込めてそう言つと、アイリスは朗らかに笑つた。

「お嬢様は万能でいらっしゃいますからね。追いつくのはきっと大変でしょうね」

「うん。だから、おれがんばるって決めたんだ！」

田は必死で縫い目を追いながら、純白の羽根を縫いつけていく。「ラック様のそういうところが素敵だと思います。強い意思を持つて努力できる姿はとても輝いて見えます。自分もがんばらなくちゃつて思えるんです。そうやつてラック様は周囲の人を明るく照らしてくれているんですよ」

「おれはアイリスとリコリスがいてすぐ助かつてるよ？ 手伝つてもらつてばっかりだ」

「それが私たちの仕事ですから」

アイリスはそう言つて微笑んでくれたけれど、その笑顔だつてみんなを明るく照らしてくれると思う。

自分はきっと出会う人に恵まれているんだろうな。
この新しい世界に飛び込んでから、アレイさんもじい様も王様もサンもアイリスもリコリスもクラウドさんもダイアナさんも、もつともつとたくさんヒトに出会つたけれど、みんないいヒトたちばかりだ。

いまの自分は幸せだと思つた。

そして、そう思える事が一番幸せなんだろう。

がんばろう。

自分のためだけじゃなくて、みんなのために。

そう決心して漆黒星騎士団の訓練所に向かつた。

訓練所はインフェルノ・ゲートを出てすぐのところにあった。

広い敷地を持つそれには、弓や剣、槍など個々の建物としての練習場があり、また大きな闘技場もあつた。馬小屋もすごく大きくて、それも体躯のいい立派な馬ばかりが並べられていた。

騎士団員が宿泊する建物は全部で5棟。そのそれぞれに個人練習用と思われる道場がついていた。

出迎えてくれたクラウドさんは、案内しながら騎士団について教えてくれた。

「漆黒星騎士団^{ブラックルビー}は4つの部隊に分かれている。鳶^{とび}、鷹^{たか}、鷺^{わし}、鷲^{さき}と呼ばれている。鳶は主に弓部隊、鷹は剣、鷺は槍、鷲は女性の部隊だ。けれど、騎士になつたばかりで部隊わけされていない者たちは鴉^{からす}と呼ばれる少年部隊を作っている。主に15から17歳くらいの少年少女ばかりだよ」

「んじゃあ、ヨハンくらいだね」

「そうだね。ラック、君はまずそこで訓練を共に受けでもらおう。レメゲトン^{リメゲントン}ということは隠してある。若干季節はずれだが、私が才能を見込んで連れてきたということになつていてるから、一応そのつもりでコインは人目に触れさせないで欲しい」

「うん、わかった。気をつけるよ」

宿泊施設と思われる建物に着くと、その前で一人の少女が佇んでいた。いや、少女というにはもう成熟した大人の女性の顔をしている。

小麦色に焼けた肌に深い緑の瞳が印象的だ。少し癖のある橙に近い茶髪は適当に切ったのか揃ってはいなかつた。気が強そうな性格が顔に出ている……美人さんだけど、怖いヒトかもしね。

「ヴィックキー、この子が新しくお世話になるラックだ」「ラック……ファミリーネームは？」

気の強そうな女性の間にクラウドさんは慌てず答えた。

「ラック＝アキレアということにしておいてくれ」

アキレアってそれ、そこに咲いてる花の名前じやん？今考えたでしょ、それ！

その女性もちらりと咲いているアキレアの花を見たが、何も言わずに頭を下げた。

「かしこまりました」

「この子はヴィクトリア＝クラーク、少年組、鴉のリーダーだ。レメゲトンであることは彼女だけに教えてある。何か困った事があつたら彼女に相談するといこ

うん、分かった

「それじゃ、ヴィックキーのことを聞いていい子にしているんだよ

「はあ」

行儀よくお返事をすると、クラウドさんは頭を撫でてくれた。その様子にヴィクトリアさんが不可思議なものでも見るような目を向ける。

「ああ、そうそう、言い忘れてたけどラックの精神年齢はいろいろあって3歳児程度らしい。最近はもう少し成長したようだけれどね後は頼んだよ、ヴィックキー」

その言葉にさすがにヴィクトリアさんは顔を引きつらせたが、クラウドさんは有無を言わせない笑顔で去つていった。

「えーと、ヴィクトリアさん？ お世話になります。よろしくお願ひします！」

100点満点の挨拶が出来たと思ったのに、ヴィクトリアさんは頬を引きつらせていた。

「さて、レメゲトンについてだが、それは隠して一人の少年組として扱えとクラウド様に言われている。特別扱いはせんぞ」

「うん、いいよ

「返事ははい、だ」

「はい」

厳しい指摘を受けて言い直した。

「私のことはヴィックキー、またはリーダーと呼べ」「はあい」

「返事は短く!」

「は、はい!」

突然叱られて思わず背筋を正した。

「それに何だ、その言葉遣いは。クラウド様に向かつて『うん、分かった。』だと? 敬語というものを知らんのか!」

「ちょ、ちょっと翻つたけどまだあんまり使えないんだ」

剣幕に驚いて思わず腰が引けた。

その様子を見て、ヴィックキーは舌打ちする。

「全く……精神年齢3歳だつたな。どんな事情かは知らんがなぜこんな見た目と中身の合わん訳の分からん奴が来るんだ。もう戦争が始まつて一刻の猶予もないこの時期に」「違うよ、戦争が始まつたからだよ」

「何?」

「おれはレメゲトンだけど、なり立てで経験とか知識とか少ないからすぐには戦場に出してもらえなかつた。王様はここで修行しながらいつて言つたよ。おれは早く強くなつて戦場に行かなくちゃいけないんだ」

そう言つと、ヴィックキーはふう、とため息をついた。

「思つたより頭はしつかりしていそうだな。経験と知識が足りんと言つたな? 私が一から鍛えなおしてやる!」「ほんと?」

嬉しい。

思わず微笑むと、ヴィックキーは眉間に人差し指をつきつけた。
もともとそんなに目つきがよくないのに、さらに目が釣りあがつた。

「まずは敬語からだ！」

「えええ！」

敬語は苦手だよ！

「つべこべ言うな。部屋は2階の4号室、さつさと荷物を置いて道場に来い。かぶす鴉組全員の前で紹介する」

「わ、分かった。」

「分かりました、だ！」

「分かりました！」

ひええ。

どうやらヴィックキーは見た目どおり厳しい人みたいだった。
また怒られる前にと慌てて荷物を置いて道場への廊下を駆け抜けたのだった。

道場にはすでに20人以上の少年少女たちが勢ぞろいしていた。
ヴィックキーに連れられて道場に足を踏み入れると、その視線が全てこちらを向く。さつと見ただけで女性はほとんどいなかった。
集まつた少年たちの間からため息が漏れるのがわかる。しかし、落胆した様子ではなかつた。

「すでに聞いていると思うが、かぶす鴉に一人新しく増えることになつた。
これからは訓練を共に行う仲間だ」

「ラック＝グ……じゃなかつた、ラック＝ア、ア、アロンソア？です。よろしくお願ひします」

なんだかさつきと苗字が違つた気がしたけど、まあいいや。同じ花の名前だし。

隣にいたヴィックキーの顔が引きつった。やっぱり違つていたらしい。

「時期はずれだが、クラウド団長の推薦で騎士団に配属されることとなつた」

その瞬間、目の前の人ごみがざわりとざわめいた。

「静かに！ 明日からはラックも訓練に参加する。主に剣術中心になると思う。慣れない事もあるだろうから、助けてやつて欲しい。以上だ！」

ヴィックキーがそう宣言すると、少年たちは解散した。

前を通るときにひどく視線を感じる。団長が推薦するほどの腕を持つものに向ける敵意を持つ視線や、ただ珍しいものに向ける視線、他にも興味の視線などいろいろだつた。

「メリル、シア。少し来てくれ」

「はい、リーダー」

ヴィックキーはその中から女性2人だけを呼びとめた。

「とりあえず女性だけ紹介しておく。左がメリル＝Ｋ＝ファーランドル。今年入団したばかりの15歳だ」

「よろしく、ラック」

メリルは黒いカチューシャをしていて、大人しそうな印象を受けた。でも若草色の瞳に灯る光は理知的だつたからきっととても賢いんだろうと思った。身長が低くて少し見下ろしてしまって、笑顔がふわりと優しくて、思わず微笑み返してしまつようなかわいらしい少女だつた。

「もう一人はシンシア＝ハウンド。おそらく来年には私と共に鷲部隊に配属されるだろ？」

シア、と呼ばれた女性はあまり表情を変えずに軽く頭を下げた。すらりとした長身で、銀髪を耳にかかるくらいで切つている。硬く結ばれた唇と表情を灯さない眼はまるで線の細い少年のそれだつた。それも白い肌にひどく目立つ紅梅色の瞳が壊れそうな危うさをかもし出している。

白い毛並みの兎みたいだ。

思わず見とれていると、ヴィックキーが止めた。

「やめてやつてくれ、シアは見られるのが嫌いなんだ」

「あ、ごめん」

確かに自分だつてこんなじろじろ見られたらいやだらう。

「でも、すゞく綺麗だね」

にこりと笑いかけると、シアは田線をはずした。

メリルは楽しそうにくすぐすと笑う。

「それをラックが言つの?」

「何で? どう見たつて綺麗じやん」

「違うわ。だつてラックだつてすゞく美人だもの」

「ん、ありがと!」

たまに言われることではあつたが、お世辞だらうからとつあえずお礼だけ言つておく。

「メリルもすゞくかわいによ。ヴィッキーも美人さんだし、おれここのよかつた」

正直にそう言つて、ヴィッキーがまたも奇異なものを見る田で見下ろしていた。

「お前……まさか面食いか?」

「ん、たまに言われる。たぶんそづ」とくにねえちやんによく言われる。

でも、綺麗なヒトが好きなのって普通じゃないのかなあ?

そう聞くと、度が過ぎるのよ、とねえちやんは眉を寄せた。綺麗だなと思わなかつた人の顔を覚える気がないでしょ? と言わた。まあ確かにそうかもしねりない。

だから王様の顔を覚えるのに苦労したんだ。

でもそれは、一度と口に出しちゃいけないわよ、とねえちやんこ硬く口止めされていくことなのだつた。

部屋はどりやら4人とも同じしきつた。入ってすぐにベッドが4つ並んでいた。カーテンの色が淡いピンクだし全身が映る大きな立ち鏡もあって、どこか女性らしい部屋だ。

右手には扉があり、そこは勉強部屋だと言われた。のぞいてみると、よく使い込まれた木の机と、たくさんの本が並んだ棚があつた。ベッドの横の収納はさすが充実している。持ってきた武器も含めた荷物を簡単に片付けていると、メリルが声をかけてくれた。

「ラックはどこから来たの？」

「カトランジエだ」

自分の代わりに向かいのベッドのヴィックキーが答えた。
きつとぼろが出ないように説明を代わりにしてくれるんだね。異様な説明口調で彼女は一気に言った。

「小さな武道大会があつて、そこに出場していたのを団長が偶然発見されたらしい。両親はいない。カトランジエで知り合いに拾われて育てられた。まだ荒削りだが磨けばよいものが出来るだろうとのことだ。剣術はそれなりに使えるが馬術に関しては素人、基本的な生活は出来るがわけあって少し頭が足りない」

その勢いに少々押されながらも、メリルは聞き返した。
「リーダー、頭が足りないって、どういうことですか？」

「言葉通りだ」
にべもなく切り捨てる。

あれ、この感じ、知ってる気がするよ。

「少々阿呆の鳥頭だ。苦労かけるかもしけんがよろしく頼むぞ、メリル」

「分かりました」

鳥頭、阿呆　この単語でぴんときた。
誰かに似ていると思つたら。

「ヴィックキーはイジワルだね、アレイさんみたいだ！」

「アレイ、さん？」

メリルが首を傾げる。

ヴィックキーが怒ったような口調で言い放つた。

「カトランジエの街の誰かだろ？！ ラック、お前はもう余計なことを喋るんじゃない！」

本当にアレイさんそっくりだよ！

びっくりすると同時になんだかとても嬉しかった。

シアはその様子を特に表情を変えずに眺めている。ヴィックキーは不機嫌そうに腕を組み、メリルは困ったように微笑んでいる。なんだかとても楽しくなりそうな予感がした。

その日の夜は夢を見た。

丸い窓だ。遠い。手を伸ばしたけれど届かない。壁は冷たい黒い石で覆われていた……ひどく寒い。

目に映る自分の手はとても小さい。とにかく赤くなっているのは寒させいだろうか。それでも必死に窓に向かって手を伸ばしている。

窓から見えるのは光。

青白く冷たい月光が差し込んでいる。

その月に、必死で手を伸ばしていた。

絶対に届かないことは分かつていても、青白い月光が本当は橙の柔らかな光を映すと知っていたから、その光を求めていた。

「…………シ…………ファ…………」

自分の喉から声が漏れる。

かすれた声だ。寒さで震えてうまく言葉にならなかつた。

黒い壁は絶対的に自分を取り囲み、ただ遠く届かない窓だけが唯一の光だった。寒さに震えながらずっと光を追い求めていた。

焦がれても手に入れられぬと知つていながら

次の日はメリルに起された。

「ああ、おはよ、メリル」

眠い目をこすりながらベッドに起き上がる。若草色の瞳が初夏の草原みたいに朝日を受けて煌いていた。

何か夢を見ていた気がする　すごく、寒かつたような。

「おはようラック。朝ごはんよ、行きましょう」

「え、うん」

慌てて普段着に着替え、メリルの後を追つた。

他の部隊と違つて鴉部隊には決まつた制服がないらしい。メリルは瞳と同じ若草色の膝まであるローブに近いものを着ている。が、前部分に大きくスリットが入つていて黒いタイツがベージュ色のブーツから伸びているのが見えていた。黒いベルトに武器を装着してはいなかつたが、おそらく短剣を括るであろう皮製のサックが見えた。

自分はと言えばいつもの紺のハイネックアンダーウェアと紺のスパッツに、水色の短衣。足元はサンダルだ。その辺を歩いていたときの格好と大差ない。

左手の甲は念のため包帯を巻いてその上から籠手をつけた。右手首のコインはペンダントに代えて首に下げてある。

「食堂は1階にあるの。当番が交代で食事を準備するのよ。そのうち当番も回つてくると思うわ。3日交代で2人組みなの」

「へえ。おれは誰と組むんだろ?」

「そうね、私たちが3人で一組になつているから、一組に分けることになるかもしれないわ。きっとそのうちヴィッキーが決めるでしょう」

食堂に入ると、みんなの視線がこちらに集中した。

メリルは気にせずにこにこと解説を続ける。

「鴉部隊はラックを除くと今は25人、食堂は16席しかないから、

順番に食べるのよ。」飯の時間と稽古の時間や掃除の時間はまた後

で教えるわ」

「分かった。がんばって覚えるよ」

「どうやらこの生活に慣れるまでにはかなりたくさんの」とを覚えなくてはいけないようだ。

メリルは先に朝食をとつていたらしいシアとヴィックキーの隣に座つた。

ヴィックキーもメリルと同じような服を纏っていた。ただ、シアは男性用の騎士服を纏っていた。それは美貌の彼女にとてもよく似合っていた。シアは黒、ヴィックキーは赤、色が一人の性格を表しているようで少し面白かつた。

「おはよー、ヴィックキー、シア」

「おはよー!」ぞこます、だ。やり直し…」

「はうっ!」

しまつた、初っ端からヴィックキーの機嫌を損ねてしまつた。

「お、おはよー!」ぞいいます

「よろしく。メリルもこいつに敬語を徹底的に叩き込め。クラウド団長に対する態度すらなつていないので」

どうやらヴィックキーはクラウドさんに敬語を使わなかつた事が気になつて仕方がないらしかつた。

「分かりました、リーダー

「うあー!メリルまで!」

敬語は苦手だよ!

その様子を見てもシアはほとんど反応しない。紅梅色の瞳でちらりと見ただけだった。

そこへ、両手にトレイを持った少年が割り込んだ。

「はい、姫。それに……えーと、ラックだつける?」

「ありがとう、ルーク」

……え?

「どういたしまして、姫」

ルークと呼ばれた少年はにこりと笑つた。

褐色に近くなるまで焼けた肌に金の瞳が目立つ。あちこちにはねた黒髪と相まってまるで金田の黒猫のような少年だった。それほど大きくない体もしなやかで、本当に猫みたいだった。

きつちりとした騎士の服は着ておらず、作業用のズボンにラフなノースリーブ姿だった。その上に食事当番用と思われる白のエプロンをつけているのが滑稽だつた。

「えと、初めまして。ラック＝アザレアです」

「アロンソアじやなかつた？」

ルークが首を傾げる。

ヴィックキーの顔が引きつった。ああ、また名前間違つてたか。でももういいかなあ。めんどうだし。

「何でもいいじゃん

「いやまあ、俺はいいけどさ、本人がいいんなら」

そうやって流すあたりどうやらルークは大雑把な性格らしかつた。

「俺はルーク＝ハンバキア、たか鷹部隊を目標しててるんだ」

「私の乳母の息子なの。一緒に育ってきたから、もうほとんど兄妹みたいなものよ。ルークの方が1つ年上だけれど」

乳母つことはメリルは貴族の娘なんだろうか。あ、でも、騎士団の中じゃ平民も貴族もないってアレイさんが言つてたつけ。

黒猫のルークは持つていたトレイをメリルに恭しく差し出した。

「俺はメリル姫の小間使いだから」

「もう、やめてよルーク！」

メリルが軽く頬を染める。

「ルーク、ルークつて言つんだ」

「俺の名前がどうかした？」

「ん、ちょっとね」

ラースが……滅びの悪魔グラシャ・ラボラスが自分のことをそう

呼んだ。君はそう名乗つたじゃないか、と言つた。

ルークと言う名に意味はあるんだろうか。

「ルークってさ、どんな意味なの？ 古代語？」

「ん……」

ルークは声を潜めた。

「実は、セフィロト国の大古代語で、綴りは「-ヒ-キ……『光』」つていう意味なんだ。戦争相手だし今じゃ大声では言えないけど。」

「『光』？」

「そう」

どくりと心臓が脈打つた。

あの銀髪のヒトが相手をそう呼んでいた 青いオーラの半眼のヒトを『光』と呼び、また赤いオーラの激しいヒトは『音』と呼ばれていた。

やばい。また思い出しちゃった。

青みがかつた銀髪と深い群青の瞳、陶器のように滑らかな白い肌……思い出して心が騒ぐ。

会いたい。

「大丈夫か？ 顔色が悪いぞ。」

はつとするとヴィックキーが覗き込んでいた。

「あ、うん、だいじょうぶ」

言つたが額には汗が浮かんでいた。

「無理はするな。朝食後すぐ稽古が出来る服で道場に集合だ」「分かつ……分かりました！」

「よろしい」

ヴィックキーは返事に満足したように笑うと、シアと共に食堂を出て行った。

SECT・6 ライガニアンタレス

まだ部隊分けされていない鴉は、基本的にどの分野も等しく鍛錬を行う。時間と週ごとに区分けされたそれはまるで学校の時間割のようだつた。

ただ、ヒトによつて目指す部隊が違う。選択の時間も多く、みな積極的に自主練習を行つてゐるようだつた。

「基本は午前、午後に分けられる。剣術、弓術、槍術、馬術、棒術、体術など多くの種類があるが、騎士団の先輩方が教鞭を取られる時間はさほど多くない。できれば先輩がいらっしゃる時間に稽古に出たほうがいい」

ヴィックキーはまず鴉部隊の訓練施設内を案内した。
からす

自分を入れても総勢26名の部隊とはいえ、さすが施設はしつかりしている。最初に紹介された道場をいれると、全部で4つの稽古場がある。外の広場も含めると、100人単位での活動が可能だろう。

「お前は主に剣術と馬術だつたな。馬の厩舎は少し遠い」

「あ、それ、最初に入ってきた時見たよ。あの入り口の右手にあつた奴だよね？」

「敬語！」

「え、えーと……入り口の右手にあつた奴……ですね？」

「そうだ」

ヴィックキーの後を追うように馬小屋にたどり着いた。

馬小屋、と言つても大きさが尋常ではない。100頭以上の立派な馬がずらりと並ぶ姿は壯觀だ。

と、その端にまだ成熟していない子馬たちが柵に囲まれているスペースを見つけた。

「かわいい！」

思わず駆け寄ると、ヴィックキーの怒声が追いかけてきた。

「勝手に動くな！」

「ごめんなさい」

謝りつつも視線は小さな馬に釘付けだつた。

体高が自分の腰くらいまでしかない。もつと少し大きいものもあるが、まだ生まれたての子馬と思われる数頭が柵の中を歩き回っていた。

「それは今年生まれたばかりの子馬ばかりだ」「うわー、ちっせえ！」

ひょいっと柵を乗り越えて中に入ると、子馬たちは突然の侵入者に驚き、おびえた声を出した。

が、その中で最も大きな馬だけはその場に佇んでいた。

こげ茶の毛並みはふわふわとしてさわり心地がよさそうだ。鬚にはほんの少し栗毛が混じっている。角度を変えると金色にも見える淡い茶の瞳はとても愛らしく、大きさはほとんど大人と変わらないのにひどく幼く見えた。

「おいで」

手を伸ばすと、ゆっくり近寄つてくる。

そつと首の辺りに手を触れたが、おびえたりはしなかつた。

「よしよし」

見た目どおりの毛並みはとても柔らかく、墮天の翼に触れたときのように心地よかつた。

まるで猫のように気持ちよさそうに口を細めたこの馬は、さらに撫でもらおうと身を乗り出してきた。鼻息が頬にかかるて少しひつくりしたけれど、すぐに頭を抱きかかえるように撫でてやる。

「何をしている。そんな幼い馬にかまつている暇はないぞ」

「ん。でもこいつかわいいよ？」

「そんな事は聞いていない！」

ヴィックキーの顔が引きつった。

ああ、また怒らせてしまったようだ。

と思つていたら後ろから声がした。

「気に入つたかい、譲ちゃん」

「うん」

振り向くと、漆黒の騎士服に身を包み黒のマントを纏つた男性がこちらに向かつて微笑んでいた。胸元には王家の紋章に並べて鷹の紋章が光っていた。

年はアレイさんと同じくらいだらう、身分の高い騎士の様相に似合わない真っ青なバンダナを頭に巻いている。そのせいで顔はうまく見えなかつたが、口元で楽しそうに笑つているのが分かつた。
「ライガ部隊長！ 申し訳ございません、この者は新人で、敷地を案内している所です。すぐに戻りますので……」

「ああ、団長が言つてたレメゲトンてのはこいつか」「ご存知でしたか」

「ああ、部隊長クラスまで情報は出回つてゐる。王様じきじきの『命令だつてこともな」

その男性はじろじろと自分の手で回すように見えた。
なんだ、知つてゐるならいいか。

「ラック＝グリフィスです。よろしくお願ひします」

「おう、俺はライガ＝アンタレス、たか鷹部隊の隊長だ」

ライガさんと名乗つたヒトは今時分に擦り寄つてゐる馬の頭を撫でた。

「こいつは今年の頭に生まれたやつだ。あと半年もすればさつといい馬になる。何しろガイとイオの息子だからな」

「名前は？」

「まだない。もう少しして乗り手が決まつてから決めるんだ」

「この仔に乗るヒトはまだ決まってないの？」

「そうだ」

その馬をじーっと見てゐると、なんだか知つた顔に見えてきた。

ふわふわのこげ茶の毛並み、まん丸の金色の目。

「ふふ、お前はヨハンにそっくりだな」

子犬みたいに丸い目をしたねえちゃんの弟のヨハンにそっくりだ

つた。

「ヨハンてヨハン＝J＝ファウストか？ 確かにそつくりだ」

「ライガさん、ヨハンのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、今年の騎士団試験は俺が担当したからな。あいつはなかなか筋がいい。輝光石騎士団に入団したんだつたな」

「うん。ねえちゃんと一緒だって言つてたから」

「ねえちゃん」というとメフィア＝R＝ファウスト女伯爵だな。何度か見たがすげえ美人じゃねえか。家柄もよくコインを5つも所有するレメゲトンの長。しかもこの上ないくらいのいい女だ。ぜひともお近づきになりたいもんだねえ」

「……ライガ部隊長、もう少しお言葉を慎んでください」

ヴィックキーが顔を引きつらせている。

「いいじゃねえか。お前も来年には鷺部隊に入るんだろ。貴族さんたちと会う機会も増えるだろ？」「いえ、私は……」

ヴィックキーの顔が曇った。

何か嫌なことでもあるんだろうか。

思つているとヴィックキーはライガさんに向かつて軽く礼をした。

「失礼します。いくぞ、ラック」

「あ、うん」

もう少しライガさんと話してみたかったけれど、仕方がないので青いバンダナの鷺部隊長さんに大きく手を振った。軽く手を振り替えしてくれたのが嬉しかった。

ヴィックキーは一言も喋らずに歩いていく。

「ねえ、ヴィックキー。何か怒つてるの？」

「……」

「おれ、何かした？ 嫌なこと言つたんなら謝るよ」と、ふと足が止まつた。

「……すまん、お前のせいじゃないんだ」

ぱつりとヴィックキーが言った。

「いや、私の気持ちの問題だ。もうどうしようもないことなんだが、なんとも納得できんのだ」

「何のこと?」

首を傾げると、ヴィックキーは悲しそうな顔で微笑んだ。

「余計な気を使わせてしまったな。すまない。さあ、道場に戻ろう。午後からは訓練に参加してもらう」

ぽん、と頭に手を置かれてすごく嬉しかったんだけど、でも悲しそうな顔が眼に焼きついてはなれなかつた。

午後は剣術の訓練に参加した。

先輩が指導に来るというので参加人数は多く、ほとんど全員が顔を出していた。20人近い少年で道場はいっぱいだった。

メリルとシアもいたし、今朝会つたルークの姿もあった。ヴィックキーは木刀を一本貸してくれた。

マルコシアスさんとアレイさんとの稽古以来だ。

「剣術の心得はあるんだつたな。流派は?」

「ん、わかんない。もともとは短剣を使ってたんだ。しっかり稽古してもらつたのは一回だけだよ。あとは実戦で何度も使つたけど」

そう言つてヴィックキーは頭を押された。

「たつた一回の稽古で実戦? お前の師匠はいつたい何を考えているんだ?」

「師匠はマルコシアスさんとアレイさんだよ。たぶん何も考えてないよ」

「……頼むからその名は他の人の前で出さないでくれ。その上その言い分は一人に失礼だと思わんのか? わかった、最初に軽く打ち合つてみる。話はそれからだ」

「はあい」

もう諦めたのか、ヴィックキーは敬語のことについて口へうるやく言

わなくなった。

稽古場の一箇所で、ヴィックキーと距離を置いて木刀を構えた。

「私が受けよう。好きに打つてくれるといい」

「あ、でも……」

口を開こうとしたとき、道場の入り口の方から大きな声が飛び込んできた。

「元気にやつてるか?！」

「隊長、うるさいです。みんなが驚いていますよ？」

それをたしなめる声。

見ると先ほどの鷹部^{たか}隊長ライガさんが金髪の青年を引き連れて入ってきたところだった。相変わらず楽しそうに笑うライガさんの隣の青年は小さくため息をついていた。

どうやら今日指導に来る先輩というのがライガさんだつたらしい。「ライガ部隊長、」足労ありがとうございます。ファイ先輩も、ありがとうございました」といいます」

ヴィックキーが真っ先に出て行って膝を折る。

黒い騎士装束に身を包んだ一人に、周囲の少年たちも膝を折った。どうしようもなく果然と一人突っ立っていると、ライガさんがこちらに向かつて歩いてきた。

「よつ、ラックだつたな。どうだ、やつてるか?」

「つづん、まだ。今ヴィックキーが相手してくれるとこだつたんだ」

「おお、そりやすまん。続けてくれ、ヴィックキー」

「本当にお邪魔しました。すみません」

ライガさんの隣の青年はぺこりと頭を下げた。すくいヒトそうな感じがした。

気がつくと周囲の視線がすべてこちらに向かつていて、ヴィックキーは頭を押さえて大きくため息をついた。

SECT・7 明日への期待

ヴィックキーが木刀を構えて前に立つた。

「どこからでも打つてこい」

「うん。行くよ！」

騎士の試験をパスして鴉部隊のリーダーをするくらいなんだから
きっとヴィックキーはとてもなく強いんだろう。

両手で木刀を握り締めた。

いつの間にか周囲はギャラリーで固められていた。

「がんばって、ラック！」

メリルの声援ににこりと笑って応える。

ライガさんともう一人の騎士さんも見学しているようだった。

ヴィックキーの構えはアレイさんともマルコシアスさんとも、また
セフィラとも違う構えだった。少し切つ先が下がり気味で刀身が偏
っている。

手加減は無用だ。

マルコシアスさんとやつっていた時のように、とりあえず構えを崩
すべく打ち掛かった。

「やーっ！」

気合と共に放った攻撃は、ヴィックキーの揺れるような動きでかわ
された。

いや、軽く木刀が触れている。

ほとんど音もなく受け流されたのだ。

続けて放つた二波も流れに逆らわないよう柔らかな動きでいなさ
れた。

「！」

自分はこの剣を知っている。

木刀の切つ先をすれすれで見切つてかわすこの動きは何度も見て

いる。

構えは違うが、マルコシアスさんやアレイさんが自分に教えてくれた動きととてもよく似ている。いや、ほとんど同じと言つてもいいだろ？

数合打ち合つたけれど、ヴィックキーの防御を崩せる気配はなかつた。

「困つたな」

声に出して、いつたんヴィックキーから距離を置く。すると向き合つて『かいす』いる鴉部隊リーダーは軽くため息をついた。

「戦闘中に『困つた』などといつ奴があるか」

「でも実際困つてるんだよ」

それでも真剣な女剣士の深緑の瞳から田を離さない。これはねえちゃんと習つた戦闘の基本だった。

しかし、このままでは埒が明かない。

さて、どうしようか。

しばらく考えて、決めた。

「うん、決めた」

「遠慮せず来い！」

まずは木刀を左手だけに持ち変える。

イメージと合わせる為だつたのだが、その不思議な行動に、ヴィックキーは眉を寄せた。

それを気にせずにつと笑う。

「行くよー。」

広い道場の一角、多くのギャラリーが見守る中、左手で木刀を構え、最大の武器である速さを生かして超速の突きを放つた。さすがのヴィックキーもこの速度で下がることは出来ず、右にステップして避ける。

それは予測済みだ。

もう一步踏み出して逆手で横になぎ払う。

「くつ！」

初めて、ヴィックキーの防御が遅れた。

返し様上から振り下ろした攻撃を彼女は木刀を横にして受けた。

「カーン！」

深緑の瞳が歪んだ。

あまりにイメージした通りなのでびっくりした。

さらに、受け流すことが出来ず真正面から受け止められた太刀の力の方向を少し変えてやると、木刀はすべるようにヴィックキーの顔の横へ降りてきた。

集中しているせいか、自分の木刀の動きもヴィックキーの動きもスローモーションに見えた。

頭の中にある彼の動きを正確にトレースして、ヴィックキーの横へ一步踏み出す。

同時に右手を木刀の柄に添えた。

「！」

「チェックメイト！ なんちゃって」

上からの攻撃を受けたままの形で固まっているヴィックキーの真横に入り込み、腕と首の間に差し込むようにして喉元に刃を押し当てるのだ。

その場に沈黙が訪れる。

驚いたように見開かれた深緑の瞳が真横にあつたので、にこりと微笑んでみた。

その瞬間、大きな笑い声が響き渡った。

「ははははは！ すげえな、お前！」

声の主は鷹部隊長のライガさんだった。

喉元に据えていた木刀を引き、見守っていたヒトたちに笑いかける。

「ありがと。でも、ただ他のヒトを真似ただけなんだ。おれが考えたわけじゃない」

今の技は左手で剣を振るう優しくてイジワルなあのヒトがマルコ
シアスさん相手に見せたものだった。

残念ながらあの時はマルコシアスさんに通用せず、真横に入り込んでことで逆に背後をとられるという結果になってしまったのだけれど。

「人の技を真似る事ができるといつのはそう簡単なことではありますね。さすがクラウド団長が推薦しただけはありますね」「ライガさんの隣の金髪の青年が困ったように微笑んだ。「ヴィックキーが受けるのみだつたとはいえ、一本とつてしまつとは」「末恐ろしいガキだな、おい、ファイ。お前もやってみるー。」「いえ、遠慮します」

温和な顔と優しそうな笑顔に似合わぬきつぱりとした口調で断ると、金髪の青年はこちらに向かってにこりと微笑んだ。

「私はファイアライト＝リドフォール、鷹部隊に所属しています」

「ラック＝アー……アキレアです。よろしくお願いします」

あれ、昨日と名前違わねえ?などとギャラリーから聞こえたのは無視することにした。

誰になんて名乗ったかなんてもう忘れちやつたよ。

「よろしく、ラックさん」

「ラックでいいよ、ファイアライトさん」

「では私のこともファイ、とお呼びください」「ん、でもこのヒトはさきつと年上だから。

「ファイ、やん」

「お前は敬語を使わんくせに妙なところだけ律儀だな」

気がつくとヴィックキーが隣に来ていた。

「まさかやられるとは思つてもみなかつたぞ。他人の動きを真似したと言つたな。他にもできるのか?」

「うーん、バリエーションが少ないし、ヴィックキーみたいにおれと似た感じの剣を使うヒト相手じゃないとつまく決まらない技ばっかりだから、実はあんまり役に立たないんだよ

「じゃあお前、剣の稽古だけは鷹部隊のほうに参加しない？」

「ラ、ライガ部隊長？！何をおっしゃるのですか？！」

ヴィットキーが驚いた声を出すと、ライガさんは当たり前のよう

言った。

「こいつの能力を生かす場合、できる限り多くの剣を見せた方がいい。それならこより鷹^{たか}の稽古場のほうがよっぽど合ってると思うぜ？」

その言い分にファイさんがきっぱり口を挟む。

「隊長、さすがにそれは問題があります。彼女は今日訓練に参加したばかりなのですよ」

「団長には俺から言っておくわ。時間は後でファイが連絡する」「

「しかも私ですか？！」

「ファイさんの突つ込みと叫びをライガさんは完全に無視してヴィッキーのほうを向いた。

「いいか、ヴィットキー」

「……はい、分かりました。部隊長がそうおっしゃるなら」

「よし決まり。おい、ラック。お前は力なさそうだから剣は両手で握つた方がいいぞ。剣を吹つ飛ばされたらどうしようもないだろ？」「

どこかで聞いたようなアドバイスに驚いた。

「うん、それは他のヒトにも言われたよ。気をつけよ」「ならない」

青いバンダナの部隊長さんは楽しそうに笑った。
隣でファイさんは頭を抱えて大きなため息をついていた。

その後、取り巻いていた鷹^{かづ}のメンバーは個人の稽古に移つていった。ライガさんとファイさんはその間を歩き回り、簡単な指導をしているようだ。

その中にメリルとシアの姿もある。

その様子をいつたん見渡してから、ヴィックキーは自分に聞いた。

「お前が使うのも私と似た型なのか？」

「うん、そうだね。攻撃を弾くんじゃなくて受け流せ、ってマルコ・シアスさんが何回も何回も言つてたから」

「そうか」

ヴィックキーは少しの間何かを考えているようだった。

「お前の場合は時間がない。眼がいいようだし、身体能力も優れているのだろう。人の型を盗むのが手っ取り早いのは分かるのだが、やはり基礎を疎かにしてはいけない」

「うん」

「返事ははい、だ」

「はい」

「これまで経験した型が私のものに似ているのなら、基礎は私が個人的に見ることにしよう」

「ほんと?」

「敬語!」

「ほ、本当ですか」

しまった、ヴィックキーの調子が元に戻つてしまつた。

「鷹部隊の訓練には今朝会つたルークを含めた4人が参加している。他にも私とシアは鷺部隊の稽古に週何度も参加している。そちらにも顔を出すといい。今度連れて行つてやろう」

「ありがとうございます……」

「よろしい」

満足げに頷いたヴィックキー。

「今晚、ファイ先輩の伝令を受けてから予定を立てることにしよう。馬術の方も考えなくてはいけないからな」

「お願いします」

「お、だいぶ敬語が板についてきたな」

「ほんと?」

「あ、しました。」

「ほ、本当ですか……」「

「いや、やはりまだまだだな。たか鷹部隊に顔を出すのならそれなりの礼儀は覚えねばならん」

「ひえええ！」

剣術に馬術、それに敬語。

まだまだ自分に足りないものは多い。

それでも明日からは本格的に訓練が始まるのだから、たくさん的事を吸収していければいいだろう。

今日はわくわくして眠れそうになかった。

また夢を見た。

丸い窓が遠い。でも、寒くはなかつた。

目の前に立ち塞がる黒い石の壁はとてもなく冷たかつたけれど、手は悴んでいなかつたし吐く息が白いこともなかつた。

ふと振り返るとそこには簡素なベッドと机がひとつだけある。机には白いノートが広げられていた。

ゆっくりと机に近づく。そして椅子に座ると、小さな手で置いて

あつたペンを取り、続きを書き始めた。

今日はリリイが来てくれる日だ。どんなお話をしてくれるのか楽しみ

そこでふとペンを止める。

この黒い石の壁を見つめ続けて、季節は幾度かの春。きっと外は暖かい日差しに溢れているんだろう。木々が芽吹いて蕾は綻ぶのだろう。

外に、出たいな。

振り返つてまた小さな丸い窓を見上げる。

ただ、いつも見上げるだけ。

次の日はメリルに起されたる前に目覚めることができた。が、見るとベッドには3人とも姿がない。

「どこいったの……？」

太陽がちょうど山から顔を出す直前だ。食事当番でもない限りこの時間はまだみな眠っているはずだった。

そつとベッドから起きたした。

ちょうどいい機会なのですつと巻きつけなしだった包帯を取り替えて、その上から籠手を装備した。一応小太刀も腰に差して部屋を

抜け出す。

いつたい3人ともどこへ行つたんだろう?

2階の廊下を歩いていると、外からヴィックキーの声がした気がした。

「ヴィックキー?」

窓からのぞくと、宿泊棟の前広場に人影がちらほらと見えた。

慌てて階段を駆け下りる。

扉を開けて外に飛び出すと、そこでは数人の少年少女が剣を振るっていた。

その中で木刀の素振りをしていたヴィックキーが自分に気づいて手を止めた。

「ああ、おはよづラック」

「おはよづ……じぞいます」

見るとそこにはシアとメリルもいて、さらにルークと知らない少年が2人混じっていた。

「まだ朝食には間がある。ずいぶん早起きだな」

「ヴィックキーたちだつて。起きたら誰もいなかからびっくりしたよ

ひよい、と肩をそびやかすとメリルが言った。

「だからラックも誘おうつて言つたんですよ、リーダー」

「いや、環境に慣れるまで睡眠は十分とつたほうがいいと思つたんだが」

「いいじゃん、ばれちゃつたならラックも一緒にやつたら?」

黒猫のルークがにこりと笑う。

「仕方ないな。私たちは毎日早朝稽古をしているのだ。外が明るくなつてから朝食の直前まではんの数刻だが少しでも鍛錬になればと思つて始めたものだ。毎日参加しているのは私とシア、それにルークの3人だが、他のメンバーは入れ替わりで入つてくる」

ヴィックキーが言うとメリルは照れたように微笑んだ。

「私も実は今日が初めてなの。昨日ラックの動きを見て……ちょ
と私もがんばらなくちゃ なあ、なあんて」

「メリル姫はねぼすけだからな」

ルークが茶々を入れてメリルは若草色の瞳で睨みつけた。

初対面の少年二人もにこにこと笑いながら言った。

「俺たちの参加理由も似たようなもんだけどな」

「そうそう。昨日今日入ってきた新入りに負けるわけにはいかないもんな」

「何だ？ それは昨日ラックに負けた私に対する嫌味か？」

ヴィックキーがじろりと睨むと少年たちは慌てて否定する。

「まあいいだらう、きつかけはどうあれ鍛錬に励むのはいいことだ。ラック、この二人はお前と共に鷹部隊の訓練に参加することになる。分からぬ事があつたら聞くといい。左が口ナルド、右がジンだ」

「えと、その、よろしくお願ひします！」

ペコリ、と頭を下げるど、少年たちは呆けたように口を開けた。

「うわー近くで見るとマジでかわいいんだけど！」

「やべー。アレックスたちに自慢しようぜ！」

訳がわからず首を傾げているとヴィックキーがあきれたようにため息をついた。

「お前たちは全く……剣以外のことはまるでガキだな」

口ナルドと呼ばれた方は同年代の少年たちに比べるとかなり発育がいい。一端の大人のような大きな体をしていた。それでもやはり顔にはあどけなさが残っていた。赤茶の髪とそろえた騎士服はなかなか様になっている。

対してジンはルークとそう変わらないほどの小柄で細くて吊りあがつた目をしていた。黄金色で癖のある髪があちこちに飛び跳ねている。ルークが黒猫ならジンはるがしこい狐みたいだった。

「えーと、ルークと口ナルドとジン」

黒猫がルーク、大柄な口ナルド、狐のジン……自分の中では繰り返すようにして覚えた。

以前ほどのいろんな事を暗記するのが苦手ではなくつっていたのは幸いだ。それでもここ2日くらいでたくさんヒトに会いすぎて、

全員は覚え切れていた。

「もう今日は時間がないが、明日は朝起きられれば参加するといい。途中からでも構わないし、稽古したくなかったら参加しなくてもいい」

「うん、明日から絶対起きるよ！ おれだって強くなりたいもん！」

誘つてもらえてうれしく嬉しかった。

少しでもいい、強くなりたい。

ヴィックキーたちが同じ気持ちでいてくれて、そして実際稽古をしている事が嬉しかった。

ねえちゃんに拾われたとき既に学校へ行く年齢ではなかった自分にとって、こんな風に同世代の少年や少女たちと共に生活するのも学ぶのも初めてだった。

それはとても新鮮で楽しかった。

今現在も東では戦が繰り広げられていて、たくさんのヒートの命が危険にさらされていく事を忘れそうになるほどにこの場所は平和だつた。

それでもねえちゃんとアレイさんに追いつくため、たくさんのことを覚えて強くならなくちゃいけない。

そのためにはもう一つ、使いこなせるようにならなくてはいけない能力があった。

でもこの練習はヒートに見られるわけにはいかない。

昼間の稽古を終えて疲れきった体を抱えて夜中、ベッドから抜け出した。

迷った挙句、宿舎の屋上を選んだ。

ここならきっと誰も来ないだろうし、それなりの広さもある。何

より、給水用の水瓶の他は障害物もなく遠くまで見渡すことが出来る。それはとても重要なことだった。

きょろきょろと辺りを見渡して誰もいないのを確認してから、首

から提げたコインを握り締めた。

「アガレスさん、力を貸して」

全身が躍動するような感覚が行き渡り、目の前に金目の鷹が舞い降りてきた。

右手を差し出すと、鷹は爪を立てないよう慎重にその腕に止まつた。

「如何した 幼き娘」

「千里眼を使う練習がしたいんだ。少しだけいいかな?」

「よからう」

アガレスさんは、と言つたアガレスさんの代弁をする金田の鷹は鷹揚に頷いた。

自分が最も早急にモノにせねばいけないのがこの『千里眼』という能力だった。もともと眼はいいのだが、それに悪魔の加護を重ねることで人知を超えた五感を手にする事が出来る。

ご先祖様のゲーティア＝グリフィスも同じ能力を有したという。

ただ、千里眼を発動したときに受け取る情報量はそれこそヒトが処理できる範囲ではない。

初めて使つた後はあまりの情報量にふらふらになり、身動きが取れない状態に陥ってしまった。

もしこの能力を戦闘で使うとすればそんなわけにはいかない。全身から入つてくる情報を方向的にうまく遮断して欲しい情報だけを受け取る事ができるようになる必要があつた。

大きく一つ深呼吸。

「よおし」

気合を入れると、全身の感覚を研ぎ澄ました

その瞬間、ヒトの気配が感覚の中に飛び込んできた。

しまつた、誰かいたのか！気づかなかつた。失態だ。

発動した千里眼をいつたん切り、その方向に向かつて鷹を飛ばした。

「誰？！」

叫ぶと、鷹のアガレスさんの爪で追い立てられたヒトが給水瓶の陰から姿を現した。

SECT・9 紅髪の騎士

姿を現した少年は見た事があるような気がする。きっと鴉部隊の一人なんだろう。

黒の騎士装束に身を包み、漆黒のマントを羽織った姿は一瞬アレイさんと見間違えてどきりとした。髪の色は炎のような紅だつたが、背が高く細身の体型もよく似ている。

きつと少年組の鴉内では1・2を争つ長身だ。

驚いてその姿を見つめていると、

「お前、何者だ？」

その人影に逆に質問されて戸惑つた。

レメゲトンであることは秘密にしなさい、とクラウドさんは言った。でも、すでにアガレスさんの姿を見られてしまっている。どうしよう。

迷つていてるうちにその人物はこちらに近づいてきた。

端正な顔立ちもどこかアレイさんを想起させた。もつとも、このヒトの藍色の瞳は本人に比べるとかなり目つきがよかつたけれど、というとまたイジワルなことを言われてしまうだろうか。

騎士というよりは美しい舞台俳優のような容姿にほんのしばらく見惚れていた。顔や体つきは完全に大人のものだったが、醸し出すオーラはどこか少年らしく、そのアンバランスさが危うい魅力を与えていた。

が、はつと氣づく。

いやいや綺麗なヒトだからって見てる場合じゃなくて、えーと、悪魔を召還した場面を見られたのが最悪的にまずい。うまぐまかせるか？いや、ねえちゃんとじゃあるまいし、残念ながらそんな能力は持つていない。

困った挙句に叫んだ。

「おまえこそ誰だ！」

「漆黒星騎士団、鴉部隊所属ライディーン＝シンだ。そうか、お前は確か新入りの……」

ライディーン、と名乗ったこの少年はやはり鴉部隊の者だった。なんとも答えあぐねていると、アガレスさんが肩に戻ってきた。

「その鷹は普通の鷹じゃないな。さつき確か『アガレス』と言わなかつたか？」

やつぱりばれている。

どうやら単純な黒猫ルークと違つてとても鋭いヒトのようだ。

「第2番目の悪魔アガレスのことなのか？なぜお前がその『イン』を持つてるんだ。まさか」

「おれはラック＝グリフィス。グリモワール国のレメゲトンだ」

言われる前に正直に名乗つた。

ライディーンは眉を寄せる。

「お前がレメゲトン？なぜレメゲトンが鴉からすに？グリフィスと言うと最近話題の新しいレメゲトンだな。本物なのか？」

疑問符が多くなる。

でも仕方ないからひとつづつ答えていった。

「信じる信じないは勝手だから好きにしてよ。でも、クラウドさんは隠せつて言われているから言いふらされちゃ困るんだ。ばれるところいろ面倒だし」

最悪訓練が中止になつてしまつ。

それだけは避けねばならなかつた。

「おれのことは黙つてくれる？おれは未熟者だから修行が必要なんだ。他のレメゲトンは戦争にいつもやつたけど、おれは弱いから騎士団でいろんな事を学びなさいって王様が言つたんだ。だから置いてけぼり」

自分で言つて悲しくなつてきた。

「おれは早く強くなつてトロメオに行きたいんだ。大切なヒトたちが……戦場にいるから」

じつと藍色の瞳を見つめると、青年は口をつぐんだ。

どこか呆けているようなその視線をちらり見つめ返すと、ふつと目を逸らされた。

「分かった、誰にも言わない。お前は新入りのラックだ。それでいいんだろ？」「

「ありがとう。えと、ライディーン？」

首を傾げるとライディーンはにこりと微笑んだ。

女の子が10人いたら10人とも振り返るような笑顔だった。

ちょうどアガレスさんが自分の肩に舞い戻ってきた。

「その鷹が第2番目の悪魔アガレス？」

「うんとね、厳密に言うと違うんだけど……アガレスさん、出てきてくれる？」

鷹に向かつてそう言つと、全身を支配していた高揚感が薄れて、代わりに目の前に見慣れた老紳士の姿が現れた。

「幼き娘の学友か」

「うん、そう。ライディーンだよ」

「初めてまして、アガレス様。ライディーン＝シンと申します」

ライディーンは軽く膝をついてお辞儀をした。

アガレスさんは視力を失った眼で深紅の髪を持つ若者を見定めた。

「ふむ 遠く悪魔の血を受け継いでいるな ほとんど薄まっているが」

「やはりお分かりになるのですか。もう何代も経て完全に消えかけているといふのに」「

「悪魔の血？」

首を傾げると、アガレスさんは楽しそうに笑つた。

「何も知らぬようだな 幼き娘 炎妖玉の子に訊ねるといい

「えんようぎょくつて、ガーネットのこと？ 子供って誰？」

「悪魔の末裔 その瞳は混合にして闇と光の狭間にある 果てしなき可能性と世界の行方を秘めた 強き魂」

しまつた、またアガレスさんお得意の『長い答え』が始まつてしまつた。

「…

「親から継いだ剣の腕と、類稀な清き心を持つ、闇の貴公子」

眉を寄せていると、ライディーンが言った。

「それは、クロウリー伯爵の事じゃないのか？」

「アレイさん？なぜ？」

「アレイさんというのはアレイスター＝クロウリー伯爵のことだと
思つていい？……何故ってクロウリー家は悪魔の血を継いでいると
言われているじゃないか」

「…………え？」

思わず素つ頓狂な声が出た。

「何それ。どういうこと？ 悪魔の血って？」

アガレスさんは口元に笑みを湛えるだけで教えてくれなかつた。
何も知らぬようだな、と言つた時の楽しくて仕方ないといった表情
のままだ。

それどころか闇に溶けるように姿を消してしまつたのだった。

「あつ……帰つちやつた」

困つてふう、とため息をつくと、隣で押し殺したような笑い声がした。

恨めしく深紅の髪の少年を見ると、今度は声を上げて笑い出した。「だつて、だつてお前レメゲトンの癖に、召還した悪魔が勝手に帰つたぞ？！おかしいだろ、それ！」

「……だからおれは未熟者だつて言つてゐるじやん」

「違ひない」

楽しそうに声を上げて笑う様はまるきり普通の少年に見えた。深紅の髪に藍色の瞳のライディーン＝シンがアレイさん似ているのは端正な顔立ちと体格だけで、中身はまったく別のもののようにだった。

「面白いなあ、お前」

「ありがと」

「ちなみに言ひと褒めてないぞ？」

むつとして頬を膨らますと、ライディーンはさうじて楽しそうに笑う。

「あーこんなに笑つたの久しぶりだ」

「よかつたね」

ぶつとむくれてそっぽを向くと、さらに笑い声が追いかけてきた。

「ライディーンなんて勝手に笑つてるといいんだ」

「そう言つな。悪魔の子の話を教えてやるから」

その言葉にすぐ振り返る。

「ほんと？」

「ああ。有名な話だ。グリモワール国の人なら誰でも知つてている事だからな」

内緒話でもするよつて屋上の床に座り込み、額をつき合わせるよ

うに向かい合つた。

何で座っているのに相手を見上げなくてはならないんだろう。まるでアレイさんを見上げるときのような理不尽さを感じた。

そんな事お構いなしにライディーンは話し始めた。

「初代 炎妖玉騎士団長レティシア＝クロウリーが戦の悪魔マルコシアスを使役した事は知ってるだろ?」

「うん」

マルコシアスさん自身の事もよく知っている。

彼は炎妖玉^{ガーネット}と碧光玉^{サファイア}をひとつずつ嵌め込んだオッドアイが目をひく褐色の肌の勇ましい戦士だった。

「レティシア＝クロウリーは生涯独身だった。騎士という道を極め、その結果女として生きることをいくらか諦めたせいだ」

「そうなの?」

それじゃ、今もずっと続いているクロウリー家のヒトたちは一体どこから来ただ?

その疑問が伝わったようで、ライディーンはにこりと笑った。

「しかし、彼女には子供がいたんだ。ライガ＝サイソクラム＝クロウリー……レティシアの一人息子だ。」

「ライガって部隊長さんと同じ名前だね」

「そうだな。隊長の名前はそこからとつたのかもしれない。レティシアの息子ライガも母レティシアの名に負けぬ無類の剣士だったそうだからな」

「あれ? でもさ、レティシアさんが結婚していないんだったら、お父さんは誰だつたの?」

「公式には不明とされている。でも、当時ある噂がたつたんだ」声を潜めるように、藍色の瞳が近づいた。

「レティシアの息子ライガは、悪魔の子だと」

「……え?」

どういう意味か分からなかつた。

父親なしで生まれてくる子供も、『悪魔の子』が意味するところ

も。

「ライガのミドルネーム、サイソクラムはS - A - I - S - O - H - C - R - A - M、綴りを逆にすると？」

「M - A - R - C - H - O - S - I - A - S、えーと……マルコシアス……」

ぱつり、と呟いてはつとした。

マルコシアス

その名前は聞き覚えがあるどころではない。

「それがクロウリー家が悪魔の末裔ではないかと言われている理由だ。レティシア＝クロウリーは悪魔と交わり、その子を産んだとされているんだ」

「だから悪魔の子？」

「そう、クロウリー家はマルコシアスの血を引く神聖な一族だ」

「そうだったのかあ。今度聞いてみるよ」

褐色の戦士と紫の瞳の剣士にそれぞれ。

マルコシアスさんが変わらずクロウリー家に仕え続けるのはその辺にも理由があるのかもしねりない。

アレイさんに対する優しい　きっと本人が聞けば全力で否定するだろうが　態度を見る限り、温かく見守る父親という表現は当たっているかもしれない。

「だからアガレスさんはアレイさんのことを炎妖玉の子、って言ったのか」

「だろうな。ちなみに俺は、爺さんの爺さんの母親だががクロウリ一家の者だつたらしい。いわゆる庶子のやうに子孫つてやつ？ だから俺自身は平民だ」

「なんだ」

「でもクロウリー伯爵は俺の心のライバルだから」

「ライバル？ 何で？」

唐突な言葉に眉を寄せた。

「あの人は15で騎士団に入つて20で部隊長になつた。レティシ

ア＝クロウリーとクラウド团长に次ぐ早だ。だから俺はそれを越えてやる

「でもまだ鴉^{かみ}じゃん」

「仕方ないだろ？、今年入ったばかりなんだから」

「今年？」

きょとん、と思わず聞き返した。

「ちょっと待て、ライディーン、おまえ幾つだ？」

「15」

「おまえの方が3つも年下じゃないか！ おれは18だ！」

「何だ、いまさら敬えってのか、レメゲトン様」

ライディーンの藍色の瞳がイジワルそうな光を帯びた。

「別にそつは言わないよ。ただびっくりしただけだよ」

顔の端正さも手伝つてとてもヨハンと同じ年には見えなかつた

ヨハン自身かなり童顔で12・3にしか見えないとはいっても。

身長は同年代の少年たちから飛びぬけているだろ？

「へへ。漆黒星騎士団にしてよかつた。まさかレメゲトンと知り合えるなんてな！ ゼンゼンそうは見えないけど」

そう言つて笑う表情は言われてみればまだ幼い氣もある。

「俺はもう鷹^{たか}の訓練に参加してる。来年は配属される予定なんだ」

「んじや明日の訓練も一緒かな」

「何だ、ラックも来るのか？」

「ライガさんが来いって」

青いバンダナ巻きの豪快な部隊長さんを思い出す。

「そうか、楽しみだ」

「ライディーンも強いんだよな」

「当たり前だ。そうじやなきやクロウリー伯爵にライバル宣言なん

てしない」

「そうだね」

すぐ自信満々なライディーンはやっぱり15歳の少年に見える。

「でもアレイさんもすぐ強こよ。この間だつて銀髪の……」

そこまで言つて口を噤んだ。

銀髪のヒトを幾許もしないうちに床に沈めていたのだから。

暗闇、銀髪、血のにおい フラッシュバックの気配がして背筋
がぶるりと震えた。

「どうした、寒いのか？」

「……違うよ」

その声も震えていた。

訝しそうな顔をするワライティーンを尻目に、震えそうになる肩を
必死で抱いていた。

SELECT・11 ファイアライト＝リドフォール

次の日の午後は鷹部隊の稽古初参加だ。ルークとロナルドとジン、それにライディーンの4人と共に鷹の練習場へと向かつた。
稽古場の扉をあけると、すでに何人もの騎士が激しい打ち合いをしていた。

その中に金髪のファイさんの姿があった。

こちらに気づいて打ち合いをやめ、優しげな笑みを湛えてやつてきた。

「いらっしゃい。4人はすぐに準備を始めていつものように訓練に移ってください。ラック、あなたは今日見学です。簡単な紹介と案内をします」

「お願いします」

深く頭を下げると、ファイさんはこりと微笑んだ。とても笑顔の似合う人だ。

隣に並んで歩き出しが、それほど見上げなくともいいといふことはクラウドさんより少し背が低いくらいなんだろう。

「鷹部隊は、漆黒星騎士団の中でも中心的な戦力となる、剣技に優れた部隊です。現在所属は156名、ライガ＝アンタレス部隊長の下につく5名のリーダーによって統率されています」

「ファイさんもリーダーなの？」

「いえ、私は未熟者ですから一隊員に過ぎません。配属されてからまだ3年目ですし、ライガ隊長のようにもつて生まれた天賦の才もありませんから」

「でも騎士団に入ったんだからやつぱり強いんでしょう？ ヴィックキーだつて強かつたし、えと、おれに剣を教えてくれた元騎士のヒトも強かつたよ」

「そうですね、一般の人にはべたらかなり戦闘力は高いでしょうね」
ファイさんは苦笑した。

「騎士団は王国を、ひいては国民を武力から守るためにあります。そのために鍛錬を欠かさず、常に戦闘を行える状態でいる事が大切ですから」

守るため その言葉にはとても聞き覚えがあつた。
唐突に聞いてみたくなつた。

「ファイさんはどうして騎士にならうと思つたの？」

自分がレメゲトンになる事を選んだように、きっとこのヒトが騎士になる時も強い意思があつたはずだ、と思つた。

自分以外のヒトがどんな風に道を選んできたのかを知りたかった。

「どうして、というのも難しい質問ですね」

ファイさんは一瞬立ち止まって首をひねつた。

その横顔をじっと見つめていると、彼は一瞬至極まじめな顔をして答えた。

「憧れた人が騎士だつたから、ですかね」

「憧れた人？」

聞き返すと、金髪の騎士はまたいつもの笑顔に戻つていた。

「命の恩人とも言いましょうか。私は王都からずつと離れた山奥で育ちました。そのせいか幼い頃は少々無鉄砲でしてね、一度とも危険な目に遭いました。それこそ死ぬ寸前まで追い詰められたんですけど……そんな私を助けてくれた人がいたんです」

「その人が騎士だつたの？」

「はい」

ファイさんはにこりと微笑んでからもう一度歩き出した。

歩幅に合わせてゆっくりと歩を進めてくれる優しさを感じながら、隣についた。

「名も知らない騎士でしたが、その勇壮さと機知に子供ながら憧れたのが騎士道のはじまりです。そうですね、彼が覚えているのならもう一度会いたいものです。そして騎士になつた自分を見て欲しいと思いますね」

「そうかあ。会えるといいね」

「ありがとうございます」

憧れるヒトがいるのはとても素敵な事だなと思つ。

自分にもいるだろうか？少し考えてみた。

ねえちゃんは憧れるとは少し違う。一緒にいたい。心配かけたくない。甘たい。ねえちゃんは世界の全てだから。

アレイさんは？うーん、できればあはなりたくない。剣の腕は素晴らしいけど、イジワルだし口が悪いし、憧れるとはちょっと違うだろう。

じい様やベアトリー・叶修さん？いや、それも少し違うだろう。

他は……？

「うーん、おれはきっとマルコシアスさんみたいになりたいな」

「マルコシアス……と言つと戦の魔のですか？」

「そう。強くて綺麗で、優しくてあつたかい。あんな風になりたいかなあ」

「戦の魔とは、大変な目標ですね」

ファイさんはくすくすと笑つた。

「うん、本当に大変だよ！」

でもいつかあんな風になれたら。

オッドアイと不敵な笑みを思い出して、微笑んでしまった。

ルークたちは大人の騎士たちの打ち合いに混じっていた。

そうすると黒猫ルークと狐のジンの小柄さはすぐ目立つ。大丈夫なんだろうかと見守つていると、ルークは自分の倍もありそうな相手と向き合つている。

「今年はとても優秀な人が多いんですよ。特にルークとライディーンは他の鴉部隊員からは飛びぬけています」

「へえ」

見ていると、ルークは素早さと太刀の鋭さを生かして早々に勝負を決めた。

大人の騎士相手に、しかもかなりの体格差があるというのに信じられないような早業だった。

「ルークは今年になっての伸びが凄まじいですね。もう2・3年もすればリーダークラスの実力を手に入れると思いますよ」

「ライディーンは？」

「彼は本当に……天才です」

ファイさんの視線の先には、15歳とは思えない長身で木刀を構えた紅髪の騎士の姿があった。

「今年の入団試験を文句なしのトップで合格しました。これまで剣術大会に出場した記録もなく、こちらとしては全く予想外の結果です。何より他にない独特の剣術を学んでいます。詳しいことは彼自身もよく知らないそうです。祖父が剣の達人で、その方から教わったとか」

「ふうん」

見ていると、試合が始まった。

ライディーンは両手で剣を持っている。

自分のように力が無い者ならともかく、普通は片手に盾を持つため剣も片手で扱うのが基本だ。アレイさんも普段左手だけで剣を持つている　とはいえ、盾をもつているところは見た事がないのだが。しかもライディーンのもつ木刀の切つ先はだらりと地面上に下がっていた。あれでは構えも何もない。防御をする気がないのか？と、思った瞬間相手が切り込んできた。

危ない、と思う間もなく頭上に木刀が振り下ろされた……と思つたのだが。

頭に当たる直前で木刀がぴたりと止まつた。

「ライディーンの勝ちです。先に胴に攻撃が入りました」

「！」

切つ先を下げていたのは防御を放棄したわけではない。

下から切り上げるようにわき腹を狙つたのだ。ガードを下げ、わ

ざと上から攻撃させて下からの攻撃を見づらにするために。

紅髪の剣士は一礼すると武台から降りた。

「すごいね。ああいのは初めて見たよ。両手で剣を持つ人って少ないんじゃない?」

「そうですね。とても珍しい型です」

ファイさんは頷いた。

「しかし他にも様々な剣を使う騎士がいますよ。中でも珍しいのは隊長ですね」

「ライガさんが?」

「はい。隊長は無流です。独自流と言つか型がないというか、……それこそ天性の格闘センスと身体能力、それに動体視力を駆使して通常ではありえない攻撃を仕掛けてきます」

「へえ、それも見てみたいな」

「そのうち見られると思いますよ。今日はクラウド団長に用があるとかで訓練には参加していませんが、明後日ラックが来る時にはいると思います。」

「楽しみだ!」

最近楽しみが多い。

強くなるために鍛錬すること、今まで知らなかつたことを教わるのがこんなにも楽しいとは思つてもみなかつた。

そしてその訓練を共有する仲間がいるという事実も。

不謹慎な事だが、とても楽しかつた。

朝早起きしてヴィッキーたちと秘密特訓をし、午前午後は様々な場所で稽古、夜は一人屋上で千里眼の練習　その後は倒れるように眠る日々が続いた。

もちろんそれでも、心の片隅には今も東の都トロメオでセフィロト国への侵入を防いでいるねえちゃんたちの事がわだかまつっていた。今どうしているんだろう。怪我をしていないだろうか。

毎晩、千里眼の練習を終えた後に夜空に向かつて祈りを捧げた。

みんな無事でこまかうひー。

ブラックルビー
漆黒星騎士団の訓練所に来てからはや2週間が経とうとしていた。

最近では一般志願兵の訓練も同時に行われるようになっていた。その人数は数百人にも上り、騎士団のヒトたちが講師として呼ばれることが多かつた。

とはいえたは先輩たちの仕事であり、鴉^{カラス}と行動を共にする自分にはあまり影響が無い。

他のことは何も考えず、朝から晩まで稽古をする日々。毎日が充実していく自分が少しづつ強くなっている感覚があった。

一度だけ戦況は拮抗しているという情報が噂として入ってきた。軍は軍で、レメゲトンはセフライと互角の戦いを繰り広げているらしい。

しかしセフライは10人もいるのだ。戦線に立つねえちゃんとアレイさんがいくら強いと言つても一人だけではいつか押されてくるだろう。

早く行きたいという気持ちと、まだ早いといつ現実の狭間で心が破れそうになる毎日を過ごしていた。

そんなある日だった。

その日も夢を見ていた。同じ所すつと同じ夢だ。

とても暗い部屋で壁がどこにあるのかも分からぬ。周りには数人の大人たちがいる。みな黒いフードを頭深にして顔は分からない。長いローブは全身を覆つていて、男女の区別すらつかなかつた。

そして目の前にあるのは黒々とした魔方陣。直径3メートルはあるかというそれは、周囲に灯された蠟燭の光に照らし出されて禍々しい空気を放つてゐる。

自分はそれを見つめている。

紋様に見覚えはない。魔法陣の辺縁に所狭しと書かれている文字が古代文字だと言う事以外何も分からぬ。

するとふいに両腕をつかまれ、地面に伏せられる。

抵抗する間もなくその魔方陣の中央にうつぶせにさせられ、両手両足を鎖で拘束された。大の字にうつぶせる形で動けなくなる。床が冷たい。鎖は太く全く身動きが取れそうにない。

叫ぼうとすると口に轡を噛まれ、抵抗できない状態に陥った。凄まじい恐怖が全身を駆け抜けれる。

周囲の人たちは言葉を発しない。周囲の蠅燭が風も無いのにふわりと揺らめく。

蠅燭の明かりに煌くものが照らし出された。

銀のブレイドがこちらに向けられていた

はつと田を覚ます。

もう朝だ。

汗に濡れた全身をベッドの上に起こし、辺りを見回すとすでに同室の3人はいなかつた。

「みんなもう練習に行っちゃつたのか」

ふう、と一息つく。どうやら寝坊してしまったようだ。起きて着替えようとして違和感に気づいた。何かが足りない。

「……！」

気がついて顔から血の気がさつと引いた。コインのペンダントが首から消えていた。

心臓の音が耳の傍にある。

呼吸が苦しくなった。

「昨日の夜……はあつたよね。」

千里眼の練習をしたから。

だいぶ使えるようになった能力で、ふん長い間遠くの町を観察していたんだ。

調子に乗つてやりすぎで、ふらふらになってしまって歩けなかつたからライティーンに部屋まで送つてもらつて……その後倒れるように眠つてしまつたんだ。

ペンドントは？

うん、首にかけてあつた。

じゃあその後だ。

眠つている間に誰かが盗つた？ 一体誰が？

いざれにせよコインを失くした、もしくは盗られたとなると大問題だ。

「誰に言つたらいいんだ……？」

ライティーン？ 違う。

ヴィックキー……じゃなくて。

「クラウドさんっ！」

籠手をするのも忘れて、短衣にサンダルといつ姿で部屋を飛び出した。

どうしよう。どうしよう。

恐ろしい考えが頭の中をぐるぐる渦巻いている。

訓練所内を一気に駆け抜け、以前教えてもらつた騎士団長の居住を目指した。

到着した時にはすでに息が切れていた。苦しい。もう走つたせいなのが恐怖が原因なのか分からぬ。とにかく心臓が破れそうなほど飛び跳ねている。

膝に手をついて息を整えていると、聞きなれたテノールが降つてきた。

「ラック。どうしたんだい、こんなに朝早く

「クラウドさん！」

姿を見た瞬間に泣きやうになつた。

尋常でない様子に何かを感じ取つたらしく。

「……何かあつたのかな、可愛いラック。落ち着いて、
漆黒の騎士服に身を包んだ団長さんは、なだめるように肩に手を
置いた。

「あの、コインが、アガレスさんとフラウロスさんが、……」
「ゆつくり話すんだ」

「失くなつた、の」

かるうじて紡いだ言葉に翡翠の瞳ジエイドが大きく見開かれた。

「朝起きたら……」「インが無くて……」

「それは他の誰かに言つたかな？」

「つうん、クラウドさんに、言わなくちゃと思つて……」

「いい判断だ」

クラウドさんはぽん、と頭に手を置いてくれた。

その瞬間に泣きそうになつたのをぐつとこらえた。

「中に入つて待つていて。すぐ戻る。そうしたら詳しい話を聞かせて欲しい」

「わ、分かつた」

震える声で返答した。

クラウドさんはもう一度頭を撫でると、黒いマントを翻してどこ
かへ向かつた。

クラウドさんの部屋でじつと待つていた。

自分たちの共同部屋とそう変わらない造りだったが、客間が一つ
付いている事だけが違つていた。大量の武器が置いてあつたけれど
それらを見る余裕もなく、ただじつとソファにつずくまつっていた。
コインが無い。

アガレスさんに会えない。フラウロスさんを呼び出せない。

そんな自分はもうレメゲトンじゃない……？

恐ろしい考えに肩が震えた。自分の体を抱くように肩を掴んで震えを止める。

どうしたらいい。自分は一体何をしたらいい？

「助けて」

紫の瞳を思い出しそうになつてぶんぶんと頭を振った。

ここにあのヒトはいない。目の前の選択肢は自分で減らすしかないんだ。

よく考えるんだ。

まず、何故コインを盗る必要があつたか。

理由を考えたとき最もあり得るのは敵、つまりセフィロト國の仕業だということ。しかし、セフィラでもない限りこの王都の側壁に沿つよう作られた訓練所には入れない。盗られたのは夜中だからセフィラは天使を召還できない時間だ。

他に考えられる理由としては、高く売れると思った、国を脅そうとした、もしくは自分に対する個人的な恨みなどがあるが、どれもぴんと来ない。ここが騎士団の訓練所である以上忍び込むのにはかなりの度胸と強い動機が必要だろう。

すると、考えられるのは……

コンコン

その時ドアをノックする音がした。

「はい」

「失礼します」

入ってきたのはオレンジの髪の女性

鴉リーダー、ヴィクトリ
カラサ

ア・クラークだった。

「ああ、ラック。大丈夫か？ 団長に体調が悪いと伺つて服を持ってきたのだが……顔色が悪いな。無理をせず休んだ方がいい」

「ありがとう」

体調が悪いわけではなかつたが、本当のことは言えなかつた。ひどく心苦しい事ではあつた。

しかし、ヴィックキーもコイン盗難の容疑者である事は間違いない。

特にあの時同じ部屋にいたのだから最も疑つてかかるべきは彼女

とメリル、シアの3人だ。

「さき鷺部隊長には私から言つておこう」

「お願い」

そうして見上げたヴィックキーの顔色が悪い事に気づいた。

「ヴィックキー？ おれよりヴィックキーの方が辛そうだよ？」だいじ

「うふ？」

「ああ、少し動悸がするな。いや、大丈夫だ。休めばすぐ……」

そこまで言つて、ヴィックキーはふらりと床に崩れた。

SECT・13 ヴィクトリア＝クラーク

「ヴィックキー！」

慌てて叫んだ瞬間に気づいた。

ヴィックキーの手に握られているのは自分の籠手だ　裏に悪魔の羽根を縫いつけた。

縫い付けた後体調を崩してしまった、と言つたアイリスを思い出した。

「籠手、離して！　おれにちょうつだい！」

「あ、ああ……」

籠手をひつたくるように奪つてぎゅっと握り締めた。

「この籠手には悪魔の加護が入つてる。ヴィックキーは悪魔に対する耐性がないから少し気分が悪くなつたんだ」

コインを盗つたのはヴィックキーじゃない。悪魔の耐性が全く無い彼女がそんな事をすれば今朝稽古など出来るはずが無い。つらそうな様子のヴィックキーを自分の代わりにソファに座らせた。「すまないな、私の方がこの体たらくだ

「違うよ、おれのせいだよ」

左手でヴィックキーの肩に触れそうになつてはと手を引く。

これを彼女に近づけるわけにはいかない。

右手を埋め込まれたコインにかぶせるよう押し当てる、唇を噛んだ。

悪魔の気が人間にいい影響を与えない事を忘れてはいけない。アイリスが体調を崩したと聞いて戒めとなつていたはずだったのになぜ忘れていたんだろう。

「コインが体に埋め込まれてしまつた自分自身はすでに耐性を持たないヒトたちにとつて毒でしかないのに

「どうした、ラック。泣きそうな顔をしているぞ？」

それこそ蒼白な顔をしたヴィックキーの姿に胸が裂かれる様に痛む。

「それは私には話せない事なのか。もしよかつたら相談してくれないか」

ヴィッツキーの優しい心が裂かれた胸の傷にしました。

「あのね、ヴィッツキー。実はね、昨日の晩……おれのコインが盗まれたんだ」

「コインというと悪魔のコインか?!」

「うん。だから慌ててクラウドさんに報告に来たんだ」

「何と言ふことだ……！」

ヴィッツキーは額に手を当てた。

「一体誰がそんな事を」

「おれも信じられないけど、たぶん鴉部隊の中にいると思つんだ。からす夜中は天使を召還できないからセフィラの仕業じゃないし、一般的ヒトがあの宿舎に忍び込んでまで盗る理由は無い」

ヴィッツキーの深緑の瞳からすが大きく見開かれた。

「……信じられない。鴉の中に盜人がいるなど！」

答えられなくて口をつぐんだ。

しかも自分がコインを持つていてる事を知るのはヴィッツキーとライディーンのみだ。

となると最も疑わしいのはただ一人。

「少しだけおれに任せてくれる？心当たりがあるんだ」

ほんの少しだけれどクロウリー家の血を引いていて、あの日の晩おれを部屋まで送ってくれた これ以上の理由は無い。

しかし一番疑いたくなかった。

いつも千里眼の練習に付き合ってくれる。夜遅くまで一緒に屋上に残ってくれて茶化したりもするけど励ましてくれる。

この訓練所に来て一番仲良くなつたのがライディーンだったから。加護のある羽根が縫いつけられて籠手を握つて、唇をかみ締めた。

しばらくしてクラウドさんが戻ってきた。

「待たせたね。ああヴィッツキー、ありがとう

ソファに身を預けていたヴィックキーはさつと立ち上がった。

一瞬足元がふらつたがすぐに姿勢を正した。

「どうしたんだい、あまり体調がすぐれないようだが

「いえ、何でもありません」

「悪魔さんの気に当たられちゃったんだ。ヴィックキーはすこく弱いみたい」

隠す事ではない。

むしろヴィックキーの無実を主張しておかなくてはいけない。

「コインも普通のヒトには毒だつて聞いたよ。盗つたとすればそれなりに耐性のあるヒトじゃないと無理だ。だから……」

「ヴィックキーには無理だ、と言いたいんだね」

「ぐりと頷くと、クラウドさんは優しく微笑んだ。

「ラック、君はとても優しい子だ。そして、非常に賢い子だ。もうだいたい何か見えてきているのだろう?」

「心当たりがあるんだ。少しだけ待つて欲しい。何とかしてみるから」

「仕方のない子だね」

クラウドさんは金髪をさらりと揺らして極上の笑みを湛えた。

「大丈夫、王には既に報告した。事件解決と加害者への罰則権限を君に一任されるそうだ。セフィロト國の干渉、及び国内反レメゲトン組織の介入はないものとする」

「うん、たぶんそうだよ。きっと深い理由なんて無いと思つ、それにあは……盗んだからって悪用できるものじゃないよ。それはおれが一番よく知ってる」

既に自分のものでなくなってしまった左手を包帯の上からぎゅっと掴んだ。

「期限は一週間だ。その間に犯人と証拠を挙げコインを奪還せよ、というのが王からのご命令だ」

「分かった。」

唇を結んで、真摯に頷いた。

ヴィックキーと二人朝日の中すぐに宿舎へ向かつた。

すでにいくらか訓練に参加する一般志願兵が集まり始めている。

そんなヒトたちに軽く礼をしながら舗装されていない道を急いだ。

「まさかこんな事態になろうとは。すまない、ラック」

「何でヴィックキーが謝るの？」

「部下の不始末は上司の責任だ。私は鴉からすのリーダーだからな、その全ての責を負つている」

時にヴィックキーは難しい言葉を使う。

それはアガレスさんの複雑な組み合わせの言葉とは少し違う分かりにくさで、自分はまだ知らない常識を当たり前に下敷きにしたような、そんな感覚だつた。

その常識は知りたいと思う事もあるが、知つてしまつと自分の中の価値観とか信条とか、そんなものが崩れてしまつそうで怖かつた。

「それよりも……謝るのはおれのほうだよ」

「なぜだ？」

「おれが持つものにはヴィックキーにとってよくないものが多いから。おれの傍にいたらまたきっと体調を崩すよ」

「コインのペンダントは外せばいい。籠手は身につけなければいい。でも、左手に埋め込まれたコインは消せない。

生きている限り自分は悪魔の気を発し続ける。耐性がない普通のヒトに長く触れている事はできないのだ。

負わされた枷に初めて気がついた。

「この呪われた左手がある限り自分は悪気を発し続けるのだ。

「ごめんな、ヴィックキー」

存在自体が毒だから。

もう何も考えずヒトに触れる事はできなくなるだろう。この先ずっとこの左手の悪魔を抱えて苦悩しながら生きていくのだろう。

その瞬間に例えようの無い寂寥感に襲われた。

星の数ほどいるヒトの中で自分が孤独なんじゃないか、今隣を歩いているヴィックキーですらとても遠い世界にいるんじゃないかな

「何を謝る事がある。お前は堂々としていればいい

「でも」

反論しようとすると、情の深い濃い緑の瞳が見下ろしていた。
慈愛の色に言葉を失った。

「私には妹がいる。年が離れていて、今年で一〇歳になるんだが、
私と違つていかんせん体が弱いのだ。この国は、今は夏だから暖か
いが冬が来れば寒くなる」

ヴィックキーが一体何を言いたいのかわからず首をかしげた。

「私の実家は北の都カインのさらに北にある。冬には地面が雪で覆
われ池は凍りつくような土地だ。体の弱い妹はすぐに体調を崩して
しまうんだ」

懐かしむように手を開じたヴィックキーはとても優しい顔をしていました。

「だからと言って妹は冬を嫌わない。真っ白な雪が降るのを見ては
喜んでいるし、氷柱を見ては欲しいところね。寒さに自分の体が堪
えられないと知っていたとしてもね。いつもなぜだろうと不思議で
仕方がなかつたんだ。自分に害を与える寒さを嫌うどころか待ち遠
しくさえ思つている」

そう言つてヴィックキーはにこりと微笑んだ。

「今なら少しその気持ちが分かるよ」

「何故?」

「私がお前を気に入つているからだ」

「……え?」

何のことか分からなかつた。

それでも彼女は微笑みのうちにコインの左手を掴んだ。
振り払おうとしたが、強い意思をともした深緑の瞳を前に強い行
動には出られなかつた。

「自分にとつて有害だという事は好き嫌いには全く関係ない。お前の魂は穢れなく強い。いつも前だけを見つめて進んでいく不屈の魂だ」

ヴィックキーの顔を無心に見上げていた。

一言一言が先ほどの傷に染み入つて少しづつ癒されていくのが分かつた。

「確かにお前はレメゲトンで、人間の健康に害を与える悪魔の印を多く持つている。だが、それは自然が私たちに与えるもの的一部だ。寒さへの耐性が人によって違うように、悪魔の気に対する耐性も人によつて違う。確かに強かつたらよかつたかもしれない。だが、それはお前のせいではないだろう? むしろ私が生まれついての問題だ」

ヴィックキーは隣にいた。

同じ世界で微笑んでいた。

「ラック、そんな風に考え込むな。お前にはそんな顔似合わない」

言葉を返せなかつた。胸の辺りに何かがつつかえて邪魔しているようだつた。

「大丈夫、コインもすぐに見つかる。盗つた方も何か理由があつたんだろう。お前が諭してやればちゃんと返してくれるぞ」

「コインの埋め込まれた左手を強く握つて、真直ぐに瞳の中の光を見つめてヴィックキーはそう言つた。

自分はきっとその時世界で一番間抜けな顔をしていたと思う。でもきっと世界で一番温かい言葉をかけられていたはずだ。

SECT・14 夢の先にあるもの

宿舎に到着すると、すでにみな稽古に移っていた。

「どうする、ラック。私はすぐに合流するつもりだが」

「うん、午後から参加するよ。先に行つてて！」

「ヴィックキーと別れていったん部屋に戻つた。

自分のベッドの上はかなり乱雑にシーツとタオルが撒き散らされていた。寝起きで慌てて部屋を飛び出したせいだろう。

簡単に荷物を整頓してベッドの端に座る。

息をつくとどつと疲れが出てきた。

「……ライディーン。本当にお前なのか？」

紅の髪と端正な顔に似合わぬ少年のよつたな笑顔を思い出す。

夜中、練習のために屋上へでるといつでもあの微笑で迎えてくれた。孤独な夜に隣にヒトがいるといつのはそれだけで心強い。

アガレスさんの言葉に首を傾げているとライディーンは楽しそうに笑い、未熟者だとバカにする。千里眼の使いすぎで疲労すれば優しい言葉をかけてくれる。

そのままベッドに倒れこんだ。

ねえちゃんちのベッドと違つて弾力があまり無いマットの上で、体は2・3度跳ねた。

「どうして」

こんな気持ちは初めてだつた。

よりもよつて、どうして彼なんだという疑問が胸の中を渦巻いて、とても切ない感情が押し寄せてくる。何かを無理やり奪われたような喪失感　ヒトはこれをなんと呼ぶのだろう？

わめき散らしたいような、でも部屋に閉じこもつて誰とも話したくないような、そんな理解不能な欲望がぐちやぐちやに混ざり合つてゐる。

アレイさんがライバルなんだつて言つていた。強くなりたいんだ

つて言つてた。

それなのに

「何だよ、もう」

自分はよつほど疲れていたんだろうか。

どうやらそのまま眠ってしまったようだった。

また、夢を見た。

こここのところ連續で見ている夢の続きだ。

壁まで光が届かない闇に満たされた部屋の中に浮かぶ、禍々しい魔方陣。揺らめく蠟燭の炎が微かに周囲を取り囲む黒衣の人たちを浮かび上がらせている。

自分はその中央にうつぶせの状態で大の字に拘束されている。身につけているのは薄い短衣だけ。肌に触れる石の床はひびく冷たかった。

轡を噛まれ両手足を頑丈な鎖でつながれている今、外部からの干渉に抵抗することはできない。

凄まじい恐怖が全身を貫いた。

風も無いのにふわりと揺れる蠟燭の明かりを、銀のブレイドが反射した。

一体これから何が起こるのか分からぬ。叫ぼうとしたが声は出せず、ただ喉から湿っぽい呻きが漏れただけだった。

銀の煌きがこちらに向けられる。
逃れる術はない。

動けない。

次の瞬間、仰け反るような激痛が背に走った。

「うわああっ！！」

ベッドから飛び起きた。

息が荒い。心臓がものすごい速さで脈動している　そして、背の逆十字傷が痛んだ。

痛みに耐えるようにして自分の肩を抱く。

夢の中の恐怖が舞い戻ってきて思わず震えた。

「何なんだ……」

いや、もう心の片隅では分かっている。

この感覚は過去へのフラッシュバックと同じだから。

「あれはおれの過去……なのか？」

ずきん　ずきん

こぼれた問いは誰に答えられる事も無く部屋の空氣に紛れていった。

壁に囲まれて寒さに凍えながら小さな窓に手を伸ばしていたのは自分自身なのか？春を想つても外に出られない寂しさを必死で忘れようとしていたのも、あの闇の中で銀に光る刃を突き立てられたのも……？

「つつ！」

あの痛みを思い出してまた総毛だった。

怖い。怖い。

頭の中で警鐘がなつている。思い出してはいけない、と。

暗闇、ブレイド、血の匂い、銀髪……これは自分のフラッシュバックを呼び覚ます鍵になるものだつた。それはこれまでの経験で分かつてていることだ。

これらのうち暗闇とブレイドは既に夢の中に登場している。

それでは銀髪のヒトがこの先夢の中に現れるのか？一体誰が？

「ルシファ」

唐突に漏れた自分の声に驚いた。

これは最初に見た夢で自分が遠い月明かりに向かつて呟いた言葉だ。

そして、これは自分のミドルネームでもある。

「グレイシャー＝ルシファ＝グリフィス」

セフイラの手品師、ゲブラが告げた自分の本当の名前を声に出してみる。

全く聞いた事のないものだが、心は敏感に反応した。記憶をなくしても魂はその名を覚えていた。

もう呼ぶものなどいない名前だ

そう思つてはつとする。

なぜいないんだ？

あの時確かに幾人もの大人が自分を取り巻いていたし、自分にだって両親や、もしかしたら兄弟だったかもしれないのに。

どうして誰もいないんだ？

それはきっと自分の記憶が抜け落ちた部分、夢の続きが物語るはずだ。

開けてはいけない扉はすでに開きかけている。

ねえちゃんが連れ去られて監禁されていた屋敷に、何故誰もいかつたんだ？ずいぶん前に捨てられたようにぼろぼろだったのは何故だったんだ？

夢の中のあの真っ暗な部屋はあの屋敷のどこかに存在しているのか……？

「うあつ！」

凄まじい頭痛が襲つてくる。

思い出してはいけない。

全身の細胞がそう叫んでいる。

知りたい 知つてはいけない

「く……」

知つてはいけない。

これ以上進んではいけない。

扉を開けてはいけない。

「うあああ！」

オモイダシテハ ナラナイ

あまりの激痛に抵抗できず、弾けるように意識を失った。

「ラック？」

肩を揺らされて気がついた。

「大丈夫か。ずいぶん苦しそうだつたぞ。やはり休んでいた方がいいのでは？」

目を開けるとヴィックキーの深緑の瞳が覗き込んでいた。

「あれ……？」

「もう午後の訓練はとっくに始まっている。なかなか姿を見せんの

で様子を見に来たのだ」

「うわ！」「めん！」

思わず跳ね起きた。

頭がぶつかりそうになつてヴィックキーはひょい、と身をひいた。

「休んでいろ。ここに来てから慣れぬ環境で気苦労も多がうつ。それに今朝の事もある……一度、ゆっくり休んだ方がいい」

そんなことないと言いたかったが、手足がうまく動かない。フランシュバックに遭つたときのように全身が疲弊していた。

こんな時は、ねえちゃんに会いたい。

出来事全部を、夢の内容を全部聞いてもらいたい。

そして、何か答えが欲しい。

「ありがとう、ヴィックキー」

でも、ねえちゃんは今ここにいない。

自分で何とかしなくちゃいけない。

「インの事も、過去の事も。

とても不安だった。

本当に全部解決できる力が自分にあるんだろうかって。ちゃんと「インを盗んだ相手を探し出して王様に報告できるんだろうかって。

それでも今は前に進むしかない。

他に道などないのだから。

SECT・15 ライティーン=シン

夜中になるのを待つて屋上に向かった。

扉を一枚開けると、昼の暑さとは打って変わつてひんやりした空気が包み込んでくれた。

見慣れた屋上の景色の中に、いつものように見慣れた紅髪の剣士の姿がある。

「いつもより遅かったな、ラック」

「うんちょっと」

じつと藍色の瞳を見つめた。その中の光に問い合わせるように。その視線に気づいてライティーンは少し首を傾げた。

「どうしたんだ？ 今日は練習しないのか？」

これはわざと言つてる？ それともおれに問い合わせ欲しいか、もしくは……本当に知らないのか。

3番目である事を願いながら一つ大きく深呼吸した。

そして静かに口を開く。

「ねえ、ライティーン」

「何だ？ レメゲトン」

「少しだけ、散歩しない？」

その言葉にどんな空気を受け取つたんだろうか。

何かを考えたような間を置いて、ライティーンはいよいよと言つた。

宿舎を出たところでライティーンに左手を差し出した。

包帯は巻いている。籠手もつけている。

「手、つないでいい？」

「うえつ？」

なぜかライティーンはひどく驚いて、それでも恐る恐る手をとつた。

アレイさんの温かい手とは違つて少しひやりとしていた。コインの左手で相手の右手をぎゅっと握つて、ゆっくりと歩き出した。

今までだつたらすぐに聞きたい」とを訊ねられたのに、何故だか

今日は言い出すのが憚られた。

「ねー、ライディーン」

「……何だ？」

「何で騎士にならうと思つたの？」

田を合わせずに前を見て、本題には全く関係のない、そんな言葉が口をついた。

鷺部隊の宿舎を右手に見送つて、訓練所の出口に向かつて歩いていった。

「前に言つただろ。俺はクロウリー伯爵に負けたくなかったんだ」「何故？」

「だつて同じマルコシアスの血を引く子孫なんだ。相手は公爵家の嫡子でこちらは平民……それはおかしいと思わないか？ 剣の腕だって負けない。小さい頃から爺さんに習つてきた」

いまいち言いたい事がつかめずにふと藍色の瞳を見上げた。

ライディーンは右手に力を込めた。

「なぜ同じ血なのに彼は伯爵で俺は市民なんだ？ 俺はそれに耐えられなかつた。いつかあの人を越えてやると思つていた。世間を見返してやるうつて」

「じめん、よく分からぬよライディーン。何で貴族になりたいの？ 何でアレイさんを越えたいの？ 世間つて？」

言葉の意味が分からなかつた。

いや、知つている言葉ばかりだつたのに、並べ方を変えただけでこんなにも分からなくなるものなんだと思つた。

ライディーンは自嘲気味に微笑んだ。

初めて見せるその表情はどこか悲しみを含んでいた。

「きっとラックには分からないだろう。お前だつてグリフィスの末裔なんだから。何一つ苦労せず地位を持つたものにこの気持ちは理

解できないさ」

つないだ左手がさらに強く握り締められた。

それがライディーンの強い気持ちを表しているようで胸に響いた。
「俺は自分の実力ならクロウリー伯爵にだって負けない自信がある。
チャンスさえあればレメゲトンの仕事だつてこなしてみせるさ。でも、生まれた家が違うだけで、俺にはその機会さえ与えられないんだ。こんなおかしいことはないだろう?」

生まれた家のことを嫌っているんだろうか。貴族に生まれたかつたんだろうか。それともレメゲトンになりたかったんだろうか。
ライディーンの言つ事は分からぬ。

「分からぬよ」

心の底から。

ただ単純に理解できなかつた。

「おれはグリフィスの名前を貰おうと貰うまいとおれだよ。ねえちやんが拾つてくれて、名前を呼んでくれた瞬間からおれはラックだ」
グレイシャー＝ルシファ＝グリフィス。

聞かれて答える事はあつても、自分から名乗る事など一生無い名だらう。

「本当の名前?」

ライディーンが眉を寄せた。

「うん。この間あるヒトがあれの本当の名前を教えてくれたんだ。きっとその名前は一生使わないだろうけど」

「どうこうことだ? 何を言つてるんだ、お前」

「おれ、過去が無いんだ。15歳より昔の事は覚えてない」

さらりと零した言葉にライディーンが息を呑んだのが分かつた。それを無視して続けた。

「でも今はそんなことどうでもいいんだ。なあ、ライディーン。お前は一体どうしたいんだ? クロウリーの名が欲しい? レメゲトンになりたいの? それともただ単純にアレイさんに勝ちたいだけなのか?」

詰問するつもりではなかつた。

ただ分からなかつただけ。単純な好奇心でこの紅髪の剣士が求めるものを知りたいと思つただけだつた。

ライディーンは藍色の瞳を闇に向けた。

微かに靴音のする砂利道をただゆっくりと歩いていた。

「しいて言えば、自分の存在を世に知らしめたいんだ。俺はこれだけの事が出来るんだぞつて、みんなに知つて欲しい」

「でもそれは、もうみんな知つてるよ？」

ファイさんが、ヴィツキーが、鴉からすのみんながライディーンの実力を認めている。

自分だつてそう思つてゐる。

それでもライディーンは首を横に振つた。

「違う。そういうことじやない。世間一般的につて意味だ。そうだ、名声を手に入れたいんだ、俺は」「めいせい？」

きょとんと首を傾げると、ライディーンは困つたように笑つた。

「そういうやお前、頭弱いんだつたな。難しい話して悪かつたよ」

もうこれ以上この話を続ける気はないようだ、つないだ手がふと緩んだ。

が、離れないようにぎゅっと握つた。

藍色の瞳が不思議そうに見下ろしている。

「ラック？」

「あのね、ライディーン」

「何だ？」

「もう一つ、どうしても聞きたい事があるんだ」「もうすいぶん歩いてきた。

その間ずつと手をつないでいた。

ラースのくれた悪魔の左手と埋め込まれた悪魔のコイン、それに

籠手にはマルコシアスさんの羽根も縫いつけてある。

ライディーンはこの間に相当な量の悪魔の気を受けていたはずだ

つた。

しかし、彼に全く変化は見られない。

多少の悪魔耐性があると思つて間違いないだろ？

ぎゅっと手を握り締めて、藍色の瞳を見上げた。

ひどく困惑した顔で見下ろしている紅髪の少年がどう返してくれるのか見当もつかなかつた。

できれば思い違いであつて欲しい。

「アガレスさんを知らないか……？」

「え？」

ライディーンは素つ頓狂な声を上げた。

「今朝どつかに行つちゃつたんだ。おれを置いて消えちやつた

今はコインがない胸元に右手を押し当てた。

「おれのコイン、知らないか？」

もう一度問いかながら、闇に溶けそうな藍色の瞳を見上げた。

ライディーンは真直ぐに自分を見下ろしていた。その視線を正面から受け、見上げ返した。

静寂が流れる。緊張で皮膚が切れそつなぐらい張り詰めている。心臓の拍動がひどくゅっくり、大きなものに聞こえた。

もう聞いてしまった。後戻りは出来ない。

何より長い一瞬の後、ライディーンはため息を吐いた。

「何だ、さっきから様子がおかしいと思つたら……」

ライディーンは空いたほうの左手でこぢらの首筋に手を伸ばしてきた。

まるで何かを探すよつこ、するりとくすぐつたいた感触があつて手はすぐに離れていく。

「失くしたのか、『イン』

口をつぐんで答えないと、ライディーンはもう一度ため息をついた。

「残念ながら知らない。昨日の晩、部屋まで送つてやつた時にはまだあつた。それだけは断言できる」

真摯な瞳に嘘の欠片は見当たらなかつた。

その瞬間、急に力が抜けた。

「悪いな、役に立てなくて」

「……よかつた」

ライディーンじゃなくて。

先ほどまでの緊張感がぶつりと切れで、じわじわと安心感が心に広がつていった。

疑つてしまつた事をすゞしく後悔した。

「ごめん、ライディーン」

「何が？」

「お前が盗つたかと思つたんだ」

そう言つと、ライディーンは手を大きく見開いた。

それを見ていられなくてぱつと手を離して背を向けた。

「今朝起きたらコインのペンダントが失くなつてた。おれは昨日の練習で疲れて眠つてたから気がつかなかつた

「だから、俺が盗つたかもつて？」

「それだけじやないよ。悪魔のコインからはヒトに悪い影響を与える気が発せられていて、おれみたいなレメゲトンはその気に対する耐性を持つてる。でも、普通のヒトはあんまり長く触れていると体調崩したり精神が不安定になつたりするんだつて」

籠手をはずした。

ぱさりと音がして地面に落ちる。

「コインを盗むにはそれなりに耐性がなくちゃ無理だからと思つたんだ。ヴィックキーはダメだつた。全然耐性がなかつた」

さりにするすると包帯をほどいていった。

「……！」

背後でライディーンが息を呑んだのが分かつた。

「試したんだ、『めん』

田があわざずに背を向けて、完全に露になつた左手を闇に突き出した。

くすんだ黄金に煌く熱を持つたコインには殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスの紋章が描かれていた。その周囲の皮膚は赤黒く黒ずんで、血管が浮かび上がつている。

ずっとこの左手に掴まれていたと知つたら、ライディーンは氣色悪いと思つだらうか。

「ライディーンには耐性があるよ。悪魔の血を引いてるつて言つてたから当たり前つて言われたら当たり前だけどや」

すゞしく心が痛んだ。ライディーンを勝手に疑つて、勝手に試したこと。

同時に、ライディーン以外のヒトが取つたんだとしたら、探すのは相当困難になる。どうやって探したらいいか分からぬ それ

はとても絶望的なことだった。

何も言えなくなつてじつと黙り込んだ。

また紫の瞳を思い出しあうになつてぶんぶんと頭を振る。

「アレイさん……」

それなのにぽりりと口から召前が転がり出した。

しまつた、と思つた。

じわりと田頭が熱くなる。

「クロウリー伯爵がどうかしたのか」

後ろからライディーンの声がした。

答えられない。声を出したら泣き出してしまった。

沈黙が訪れた。

長い長い静寂の後、ライディーンはもう一度口を開いた。

「なあ、ラック。さつき俺には悪魔耐性があるつて言つたよな」

「うん」

その強さのほどは分からぬけれど、少なくとも一般人よりは高いだろう。

「それは、俺にもレメゲトンになる素質があるつていうことだと思つていいか？」

「分かんない。おれはミジユクモノだから。でも、少なくともレメゲトンになるには耐性が必要なんだつて。じこ様に聞けば分かると思つよ」「みづ」

そう言つと、ライディーンはふに正面に回ってきた。

高い位置にある顔を首につぱいにして見上げると、ライディーンは真剣な顔で言つた。

「ラック、一生の頼みがある」

「何？」

「俺をレメゲトンにしてくれないか」

「?！」

言つてゐる意味が分からなかつた。

来年には漆黒星騎士団剣術部隊
プラックルビー

たか
に所属するだらう。 ファイさ

んの話からするともう何年もしないうちにリーダーになり、行く行くはライガさんの後をついで部隊長に就任するだろう。

それを蹴つてレメゲトンになりたいと言つのか……？

「だつて、ライティーンは騎士なんだろ。強くなるんだろ？」アレ

頭が混乱した。

「でも俺に力があるんならそれを試してみたいと思つのが普通じやないのか？」

見上げた藍色の瞳は真剣だつた。

同時に強い意思の炎が揺らめいていて、その迫力に圧倒された。

「騎士と言う位にはこだわらない。俺の力を知らしめる事が出来るならレメゲトンのほうが有効だ」

……おれにライディーンをレメゲトンにする権限はないよ」「あるのは王様だけだ。

「でもお前はレメゲトンだ。未熟者だといつても偉いヒトたちと少しくらい繋がりがあるだろ？」「う？」

「せりや、じこ様とかで聞いてみれば……」

ライディーンは深く頭を下げる。

「この騎士団に来て、お前に会えたことはリュシフールの導きだと
思っている。俺に与えられた幸運だと」

「ライティーン」

「俺は自分の力を試したいんだ。自分の力を世に知らしめたいんだ。自分が出来るすべてを見せ付けたい」

「やめて、頭を上げてよ」

そんな風にしないで欲しい。

「分かつた、明日じい様に聞いてみる。きっとじい様なら何とかし
新しい世界でや」と見てにかが遠なのは

「おくれて

「本当か…」

ライディーンはぱつと顔を上げた。

「でも、うまくいくとは限らないんだ。おれにもレメゲトンのことはよく分からなくて……でも、ライディーンがそれだけ強く望むのなら、できる限りやつてみるよ」

「ありがとう、ラック！」

本当に嬉しそうに笑つた彼の顔を見て、がんばろうと思つた。

でも、がんばらなくちゃいけないことはいっぱいある。

何より先にコインを探さなくちゃ。その間にも忘れず剣術や馬術を学ばなくちゃ。最終的には今よりずっともつと強くなつて早く大切な一人の元へ急がなくちゃ。

やりたいことやらなくちゃいけないとがたくさんありますきて体がばらばらになつてしまいそうだ。

一体何から初めていいかわからない。

それでも一つ一つクリアしていく以外にきっと前に進む道は無いのだろう。

この時期を必死になつて乗り越えていけばその先に大きな成長があると信じている。きっとあの一人の隣に立てる信じている。

だから

ヴィッツキーとクラウゼさんに言ひて、次の日はすぐジュテツカ城に参内した。

じい様に会うためだ。

最近やつと乗れるようになった馬を一頭借りて歩くようなペースで城を目指した。

半月ぶりにインフェルノ・ゲートをくぐつて城下町に入ると、以前ならたくさんヒトで賑わっていたはずのメインストリートが閑散としていた。

人通りも極端に少ない。開いている店は少なく、特に食料品の店は固く扉を閉じていた。

「これが戦争……？」

騎士団の訓練所内にいる自分には感じ取れなかつた戦の足音。どんよりとした空氣と暗く沈んだ街並みは確実に迫る苦戦を暗に示しているようだつた。

いまも騎士団の敷地で訓練を行つている一般兵は、そろそろ戦地へと送られてしまうだろう。そつすれば残つているのが女性や子供たちばかりになるのは時間の問題だ。

それはいつたいどんな気持ちなんだろう。

自分も大切な二人を戦地へ見送つた。

あの時の裂かれるような気持ちをこの街のヒトみんなが受け取つてしまふと言つんだろうか。

なんて悲しいことなんだろう

突き刺すような痛みを発した胸にぎゅっと手を当てた。

プルガトリオ・ゲートを抜けて真直ぐパラディソ・ゲートへ向かう。

いつもはない強固な警備が行われていた。

「レメゲトンのラック＝グリフィスです。ヴァイナー老師にお申通り願います」

やつと少しだけ使えるようになつた敬語で警備兵のヒトに告げる
と、あっさりと通してくれた。

最近ようやくレメゲトンの位が持つ力を知るようになった。まだ
未熟で騎士団に配属されていない自分より上の位にいるのはゼテキ
ヤ王やまだ会つことのない王妃様、それにサンなど数えるほどし
かいない王家の者のみだ。

そのせいで政治に関わっている貴族のヒトたちからはあまりよく
思われていることもあるのだという。

自分は直接そんな貴族さんたちに何か言われた事はなかつたが、
ねえちゃんやアレイさんはとても苦労してきたようだつた。

ゲートを過ぎてからは馬を引いて、悪魔の魔方陣が大量に描かれた
地下室のある神殿にやつてきた。じい様はその建物の最上階、占
いを行う小さな部屋にいるらしい。

書物が所狭しと詰まれた部屋の中で星占い用の天文盤をまわすじ
い様は、自分が来たことに気づくと手を止めてこちらに目を向けた。
「ここにちは、じい様。元気だつた？」

「久しぶりだな、ラック。大変な事になつていて聞いたのだが」「
うん、ちょっとね。だから少し占つて欲しいなと思つて」「
よからう」

じい様は白い髪を揺らして天文盤を回し始めた。

アレイさんがカードで占いをするように、じい様はこの直径一メー
トルはある天文盤を使って未来を占つ。

同じように王都に残留したレメゲトンのマイザースさんもこの天
文盤を使うのだと言つ。

「コインの行方を尋ねよう

じい様は静かに呴いて天文版に刻まれた星の位置を決めていく。

自分は息を潜めてそれを見ていた。

「ふむ、とても近くにあるようだ。草木が潜む時間に現れる。離れる事を拒むとても深い愛を持つ者だ。一つは一つ、一人は一つのものを見んでいい」

「じい様、難しいよ。アガレスさんみたいだ」

そう文句を言うとじい様は白い鬚の奥の唇の端で微笑んだ。

「氣をつけよ。そもそも盗んだ者が精神に異常をきたし始める頃だ」

「うん、分かった」

逆に言えば、もし精神や肉体に変調をきたすヒトがいればすぐにばれてしまうことになる。

その時、はつと氣がついた そうか、そつすればいいんだ。

簡単な事だつたんだ。

もし悪用するつもりでなく、どこかに売られたりする事も無く、本人も盗つたことを悔やんでただ持つてているだけだとしたらすぐわかる。

あと1日、長くても2日で犯人は現れるだろう。

「ありがとう、じい様」

一度お礼を言ってから、もうひとつ問題を切り出した。

「ねえ、じい様。騎士団の中にレメゲトンになりたいって奴がいるんだ」

じい様は一瞬言葉を失つたようだった。

「もしそういうヒトがいた場合で、本当に素質があつたら何とかできるものなの？」

「……素質があればな。ミリアナ＝アリギエリの話を知っているか」

「うん。100年位前にウェルギリウス＝アリギエリっていうヒトが養子として引き取つて、最終的には妻にしたヒトだよね」

そして彼女はレメゲトンの才能を見出されて12と言つ異例の若さでレメゲトンの職に就いた。

「たぶん素質はあると思う。アレイさんと同じクロウリー家の血を

継いでるんだって。悪魔耐性もそれなりにあつたよ。それに、剣が
ものすごいくつまいんだ。」

「名は？」

「ライティーン＝シン。今年から漆黒星騎士団の鴉部隊に配属され
たんだ。まだ15歳だけどね」

「ふむ……かなり前の薄まつた血ではあるがクロウリーの系譜だ、
それなりの潜在能力はあるだろ？」

じい様は一瞬考えた後、頷いた。

「会つてみて考える。連れてくるといこ。王には己から進言してお
け」

「うう

「この時勢だ、実戦の場に出るレメゲトンが多いに越した事はない」

じい様は吐き出すように呟いた。

この街を包み込んだ重い空氣や人々の悲しみを作り出したのが戦
争だとしたら、おれはやっぱり戦争が大嫌いだ。

じい様も王様もそう思つてゐるはずなのに、どうして今戦争が起
きているんだろう？

この世界は難しいことだらけだ。

僕に一度訓練所に帰り、ライティーンをつれてもう一度神殿に戻
つてきた。

連れ出す理由をクラウドさんに説明すると驚いた顔をしていたが、
激励の言葉をかけてくれた。

「それが君の望む道なら、ライティーン、僕はいくらでも応援する
よ」

紅髪の騎士は深く頭を下げて騎士団長の心に応えた。

じい様が何か言つておいてくれたのか、なりたての騎士でしかな
いライティーンもすぐにパラディン・ゲート内に入る事が出来た。

神殿に入ると、王家の紋章を象った天窓が迎えてくれた。

ここに来るのが初めてのライディーンは呆けたように口をぽかりと開けて圧倒されている。

「すごいな……ここ」

「うん、最初はおれもめちゃめちゃ緊張したよ」

ついこの間の事が何故こんなにも懐かしいのだろう。

初めてアガレスさんと契約した時の事は今でもはっきりと思い出せる。

「来たか」

天窓の下にじい様が立っていた。

ライディーンは漆黒の騎士の正装で跪いた。

「初めまして、ヴァイヤー老師。ライディーン＝シンと申します」

「ふむ。珍しい髪色をしているな」

「異国生まれの母譲りです。ここからはるか南のワーリン大陸からのディアブル大陸へ渡ってきたそうです」

「そうか」

じい様はいつも持つている杖を頬りにゆっくりとライディーンに近づいた。

自分はその様子を固唾を呑んで見守っていた。

「少し失礼する」

じい様はそう言って杖の先をライディーンに向けた。
ぼんやりと杖の先が光る。

「フルカス」

魔方陣が発動した。

じい様はもう細くなつた目をいっぱいに見開いてライディーンを見た。

その背後にはぼんやりと老人の姿が見えている。じい様よりずつと年上で小さくなつたその姿は老賢者と呼ぶには少々しほんでいる。姿に似合わない大きな槍が今にもその老人の手から滑り落ちそうだ。

「それほど強くは無いが申し分ない。悪魔耐性は十分なようだ」

じい様がそう言つと、背後の老人がふつと消えた。
どうやらすぐに魔界へ帰つてしまつたようだ。

「ライディーン＝シン、お主は何故レメゲトンを望む？」

「自分の持つ力を確かめるためです。もし俺に力があるといふのなら試してみたい。どこまで出来るのか、何ができるのか。騎士団に入団したのもそのためです。それはレメゲトンになるとしても変わりません」

「険しい道となるぞ」

「精進します」

「一度入れば抜けられぬ。それでも力を欲するか」

「はい」

ライディーンの藍色の瞳は決心に満ちていた。

とても強い光だった。

じい様はその光の中に何を受け取つたんだろう。
しばらくして杖を下ろすと、静かにこう言つた。

「後で使いを出す。訓練所にて待て」

ぐるりと背を向けてじい様はこう続けた。

「詳しい事は後々話す。まだ決定したわけではないが、とりあえず己の推薦を王に提出しよう」

「ありがとうございます！」

その瞬間ライディーンの顔が輝いた。

その嬉しそうな顔は15歳の少年そのものだった。

次の日の朝早く、ライディーンは訓練所を後にした。詳しい事はみんなに知らされていなかつたため、困惑を隠せないようだつた。

ヴィックキーだけがこゝそり聞いてきた。

「おいらック。まさかライディーンがコインを……」

「うん、おれもそう思つたんだけど違つてたんだ」

そう言つてじい様とのやりとりを簡単に説明した。

「ライディーンは犯人だつたわけじゃなくて、悪魔耐性があつたからレメゲトンに推薦したんだ。だからジユデツカ城にお呼ばれしたんだよ」

そう答えると、ヴィックキーは目を丸くした。

「あいつがレメゲトンだと？」

「うん。これからどうなるかは分からないけど、じい様は王様に推薦するつて言つたからたぶん将来的にはそななるんじゃないかな」

「……信じられんな」

そう言つてからヴィックキーはおれのほうをちらりと見てもう一度ため息をついた。

「まあ、お前がなれるくらいだから大丈夫か」

「どういう意味だよ！」

「怒るな。それよりコインはどうなつたんだ？」

「うん、そつちはだいじょうぶ、もうすぐ分かるよきっと」

「……？」

「だつてコインは毒だから」「くらヒドより強くても身につけていくつても、傍においている以上そろそろ影響が出始めるはずなんだ」

「そつか」

ヴィックキーは複雑そうな顔をした。

「犯人が分かつたら分かつたで嫌なものだな」

「うん、そうだね」

誰であつたとしても驚くだろ？。

一体どんな理由であつたとしても罰則は与えなくちゃいけないだろ？。

もちろん自分の方にも過失があるからそれも考慮しなくちゃいけない。

でも、何より知りたいのはその動機だつた。何故コインを盗んだのか。それが純然たる好奇心でもつて一番知りたいことだつた。

それから2日が経つた。

思惑とは裏腹に鴉の誰かが体調を崩したり、精神に異常をきたすような事はなかつた。

思つたよりずっと強い悪魔耐性の持ち主なのだろうか。

だとすると困つた事だが、それほどならライディーンと同じようにレメゲトンに推薦するのもいいかもしない。

ジユデツカ城に呼ばれてからまだ連絡のつかない紅の髪を思い出しながらそう思つた。

きっと彼にはレメゲトンの正装も似合つ。剣の腕もあるし、アレイさんと戦線で並ぶ勇ましいレメゲトンが誕生する事だろ？。

思ったようにコインが見つからず、不安に打ち震える胸を忘れるやうとそんなのんきなことを考えている3日目の朝のことだつた。とうとう、一人の少年が練習中地に伏した。

彼はすぐに救護所へ運ばれていつた。

ヴィックキーと田で合図して、自分は急いで救護室へと向かつた。

救護室にはまだ医者や看護婦さんがいて、倒れた少年から事情を聞いているようだつた。

が、こつちは急ぎの用だ。

「お医者さんも看護婦さんも少しだけ席を外してくれるかな？」

「何故君がそんな事を？」

お医者さんは訝しげに言った。

いろいろ説明が面倒だったので、最近やつと理解したレメゲトンの地位をふんだんに利用する事にした。

左手の包帯をするすると外していく。

お医者さんと看護婦さんの顔色が変わった。

「おれはレメゲトンのラック＝グリフィス。少し席を外していく欲しい。このヒトに大事な話があるんだ」

効果は絶大だった。

医者と看護婦さんは部屋を出て行き、望みどおりにベッドに横たわる少年と一緒に救護室に残されたのだった。

ベッドの中の少年を見下ろした。

きっと今、左手に埋め込まれていたコインも見ていたはずだ。

それでも少年は顔色を変えず、こちらを向きもせずただ天井を見つめていた。

「おれが何を聞きたいかは分かるよね」

「……」

少年は答えなかつた。

「とりあえず、返して。あれはおれの大切なものなんだ。お前が持つてたつて使えないし何の役にも立たない。もしおれの事が嫌いでイジワルしてるつて言うんなら、力づくでも取り戻すよ」

「……ごめん」

少年はぽつりと呟き、シーツの下から右手を出した。

そこには鈍い金色に光る二つのコインが握られていた。

それを受け取つて首にかけた。慣れた重さにほつとした。安心に包まれた感じがする やはりおれにはこのコインがないとダメみたいだ。

「どうして盗つたの？」

「……」

少年は口を噤んだ。

部屋が違うのだから「メインを盗るために女性部屋に忍び込まなくてはいけない。

そんな危険を冒してまで「Jの「メインを欲しがった理由が分からなかつた。

「これはただ的好奇心だよ。何でそうまでしてこれが欲しかつたか知りたいだけなんだ」

それでもベッドに横たわる黒髪の少年が答える気配はなかつた。
「誰かに頼まれたのか？ おれが気に食わなかつたのか？ それとももつと別の理由があるのか……？」

少年は答えない。

「教えてくれよ、ルーク！」

黒猫の瞳を持つ少年はその瞳に光を映さず、ただ天井を見つめていた。

ライディーンと並んで期待された剣の腕を持つているといつのこと。メリルと乳兄弟で今でもとても仲がいい。朝の練習にも欠かさず参加している。

原因が何も見当たらなかつた。

「ルーク……」
「ルーク！」

自分の声に愛らしい少女の声が重なつた。

黒いカチューシャと若草色の瞳 ルークの乳兄弟のメリルだ。

「姫」

ルークの顔が青ざめた。

メリルは泣きそうな顔をしてベッドに駆け寄つた。

「ごめん、ごめんね、ルーク。辛い？ 本当にごめんね」

「大丈夫だよ、姫……そんな顔しないで」

入り込む余地が無くてただその場に佇んだ。

金田の黒猫ルークはメリルの手を借りて起き上がった。

「ラック、ごめん。どんな罰でも受けるよ。その代わり理由は言え
ないんだ」

「ルーク！」

メリルが悲鳴のような声を上げた。

ルークはメリルの口を手で塞いだ。

「ラックはレメゲトンだつたんだな。そのコインを盗つたんだから
俺は第一級犯罪者かな。もう覚悟は出来るよ。警備隊にでもどこ
にでも突き出してくれ」

「罰則権限はおれにある。王様から言われてるんだ」

「そうか……」

ルークは軽く微笑んだ。

「ごめん、ラック。謝つですむ問題じゃないけど本当にごめん
「理由は言えないの？」

「うん」

「どうしても？」

「どうしても」

ルークの瞳には強い意思が灯っていた。

でも、それじゃ納得できない。

「んじや、ブラックルビ漆黒星騎士団 鴉部隊所属ルーク=ハンバキア。罰則を

言い渡す」

ところがその瞬間鋭い少女の声が遮った。

「待つて！ ラック！」

ルークの手が外れて、メリルが叫んだのだ。

黒猫の顔が歪んだ。

「罰を受けるのは私よ。だつてコインを盗つたのは……」

「メリル！」

「私、だから」

「違う！」

「偶然夜中に起きたらラックの首にコインを見つけたの。どうして

も……どうしても「

「やめろメリル！」

いつたい目の前で何が起きているのか分からぬ。

そして、何がどうなつてコインをルークが持つていたのかも。

「二人ともやめろ！」

思わず叫んでいた。

その一喝でルークとメリルは口を噤んだ。

「罰則を言い渡す。二人分だ。」

何故だかわからぬいけれどすごく苛々していた。

きっと何も分からぬ事が悔しかつたんだと思う。

「ルーク＝ハンバキア、メリル＝Ｋ＝ファランドル。何があつたのか、何故盗ったのか、どうしてルークがコインを持つていたのか、全部話せ！」

気がつけば腹の底から搾り出すようにして叫んでいた。

SECT・19 メリル＝K＝ファランドル

青ざめた顔をしたメリルとルークは、並んでベッドの端に座った。メリルの目は真っ赤になつていて、ルークはこの世の終わりみたいな顔をしている。

「おれの首からコインを持つていつたのはメリルなんだよね」

「……ええ、そうよ」

「じゃあどうして今はルークが持つてたの？」

「メリルが体調悪そうだったから俺が受け取った。きっと原因はそれ、だと思ったから」

ルークはおれの首にかかったコインのペンダントを差した。

「だから見つけるまでに時間がかかったのか」

悪魔耐性が強かつたわけでなく、二人の手を経ていたからなかなか犯人が特定できなかつたんだ。それでも、一人がかりでせいぜい5日。耐えられる期間は一週間にも満たない。

ずっとこのコインを首から提げている自分は、とても人間とは相容れないのかもしねない。

首のコインをぎゅっと握り締めた。

「もしかしておれのことレメゲトンだつてずっと知つてた？」

「知らなかつたわ。あの夜ラックの首にコインがあるのを見て初めて知つたの」

「ルークは？」

「知らなかつた。3日くらい前にメリルの様子がおかしかつたから問い合わせたらコインを盗んでしまつたつて……その時初めて聞いた」
3日前といふとちょうどじい様のところへライディーンを連れて行つた日だ。その時既にメリルの様子がおかしかつたというのなら、気づかなかつたのは自分の失態だ。

もつと周囲に気を配つておかなければならぬ。
たとえそれがどんな悩みの中であつたとしても。

自分はまだまだ未熟者だ。

「コインはそれからずつとルークが持つてたの？」

「いや、一人で順番に……返すに返せないし、でも部屋に置き去りにするのは怖くて持ち歩いていた」

「……辛かつた？」

悪魔の気は毒だ。

そんなものをたとえ一人ではいえ何日も持ち歩いていたのだ。
かなり体に負担がかかった事は否めないだろう。

どうしてもつと早く気づいてあげられなかつたんだ？

自分の力の無さに苛立ちが募る。

「辛かつたのはラックのほうだろ。俺達が言えた義理じゃないが、
とても大事なもののはずだ」

ルークの言葉は震えていた。

「「めんなさい、」「めんなさい」……」

とうとうメリルは泣き出しちゃった。

「ねえ、メリル。一つだけ教えて」

しゃくり声にかき消されそうだった。

それでもこれだけはどうしても聞いておかなくてはいけなかつた。
「どうしてコインを持つていつたの？」

「それは」

メリルは言い淀んだ。

「自分でも、分からないの。最初は本物かしらって見ていたのだけ
れど、そのうち変な気分になつて……」

その精神の不安定さはおそらくコインの影響によるものだ。

自分も初めてコインを3つ身につけた夜は少しおかしな衝動に駆
られた。

「コインを盗つてもレメゲトンになれるはずないなんてこと、分か
るはずなのに。その時はただこれさえあればって思つて……気がつ
いたら手の中にコインが……」

「メリルはレメゲトンになりたいの？ 騎士じゃなくて？」

メリルの肩が震えた。

「そうよ。だつて私はルークと離れたくない」
その言葉に困惑した。

でも、聞き覚えのある言葉だった。

ねえちゃんと離れたくない。だから王都に行く。レメゲトンになる。強くなる。そればずっとねえちゃんと『ひとつだけ』にして生きてきたおれがことある」とに呴いた台詞と同じものだった。

心臓を抉られるような感覚と胸の痛みが襲ってきた。

「騎士団の中なら同じ地位でいられると思った。だからずっと剣術を稽古してここまで来たの。ルークの傍にいたかったから。でも

」メリルは若草色の瞳をルークに向かた。

「周りはそれを許さないの。お父様もお母様も私のこと離してくれないの。すぐがんばって騎士になつたつて言つのに喜んではくれないの……！」

「姫」

「姫なんて呼ばないで！」

悲鳴のような声にびくりとした。

ルークも動けないでいる。

「私は女の子で、ファーランドル家の一人娘だから、もう少し大人になつたら帰らなくちゃいけないの。帰つてお嬢さんを貰つて、家を継ぐの。そうしたらもうルークに会えなくなつちやう」「レメゲトンになつたら離れなくていいのか？」

「そう」

メリルは涙を拭いた。

「ラック、あなたは私の欲しいもの全部持つてゐることでも無頓着なのね。そんなところは好きだけど、大嫌いよ」

ダイキライ

その言葉に胸を大きく抉られた。

「レメゲトンほどの高い地位をいただければもう父様も母様も親戚

の人たちも文句は言わないわ。きっとルークと一緒にいると言つても許されるはずよ」

「姫

「身分が違うからって反対しないはずよ。私が自分の力で国の中枢に入る事さえできれば！」

ライディーンが言つていた事に似ている。

それでもやつぱり理解できなかつた。

貴族、平民、力、名声 様々なものの圧力。自分には知らない事が多すぎる。

「姫、もういいよ。俺は……」

「ルーク！」

メリルの声が響き渡つた。

部屋の中がシンと静まり返る。

「ラック、私を裁いて。私は子爵家ファーランドルの娘メリル＝Ｋ＝ファーランドルよ。正当な罰を受ける覚悟も出来ているわ」

若草色の瞳が真直ぐに自分を射抜いた。

何者をも恐れない、強い光だった。

その色に息を呑んだ。普段大人しいメリルの中に眠つていたこの激情に圧倒されていた。

きっとメリルの『ひとつだけ』はルークなんだろう。絶対に離れたくないという感情が勢いあまつてしまつただけなんだろう。それにコインの毒氣で不安定になつた精神が付加されて、行動を起こしてしまつた。

きっとそれがこの事件の真相だ。

「さつき言った。罰はどうしてコインを盗つたのか理由を話すことだ」

ルークと共にいるために力を手に入れようとしたメリル。それを助けようとしたルーク。

レメゲトンと言う地位は、それほどまでに絶対的な権力を持つてゐるのか。多くのヒトがこの職業に憧れてやまないほどに。

「「めん、メリルをレメゲトンに推薦する」ことは出来ないよ。それにもし他に機会があつても無理だと思う」

「悪魔耐性がないからコインを持つ事などできない。

「……そんな事分かつっていたわ。それでも……」

メリルの声が消えていった。

代わりに嗚咽が聞こえる。

整理できない気持ちを抱えたまま、部屋を後にした。

部屋の外には、ヴィックキーが佇んでいた。

橙の髪をした鴉リーダーは険しい顔でポソリと聞いた。

「……どうだつた」

「うん、なんだかすゞく辛いや。コインは戻つてきたのに、ヘンだね」

そう言つと、ヴィックキーはぽんと頭に手を置いてくれた。

「戻ろつ、ラック。クラウド団長にも報告せねばなるまい」

「うん、そうだね」

包帯を外してコインが露になつた左手を隠すよつとして、救護室を後にして、

救護室

SECT・20 新たなレメゲトン

午後も訓練を休んでクラウドさんの元へ向かった。
いつもならこの時間、騎士団員の手ほどきを受けているはずの一般兵が見当たらない。

ヴィックキーいわく、すでに戦地へ赴いたとのことだつた。第2期生が明日には入ってくるのだといつ。

「これからはもっと多くの志願兵がこの訓練所を訪れるだろう。戦が本格化すればこの騎士団の一部も戦場に赴く事になる」

「……」

つい先日田の当たりにした街の閑散とした様子を思い出した。
ここには戦地から遠く離れている。

現在の戦地は東の都トロメオ、しかしここは西の都とも呼ばれる王都ユダだ。国の正反対に位置するこの都市にさえ影響があるくらいだ。

実際の戦地の様子は思に浮かべようとしても思い浮かばなかつた。

約束の時間通りにクラウドさんの部屋に入ると、金髪に翡翠の瞳を持つ騎士団長クラウド=フォーチュンはこつむどおりの優しい笑顔で迎えてくれた。

「ようやくコインが見つかったようだね

「うそ」

「では状況を報告してくれるかな?」

ゆつたりとしたソファに身を埋めて、先ほどの話を自分で整理しながら話しだした。

偶然コインを見つけたメリルは、毒性で精神が不安定になつて衝動的にコインを盗んでしまつた。それに気づいたルークと一人、隠そうとしたが5日目でコインの毒によつて燃りだされてしまつた。

つまりはメリルがレメゲトンになりたいという感情を少なからず持っていた事が原因だつたということだ 大切なヒトと共にいるために。

「ねえ、クラウドさん」

「何かな」

「レメゲトンってそんなにすごいの？ 権力とか身分とかいろんなものを気にしなくてもいられるくらい？」

素直にそう聞くと、クラウドさんは困ったように微笑んだ。

「そうだね。順番からいくと王様の次に偉いってことになつてしまふから。ただ、配下の組織が無いために権限としては小さいが、それ以上にコインの悪魔の実働性は優れている。どんな部隊よりもね」「うん、確かに悪魔さんたちは強いよ」

アガレスさんもフーラウロスさんも、そしてラースも、左手のコインに手を当てた。

「しかもグリモワール王国では悪魔が崇拜されている。その悪魔を使役するレメゲトンは、国民的に凄まじい人気なのだよ」

「そうなの？」

ひょい、と後ろのヴィックキーを振り向くと、彼女は頭を押されてため息をついた。

「以前までは私もそうだったよ、お前に会つまではな

「どういう意味だよ」

「言葉通りだ」

「まあまあ、ヴィックキー。落ち着いて」

クラウドさんがたしなめた。

「いずれにせよメリルとルークの二人が犯人だつたわけだ。で、ラック、君はどうした？」

「ん、それを全部話してもらつた」

「そうか」

向かいに座つたクラウドさんは少し困つた顔をした。が、後ろのヴィックキーは眉を吊り上げた。

「待て、ラック。それはつまり罰を課していないといふことか？」「だから話してもらつた。話したくないって言つた事を話してもらつたんだから罰にはならないのかな？」

「お前は……」

ヴィッシュキーのこめかみに青筋が浮いた。

しまつた。なぜか怒らせてしまつたようだ。

「きちんとした規則を作り、それを遵守する。また、それを破つたものにはそれ相応の罰を下さる！ これが常識だ、馬鹿者！」

「だから……」

「言い訳は聞かん！」

びりびり、と空氣が震えた。

クラウドさんは楽しそうにこちらの様子を見ている。
見てないで助けてよ！

「あの一人には私の方から謹慎一〇日を命じておく。いいな、レメ

ゲトン殿？」

「え、でも」

「いいですね？！」

「あ、う、はい……」

結局迫力負けして頷くと、ヴィッシュキーはよつやく緊張の空氣を解

いた。

クラウドさんがにこにこと笑つてヴィッシュキーに礼を垂つた。

「助かるよ、ありがと！」

「当たり前の事をしたまでです、団長」

「ふふ、これからも頼むよ、ヴィッシュキー」

クラウドさんは優しく微笑んで、頭を撫でてくれた。

「ちゃんと解決できたね、ラック。それをちゃんと王様に報告して来るんだ。参内の命令もでている。私も一緒に行くから、一度ファウスト家によつて正装を整えてもらひなさい」

「はあい」

ねえちゃんちに戻るのは久しぶりだ。もう一ヶ月くらい経つただ

ろうか。

稽古に戻るというヴィックキーと別れて、クラウドさんと一緒に
フェルノ・ゲートをぐぐつた。

久しぶりに帰ると、アイリスとリコリスが出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ」

「久しぶりアイリス、リコリス」

にこりと笑つてから一緒に来たクラウドさんにも微笑みかける。
すぐ着替えてくるからちょっと待つて。アイリスはおれの着替
え手伝つてくれる?リコリスはクラウドさんにお茶をお願い

「かしこまりました」

クラウドさんと別れて自分の部屋へ入る。

すぐに正装を支度してもらつて身につけ……ようとした。

「ラック様、少し体型が変わられたのでは……」

きつい。胸の辺りが特に。

無理やり着てみたけれど、少しばかり息が苦しい。

「成長期ですものね、また作り直していただきましょう」

「また採寸するの?あれ面倒だから嫌だよ」

「そうおっしゃらすに」

アイリスは困ったように笑い、最後に紫のマントで背の傷を隠して
くれた。

「髪も少し伸びたようですね。今度そろえましよう」

「うん、そうかも」

「コインをベルトに下げながら答え、最後に黒の手袋を左手にだけ
はめた。

ジュデッカ城ではなぜかすぐに謁見の間へ通された。

そこにはじい様と、いつの間にか漆黒の甲冑をつけたクラウ

ドさん、それに見た事のない淡いグリーンの甲冑に身を包んだヒトがいる。

あれ、これは何となく覚えているぞ。

そう思つてはいるど、謁見の間の入り口が開いて見覚えのある紅の髪の剣士が入つてきた。

漆黒の騎士服に身を包んだ15歳の少年はとても年相応とは思えない身のこなしで颯爽と間の中央まで進み出た。

壇上から王様の声が降つてくる。

「ライディーン＝シン、彼の者をグリモワール王国レメゲトンに任命し、第14番田レラージュを与える。」

どうやら彼は望みを叶えたようだ。

藍色の瞳と目が合つて、にこりと微笑んだ。

謁見の間を出てからすぐ、盛大に文句を言つた。

「レメゲトンの認証式ならそう言つてくれればよかつたのに…」

「言わぬ方が驚くと思つてね」

クラウドさんはにこにこと笑つた。

「行つておいで、きっと彼も君の事を待つてゐるよ

「うん、ありがとう！」

大きく手を振つてクラウドさんと別れ、新たなレメゲトンの元へ向かつた。

「ライディーン、おめでと!」

「ラック!」

数日ぶりに会ったライディーンは満面の笑みで迎えてくれた。

「ありがとう! 全部お前のお陰だ!」

ライディーンは躊躇せずにおれの体を抱きしめた。少しひくりしたけれど、その大きな腕は誰かを思って少しきくなつた。

「離して、苦しいよ」

「やだ」

ライディーンはますます腕に力を込める。

仕方ない。

力ずくで……と思つたのに、ぱビリとした腕は頑として動かなかつた。

「俺に力で敵うわけないだらう?」

勝ち誇つたようなライディーンの声に、なぜか恐怖を覚えた。

「お前がいくら強いと言つても、俺は男でお前は女なんだから」

「!」

別にライディーンだつて怖がらせるつもりはなかつたんだらう。

でも、抵抗できないと思つた瞬間の恐怖は本物だつた。

「離せつ!」

自分が叫んだことに驚いて腕が緩んだ隙にぱつと振りほどいて距離をとつた。

心臓が早い。

息を整えていると、ひどく傷ついた顔のライディーンの姿が目に入つた。

「あ、ごめん……」

思わず謝罪の言葉が口をついたが、それで二人の間の断裂を埋め

る事は出来なかつた。

ライディーンは表情を凍りつかせたまま。

居たたまれなくなつて自分はそんなライディーンを置いて部屋を飛び出してしまつた。

ライディーンを傷つけてしまつた。

だが、それ以上に先ほどの恐怖が脳裏に焼きついていた。
男と女の力の差。抵抗できない状態での恐怖　これまで気づいた事などなかつた制約に、自分自身が混乱してうまく考えられなかつた。

体術の組み手などではない。

完全に自由を奪われたとき、それを跳ね返す筋力は自分にはない。それは訓練の問題ではなく生まれついての体の仕組み自体が問題なのだ。

怖かつた。

自分の力でどうにもならない事態が存在する事が

「ラック！」

ジュデッカ城の長い廊下を駆け抜ける自分を呼び止めたのは、唯一自分のことを女性として扱ってくれた皇太子だった。

「少し、落ち着いた？」

「うん、ありがと」

サンの私室で温かいローラを駆走になつて、やつと息をついた。ねえちやんちにある自分の部屋のさらに何倍もありそうなこの部屋は本当にサン一人で使つているのか疑わしいくらいの広さだつた。「どうしたの、す」「……辛そうな顔をしていたよ

答えられずに俯くと、サンは少し寂しそうな顔で微笑んだ。

「話しては貰えないのかな。僕じや駄目？」

「ううん。そうじやなくて、うまく言葉に出来そつたなくて……」

「い、よ」

はつと見上げると灰色の瞳が優しい光を灯していた。

「ゆうくつでいい。いくらでも聞くよ。ずっと待つよ。だから、話して」

「うん、ありがとう」

先ほどのことをもう一度思い出しながら、少しづつ言葉を紡いでみた。

「サンはよくおれは女だからって言うじゃん。でも、おれ今までやんなこと気にしてなかつたんだ」

正直にそう言うと、サンはとても複雑そうな顔をした。

「ねえちゃんはこいつか分かるわって言うから考えずにいたんだけど、さつきライディーンに抱きしめられたとき、おれはそれを振りほどけなかつたんだ」

「ライディーンと言つと今回新しくレメゲトンになつた少年だね。どうして彼は君に抱きついたりしたの」

サンの言葉にはかすかに怒りが混じついていた。

「ん、別に、ただありがとうって言いながらぎゅーつて。レメゲトンになれるようにじい様にライディーンを紹介したのはおれだったから」

「へえ、うう」

サンの言葉に今までにない冷酷さが混じつている。

それに少し首を傾げながらもとりあえず続けてみた。

「んで、すごく大きな力の差を感じちゃつてさ。おれは鍛えてるつて言つても所詮もどが女だから絶対に力で男のヒトには勝てないんだつて思つたらすぐ怖くなつたんだ」

生物学的な差。それは自分の力ではどうしようもない事だつた。

「剣術とか体術とか、技術でカバーできない力つてもうどうしようもないのかな。おれはどんなに鍛えても弱いままなのかな」

悲しい気持ちを抱えたまま灰色の瞳を見上げた。

「やつとサンが言った意味、少しだけ分かつたよ。おれは女だから

やつぱどこかで力の差を埋めなくちゃいけない。それはすぐ大変な事なんだね」

「そうだよ、ラック。だから僕は」

サンはそこで言葉を飲み込んだ。

代わりにこんな風に質問された。

「ラックはじゃあ、それに気づいてどうしたいと思ったの?」

「ん、分かんないんだ」

何か歯車がかみ合わない。自分の中の価値観が揺らいでいる。

「怖いよ。おれはこれまでやれば出来るって思つてきたけど、もしかしたらそれは間違ってるのかもしれない。がんばれば何でもできるって言つのはもしかしたら……幻想かもしれない」

それに気づいてしまつても、自分は本当にまだがんばれる? 未来が見えない。これから先自分がどうなるのか分からぬ。それはこんなにも不安な事だつたんだ。

「どうしたらしいのかなあ……?」

これまで立ち止まらず必死に剣技を学んで、体術を教わつて、馬に乗る練習をして千里眼を稽古してきた。

それは自分の力で国を守りたいと思つていたからだ。もしその力の可能性があるなら。

自分の力を試すという点では、ライティーンと自分は同じ動機を持つているのかもしね。それによつて得られるものがたとえ違つていたとしても。

でも、果たして自分にはたくさんのヒートを救う力などあるんだろうか。

強くなりさえすればいいと思つていたけれど、本当にそれでいいんだろうか。本当に自分は まだ強くなれるんだろうか。
分からぬ。

ねえちゃんと会いたい。アレイさんと会いたい。

分かんないんだつて言つたらきっと何か返してくれる。それはイジワルな台詞かもしね。アガレスさんのように難しい言葉か

もしけない。

それでもよかつた。

温かい言葉をかけて欲しかつた。

「無理しないで。僕はいつでも待つてる」

「うん、ありがとう」

そうやつて最後に逃げ道を作つてくれたサンは本当にとても優しいんだと思つ。

「聞いてくれてありがとう、サン」「

にこりと笑つて立ち上がつた。

悩むのは後でもできる。

でも、今しか出来なこともある。

「とりあえずライティーンに謝つてくれよ。すまへ……傷つけちゃつたから」

「そう」

サンはとても悲しそうな顔をした。

「どうしたの、サン。すまへ悲しそうだよ」

「何でもないよ、ラック……氣をつけて」

「うん」

サンの表情は少し気になつたけれど、今はとりあえずライティーンの元に向かおう。

そして、ちやんと謝るんだ。

先ほどの部屋まで足早に廊下を歩いていった。

ところが部屋にライティーンの姿はない。

ちよづどそここのいた衛兵さんには聞くと、びひやひすでに神殿へ向かつたらしく。

神殿、と書かれては……

「契約!」

急がなくちや。

城を出て、真直ぐに神殿への道を駆け抜けた。

日は完全に西へ傾いている。

長く伸びる影を見ながら神殿に飛び込んだ。息を整えながらステンドグラスでカラフルに彩られた床を探すが、地下への道が分からぬ。

「ああ、もう！」

確かにこのあたりを杖でついてたような……

適当に床を「じんじん」と叩いていると、唐突に床がせり落ち始めた。どうやら当たったようだ。

目の前を真っ暗な空間が占めていく。目がなれると、やっと人影がぼんやり見えた。

「ライディーン！」

ところが、その空間にいたのはクラウドさんとじい様だけだった。

「ライディーンは？」

「今ちゅうう旅立つたところだよ。じつしたんだ、ラック

しまつた、遅かった。

「……さつさライディーンにひどこじけんやったから謝りついと思つて。でも間に合わなかつた」

「そうか」

クラウドさんは隣に来てぽんぽん、と肩を叩いてくれた。

「帰つてきてから言つとこ。さつとライディーンも許してくれる」「ほんと？」

「ああ、本當だ。だから、訓練所に戻ろ。明日からまた訓練が始まる」

「…………」待つてちゃダメ？」

「ラック、ライディーンはより上を日指す事を知つてゐる。きっと君が訓練を怠ることを望んではないよ」

「分かつた」

でもとても心配だつた。

なぜか分からぬけどすゞぐ不安で、よくない事が起つたそな気がした。

あの時と同じだ。

セフィラがジユテツ力城に乱入してねえちゃんが連れ去られたあの夜と
背筋が震えたが、だいじょうぶだと自分に言い聞かせて神殿を後
にした。

神殿からもう一度お城に戻つて、王様に今回の事を報告した。訳がわからないままだつたことを羅列しただけだったが、王様は何かを汲み取つてくれたようだつた。

「お疲れ様、ラック。でも次はこんな事件にならないよう気をつけ るんだよ」

「わかつたよ。ごめんなさい」

自分ももうあんな喪失感を経験するのは嫌だつた。

本当なら「コインを取られた事に対する罰はこんなものじゃ済まないんだろ?」。毒氣による精神不安定でコインを盗んだメリルと、実際加担していないルークにも謹慎が言い渡された。

過失でコインを盗られた自分に課されるものはもっと重いはずだ。それでも口頭での注意に留める王様は、きっと自分を信頼してく れているんだ。

「さて、ライディーン＝シンのことなのだが

「何か問題があるの?」

「いや、悪魔耐性も精神力も基礎戦闘力も問題ない。ありがとう、ラック。今この時代にレメゲトンの可能性が広がるのはとても心強 い」

「ライディーンがやりたいって言つたんだよ。おれは何もしてない」
本当にそうだ。

あれは全部ライディーンの希望だ。

「ラック、君はもう少し自分の力を信じてもいい」
王様は優しく微笑んだ。

「彼が契約から無事に帰ることを祈る。君の時も、クロウリー伯 爵の時もそうして來た。だから君も祈つて欲しい」

「うん、祈るよ。心の底から祈るよ」

ライディーンが無事に帰つてくるよう

そして、また一緒に稽古する口が来るようだ。

その晩も夢を見た。

背に激しい痛みがある。激痛で手足ががくがくと震えた。目がかすむ。両手両足を拘束する鎖は絶望的に頑丈だった 動けない。最後の視界に光が溢れた。

銀色の柔らかな光だ。

「黄金獅子の末裔」

聞き覚えのある呼び名で自分を呼ぶのは一体誰だ。
深く悲しいテノールの響き。

この声は知っている気がする。

「リュシフェル様！」

「ああ、リュシフェル様！」

周囲の大人がいつせいに跪いた。

ふわりと温かい風が揺れて、背の痛みが薄れた。

「確かに末裔の血」

同時に耳に響く甲高い音を立てて拘束していた鎖がはじけとんだ。轡も崩れるように無に帰し、自分の体は自由になつた。

その体でふと立ち上ると、足元がぬるりとしていた。

ふと見下ろしたそれは、真っ赤な液体だった。

「リュシフェル……？」

目を開けた。

かすかに逆十字の傷が痛む。

初めて聞く名前に、魂が震えた。

「おはよう、ラック。さあ、朝食だ」

ヴィックキーが明るい声をかけてくれた。白髪赤目のシアも既に着替え終わっている というか、この二人は既に早朝稽古を終えて

きたのだろう。

少し待つて、と言つてから手早く着替えながらふと聞いた。

「ねえ、ヴィックキー。『リュシフェル』って、誰……？」

「リュシフェル、とは、お前それを本気で聞いているのか？」

「うん」

「ぐりりと頷くと、ヴィックキーは信じられないといった表情でこちらを見た。

「リュシフェルは魔界で頂点に立つという墮天の悪魔だ。見た者はいないし存在自体も伝承にしか残っていないが、魔界を建造したのはそのリュシフェルだといわれている。この国で最も信仰される悪魔なのだぞ」

「墮天の……悪魔？ 頂点？」

そういえばいつだつたかライティーンがその名を口にした気がする。

夢の中で自分を呼んだ声の主はそのリュシフェルと言つ悪魔なのか？あの魔方陣はリュシフェルを呼び出すために……？

「もつともリュシフェルと言つるのはセフィロトの古代の発音なんだ。もと天使だから仕方がないといえば仕方がないのだが……グリモワールの古代語読みに直せば、ルシファだな」

「ルシファ？！」

その名には嫌と言つほど聞き覚えがあつた。

呆然とした自分の前にひらひらと手をかざして、ヴィックキーは眉を寄せた。

「大丈夫か？ 何をそんなに驚いているんだ？」

「いや、だつて……」

言おうとして、シアがいることに気づく。

「なんでもない」

「どうか？」

ヴィックキーは首を傾げたが、それ以上追求はしなかつた。

ルシファ、と言つのは一般的にリュシフェルと呼ばれる墮天の悪魔らしい。それも魔界の頂点に立つといわれる超強力な悪魔だ。あの悲しくも深いテノールの声はそのリュシフェルの声なのだろうか。

すると、いつも俺の中から天使ミカエルに呼びかけるあの声の主は

「気を抜くな、ラック！」

はつとすると、ヴィックキーの切つ先が自分の喉下に突きつけられていた。

「戦場では命取りだぞ！」

「はい！」

返事をしてまた試合に集中する。

ライディーンがレメゲトンになつて騎士団を脱退した頃から、訓練はさらに激しさを増していた。ブラックルビー漆黒星騎士団の何人かが戦地へ送られるのは時間の問題だという噂も鴉内かばす内では流れている。

本当か嘘か分からぬが、志願兵の数が倍増したことだけは確かだつた。

夜中、一人で屋上に出た。

紅の髪を思い出しながら静寂の中でつぶやく。

「アガレスさん」

盲目の老紳士が空に姿を現し、それを追うように金目の鷹が舞い降りてくる。

「学友の姿がないな」

「うん。ライディーンもレメゲトンになつた。契約で魔界に行つてゐるはずだよ」

「そうか」

アガレスさんは唇の端に高貴な笑みを湛えた。

「相手は誰だ?」

「えと、確かレラージュつて」

その瞬間、老紳士の表情が変わった。

こんなアガレスさんは初めてだつた。

「用心せよ 幼き娘」

そして霞むように消えてしまった。

「あつ！ もう、アガレスさんはいつも突然消えちゃうんだから！」

それでも、用心せよ、と言つたときの表情は頭の中に引っかかっていた。

それから何日間か千里眼の稽古を休んだ。

昼の訓練が厳しく、体力的な余裕がなくなつてきていたからだ。

そしてちょうど一〇日目の晝、午前の稽古を終えた時だつた。

今日の夕方にはメリルとルークが謹慎を終えて独房から出でくる。そうしたらまた話したいと思っていた矢先だ。

いつも笑顔のクラウドさんが血相を変えて馬を駆つて鴉の宿舎にやつてきた。

「ラック！ すぐにしてくれ！」

完全に鴉部隊の仲間に取り囲まれている時だつたのだが、クラウ

ドさんはお構いなしだつた。

これは緊急事態だ。

とても嫌な予感がした。

やつとこなせるようになつた馬術で馬を駆り、ますます人気のなくなつた城下町のメインストリートを駆け抜けてパラディソ・ゲートへと急いだ。

クラウドさんの口から飛び出したのは信じられない言葉だつたか

ら。

「ライディーンを……止めてくれ」

パラディイソ・ゲートから脇目も振らず真直ぐに神殿を目指した。遠くから轟音が響いてくる。かすかに煙が上がっている気がする。「ライディーンが悪魔に乗つ取られた。いまその力で暴れている。いま王都で彼を止められるのはラック、君しかいないんだ」

「ライディーン……」

クラウドさんの言葉を後ろに聞きながら、馬から飛び降りた。驚いたクラウドさんの顔を尻目に、高らかに叫ぶ。

「アガレスさん、力を貸して！」

全身に加護がいきわたる。

着地と同時にヒトにはありえない速度で神殿に続く庭園の道を走り出した。

「レラージュ やはりな」

「分かつてたの？アガレスさん」

「奴は危険だ」

金目の鷹が横にぴつたりと寄り添うように飛んでいる。

風を切る音を裂いて轟音が耳に届く。

「用心せよ 幼き娘 奴の武器は傷を腐らせる」

「分かつた」

腰の小太刀を抜いた。

同時にざつと足を止める。

「ライディーン！！」

紅の髪が風に揺れている。

その剣士はふらりとこちらを振り向いた。

「もうやめる。これ以上壊すな……！」

風が吹き抜けるほどに破壊された神殿の壁は瓦礫の山を作っている。

周囲には止めよつとして返り討ちにあつた衛兵たちが幾人も

る。

転がっていた。

遅れて追いついたクラウドさんを振り向きもせずに指示を出す。

「怪我してるヒト、避難させて」

「分かつた。ラック、無理をしないように。私もすぐに戻るわ」「お願い」

おそらく原因は紅の髪に見え隠れする、あの額に張り付いているコインだ。あれを破壊、もしくは引き剥がす事が出来ればきっとライディーンは正気を取り戻すはずだ。

漆黒の騎士服を纏つた紅髪の剣士は長剣を両手で握り締めていた。あの独特の型を持つ剣技が撃退されたところはこれまでたったの一度しか見た事がない。

鷹部隊長のライガさんがそれこそ見たことのない剣術で討ち取つたのだ。

今の自分にあれほど的能力がないことは分かつている。

どうすればいい……？

「黄金獅子の末裔デスか 珍しいデスね 老師父が味方とは」
ライディーンの口から出たのは聞いたこともないがハスキーナ声だった。

アガレスさんもしゃがれた声をしているが、それは見た目と年相応の声だ。目の前の若い騎士から発せられるにはあまりにも不自然に乾いた声だった。

「えと、悪魔のレラージュさん？ よかつたらライディーンを返して欲しいんだけど」

正直にそう言つと、第14番田の悪魔レラージュさんは高らかに笑つた。

と言つてもかすれた声が細い隙間を通り抜ける空氣の音でしかなかつたけれど。

「面白い娘デスね アガレス 入れ込みマシたか」
ライディーンの姿からこのかすれた声が出るのは許せなかつた。
「返してくれないんなら力ずくでコインをはがすよ」

「いやはや 実に面白いデス」

ライディーンは ライディーンの体を乗つ取つた悪魔のレラージュさんは両手で剣を構えた。

つられるようにこちらも小太刀を真直ぐに構える。

藍色の瞳から目を離さず、先ほどからの轟音を思い出していた。壁がめちゃめちゃに崩れているのは確実にレラージュさんのせいだと思つていいだろう。だが、その手にある武器はある一振りの剣のみだ。

あれで壁を破壊したのだとすると、いくらアガレスさんの加護があるとはいえてまともに太刀を受けるわけにはいかない。元の力が違うすぎるから。

だつておれの力は加護なしじゃ腕を振りほどけないくらいに弱い。「恐るるな 幼き娘 慚せば敗北が待つている」

金目の鷹はばさりと翼を振つた。

「うん、分かつてるとよ」

切つ先に全てを集中した。

あの破壊力相手だと、受け流し損ねた瞬間負ける。力任せに受けることなど論外だ。

「レラージュさん。あなたの目的は何？ 何故ライディーンを乗つ取つたりしたの？」

「目的 そんなものどうに忘れマシた 今は何かを破壊することのみが 至上命題なのデス」

「破壊？」

「破壊の悪魔レラージュ。それが彼の名だよ」

戦闘の場に飛び込んできたテノールは、緊張の響きを取り込んでいた。

視線はレラージュさんに据えたまま視界の隅で金髪を捕らえていた。

「地獄の業火を操るフラウロスや過去王家に楯突いたアスマデウスと並んで扱いづらい悪魔の一人だと言われている。武器は傷を腐ら

た。

せるところ」「矢だ」

クラウドさんは何人もの怪我をした衛兵さんを動かしたはずなのに、息一つ乱していなかった。

今までずつとあの笑顔の裏に隠されてきた凄まじい闘気が外に漏れ出している。王国で3本の指に入る漆黒星騎士団長ブラックルビー その名は伊達ではないのだ。

「クラウドさん、おれが囮になるよ」

小さく呟いた。

「アガレスさんの加護があるからこつもよじずっと強こよ。攻撃をひきつけて全部避けられると想つ」

「ラック！」

「俺は経験が浅いから悪魔の懷に飛び込んでコインを破壊する技なんて考え付かないんだ」

「だからと言つて君が」

「悪魔に切りかかれだなんて、生身のヒトに頼める事じゃないのはわかってる。でもクラウドさんしかいないんだ」

鷹部隊長のライガさんはとてもなく強い。今の俺じゃどうひつくり返つても太刀打ちできないくらいだ。それはよく知つていて。でも、その上司に当たるクラウドさんはもつと強いのだとヴィックキーがよく言つていた。流れるように美しい剣を振るうのだという。まだ見た事はない想像もできないが、もしかするとアレイさんより強いのかもしねない。

「お願ひだよ、クラウドさん。ライデーンを助けたいんだ……手伝ってくれる？」

小さな声で呟くと、クラウドさんは剣を強く握りなおした。

「仕方がない子だ。だが言葉には有無を言わせない強さがある。君には上に立つものとしての素質があるようだ」

「でも、無理しないでね。出来る限り注意をひきつけるからー。」
そう言い放つて地を蹴った。

数十日に及ぶ練習の成果を試す機会だ。

一気にレラージュさんとの間合いをつめながら大きな声で叫んだ。

「フラウロスさん！」

悪魔同時召還。

名を叫ぶと同時に灼熱の空気が襲ってきた。

「レラージュ 久しい」

灼熱の獣は自分の左隣に寄り添つて駆けた。
クローセルさんの加護が効いているようで、熱さは感じても皮膚
が焼ける感覚はなかつた。

「人間を傷つけないで、悪魔だけ引き剥がしたいんだ。できるかな
？」

「難解 だが興味深い」

灼熱の獣が吼える。

二人を同時に召還したらアガレスさんと喧嘩になるかと思つたけ
れど、意外とうまくいきそつだ。

もう一度小太刀をしつかり握り締めた。

「行くよ、アガレスさん、フラウロスさん！」

レラージュさんの間合い直前で地を蹴つて空に飛び上がつた。
フラウロスさんはその体を自分とは逆方向にひねつた。
そうやって紅髪の騎士を挟むように打ちかかる。

「やああーーっ！」

気合を込めて打ち出した一撃は、あっさりとかわされた。
着地したところにフラウロスさんの炎が襲い掛かる。

クローセルさんの加護を受けている自分にこの炎は効かない
ものすごく熱いけど！

体勢が崩れたところを炎に身を隠して、すぐ一撃目を打ち込んだ。

「甘いデス！」

悪魔の声と共に小太刀に重圧がかかる。

そのまま間合いの外まで吹つ飛ばされた。

アガレスさんの加護で何とか体勢を立て直し地面に叩きつけられ
ることだけは免れたが、小太刀を握っていた手はじんじんとしびれ

ている。

「流石強い」

金目の鷹が呟く。

「ライティーンは元々強いからね。レラージュさんも強いや
レラージュさんに乗つ取られたライティーンはフロウロスさんの
炎を剣圧だけで吹つ飛ばしてしまった。

灼熱の獣はうなりながらその悪魔の様子を伺っている。

「でも、おれだつて強くなつたんだ」

一つ息をついてから感覚を集中させた。

実戦で使うのは初めてだ。

練習ではすでに1分ほどの使用には耐えられるようになつていて

千里眼
その瞬間、周囲の時間の動きがスローになった。

クラウドさんは千里眼を発動した事に気づいてくれたようだ。
もちろん千里眼の事は知らないはずだから、詳しいことは分から
なくても勝負に出た事くらいは確実に伝わったはずだ。
その証拠に一気に鬪気が上昇したのが分かった。

向かいを見るとフラウロスさんの毛並み一つ一つの動きまで分か
る。もちろんみるみるうちに体温が上昇していくのも 炎を吐く
まであと2秒と少しと言つたところだろ？
自分が間合いをつめるまであと1秒はかかる。

ぎりぎりだ。

それをコンマ2秒ほどで考えて、一足飛びに間合いで踏み込んだ。
ここまでが1秒！

レラージュさんが大振りに降つた長剣は自分の頭上で空を切る。
ほとんど止まつていいように見えるその太刀筋を見切るのは簡単だ。
剣が空を切る音が大きすぎて頭に響く。
耳のレベルを少し下げて、田と触覚に集中した。
途端に全身が焼けるように熱くなる。
この状態で炎を食らつたらまずい！失神じやすまない。
皮膚の感度をさらに下げ、視覚のみに集中した。
音のない世界。触覚のない世界。

まるで水の中を漂うような感覚で田の前で繰り広げられる世界を見据えた。

クラウドさんがこちらに向かってきているのを確認し、眼前に迫
つたフラウロスさんの炎を避けるように空中に飛び上がった。

炎の塊がレラージュさんを包み込む……と思つたが、紅髪の剣士
はまたも剣圧でその炎を両断した。

間髪いれず頭上から奇襲を仕掛けた。

強く両手で握った小太刀を、全体重をかけて振り下ろした。

剣がぶつかり合ってびりびりと腕が震える。

反動で地面に足をつくと、すぐさま足を踏み出して小太刀を突き出した。

その隙を見計らつたようにフラウロスさんの炎が迫る。

ごめん、ライディーン、熱いけど我慢して！

と思つた刹那。

「まだ甘いデス」

ライディーンの頭上にくすんだ緑のフードをかぶつた射手の上半身が現れた。

白く変化した。

「…」

驚いた途端に集中力が切れた。

世界が目まぐるしく回りだす。

射手がこちらを向く。緑のフードの中は暗くてよく見えなかつた。ただ、半袖の緑の服とそこから伸びる腕は、声よりずっと幼そうな印象だつた。

きりり、と弓が絞られる。

やばい、避けなくちゃ！

思つたがめぐる速度の変わつた世界についていけず、咄嗟に足が動かない。

「終わりデスね 黄金獅子の末裔」

勝ち誇つたような声が響いた。

まずい！

思わず小太刀を目の前に据えて身をすくめた。

ところが矢が飛ぶ前に、その射手の悲鳴が響き渡つた。

「ぎゃあああ！」

「愚か者」

地獄から響いてきたフラウロスさんの声。

なんと灼熱の獣はその鋭い爪で、紅の髪の上に浮かぶ緑色フードの射手の顔を切り裂いたのだ。

続いてそのしなやかな肢体を躍動させてさらにその影に飛び掛けた。

「！」

目の前で信じられない出来事が起こった。

何もない空間からずるりと射手の下半身が現れ、フラウロスさんは現れた射手の全身を完全に地面に拘束したのだ。

悪魔を魔界から引きずり出した?いや、支配を引き剥がしたというのか?!

いずれにせよこれは好機だ。

アガレスさんの加護を受けた全身を奮い立たせ、小太刀を右手で逆手に握った。

まだ支配が微かに残る彼の体は、まだ剣を離さず構えている。

「ライディーン!」

もう一度千里眼を発動した。熱い風が全身を支配する。既にかなりの負担が肢体にかかるっていた。

これが最後のチャンスだ。

両手で掬い上げるような剣先を完全に見切つてすれすれで横にかわした。

靡いた髪が剣に触れて一房風に舞つた。

そんな事気にも留めず左の拳を顔面に向かつて突き出した。もちろん彼は軽く頭を傾けて避ける。

予想済みの動きに、逆手に持つた小太刀を閃かせた。頭を傾けた方向からの斬撃。

むろん峰打ちだ。

完全に決まると思つた。

それが油断に繋がっていたのかもしれない。

自分の小太刀がライディーンの側頭部にヒットする直前に、緑色

フードのレラージュさんを取り押さえていたフラウロスさんの体が跳ね上がった。

視界の隅に白く変色したフラウロスさんの前脚が映る。

そこから白い煙が上がっている。あれは……凍られた？！

炎を操るフラウロスさんにとって凍らされたといつ事は考えつる限り最悪の事態だ。

「フラウロスさん、魔界に戻って！」

意識をそらして叫んだ瞬間、腹部に打撃が加わった。

「ぐつ……は……」

感覚を最大限に広げた状態でのダメージは普段の何十倍にも増幅される。

両手が攻撃に向かいがら空きになつた腹部にライディーンの剣の柄で衝撃が叩き込まれていたのだ。フラウロスさんに意識を移した一瞬の隙を突かれ、無防備にその攻撃を受けてしまった。

全身を激痛が貫き、体が後ろ向きに吹き飛んだ。

ゆっくり体が落下する感覚があるが、あまりの痛みに体が動かない。

受身を取る事もできずそのまま地面をすべるように転がつていつた。

全身が痙攣しているのが分かる。

もう痛いのか熱いのか何なのか分からない。ただ自分の体が深刻なダメージを負つていて全く機能しないという事だけがからうじて理解できた。

目の前の景色がぼやけている。

微かにテノールの響きが耳に届いたのは夢か現実だったのか……

黒衣を纏つた大人たちが自分を取り巻いている。

ああ、これはいつもの夢だ。

足元にぬるりとした血の感触を確かめながらゆらりとその場に立

つ。

ところが黒いフードで顔も分からぬ大人は銀のブレイドをこすりに向かつて閃かせる。

「リュシフェル様の贊となれ！」

「その命でもつて誓いとせよ！」

意味が分からぬ。

でも、刃物をこちらに向けた大人たちの殺氣だけは敏感に感じ取れた。

このままじゃ、自分はこのヒトたちに殺されるだろう。

直感でそう感じ取つてくると銀のブレイドに背を向けた。

周囲は闇。

だがなぜか自分はある方向に駆け出した 誰かに呼ばれている気がしたから。

壁に行き着いたその闇の中には、さらに闇へと続く階段が口を開けていた。この先に自分を呼んでいるものがいる気がする。後ろから追いかけてくる大人たちから逃げるように、転がるようにな階段を下つた。

気の遠くなるような逃避行の後、たどり着いた部屋には明かりが一切なかつた。

それでもなぜか感覚に敏感に触れる何かがそこには存在していた。導かれるように手を伸ばすと、何かが指の先に触れた。

石か何かでできた台の上に丸い形状の薄い物体が乗つている。ひんやりとしたその感覚はなぜか心を落ちさせた。

手にとつて握り締めた。

後ろから大人たちが叫ぶ声がする。

逃げ場がなかつた。

……名を呼んデ

突然頭の中に声が響いた。

声の主は分からぬといつに、口が勝手に動いていた。

「グラシア・ラボラス……」

田の前を暗黒の霧が包み込んだ。

喉の奥から微かな呻きが漏れた。

これは自分の声が、それとも別のヒトの声なのか。

「……シ……ファ」

何も見えない。何も感じない。

その闇の中で、はつきりと自分の声がした。

「ルシファ」

その瞬間、世界に光が満ちた。

全身の感覚が戻つてくる。あれほど痛めつけられて動かなくなつたはずだった手足^{がい}とも容易く稼動した。目を開けると、翡翠^{ジエイ}の瞳が近くにあった。

「クラウドさん」

「ラック！」

蒼白な顔の漆黒星騎士団長^{ブラックルビー}は一瞬だけ安心した顔をした。が、その騎士の右腕は完全に白く変色していた。

一気に現実に戻ってきた。

自分の足で立ち上がる。動く手で、白くなつたクラウドさんの右手に触れた とても冷たい。

「ごめん、クラウドさん……痛い？」

「そんなことより君こそ」

クラウドさんがその言葉をいい終わる前に額がとても熱くなつた。同時に握ったクラウドさんの右手が光を帯びた。

光に溶けるように、白く変色していた右手が少しずつ温かくなつてきた。これでだいじょうぶだ。何故かは分からなかつたが、自分の中に芽生えた力を何となく理解していた。

「ラック、これは……」

「待つって。今度は負けない！」

まだ何か言いたそうな騎士団長のテノールを分断して、紅の髪の

剣士へと向き直つた。

頭上にレラージュさんが浮かんでいる。彼の藍色の瞳に光は灯つていなかつた。

「獅子の末裔 貴様 何者」

驚愕したようなレラージュさんの言葉を完全に無視して左手を前に構えた。膝を軽く曲げ、肩幅に開いて右足を後ろに下げる。クラウドさんからじきじきに留つた、『空手』と呼ばれる古体術の構えだ。

アガレスさんのときとは少し違つ加護が全身に満ちていた。

この感覚は初めてだと、うに不自然なほど自然に自分になじんでいた。フラウロスさんのときのように内側のエネルギーが暴れだす感覚も、アガレスさんのときのように躍動する感覚もない。まして全く自由のきかなかつたラースの支配とも全く違つ。

ただ、自分の手足が思い通りに動かせる。

まるで最初からこゝやつて自分の体を支配していたかのよつ。『元手』

「おれがレラージュさんをライティーンから引き剥がすよ。だから……」

小さくそう呟いて、地を蹴つた。

地面をすべるよう相手との距離をつめる。

顔の横に剣をひいたライティーンは鋭い剣先を突き出した。

下がるわけに行かない。最小限の動きで一歩踏み出して刃を避けた。頬に軽い痛みが走る。

そこへ凍てつく空気をまとつた矢が迫る。

「フラウロスさん！」

とつさに叫んで加護を両手に集中させ、左手で矢を弾き飛ばした。右手は剣を握るライティーンの両手に押し付ける。

じりり、と肉のこげる音がした。痛みを感じないのか悲鳴も上げず、ライティーンは両手から剣を取り落とした。

もう一度両手に炎を纏つ。

固まつたように動かないライティーンの手を踏み台に飛び上がつ

た。

「レラージュさん、ライティーンを返してもいいよ」

田の前に迫った緑色フードの悪魔の両肩に炎に包まれた両手を押し当て、ライティーンの肩に足について反対側に蹴り込んだ。

「クラウドさん！」

叫びながら、レラージュさんの両肩に全体重をかけた。

ずるり、と空間から悪魔の全身が飛び出でくる。

一人重なるようにそのまま地面へと向かつて落下していった。

しかし、地面に接触する直前でレラージュさんの姿が焼き消えた。バランスを失つて頭から地面上に落ちてしまい、そのまま自分は意識を失つてしまつたのだった。

目の前が真っ赤に染まつてゐる。
口の中がキモチワルイ。既に大量の血を飲み込んでしまつたようだ。

酷使した手足は動かず、精神は完全に破壊されていた。

伏せた床が冷たい。絨毯だといふのに真っ赤な液体を吸い込んでいるからだ。手も足も頬も髪もすべてが血の色に染まつてゐる。

震む視界の中映るのは、吹き抜けのホールに作られた全面の窓と長い階段

「愛しき子 全て忘れなさい」

優しく悲しいテノールが響いた。

ふと顔を上げると銀髪の天使が微笑んでいた。

6枚の翼が闇に浮かびあがり、彫刻のように整つた顔立ちからは深い悲しみが感じられた。

「忘れなさい」

白く細い指が額に伸びる。

触れた途端に額が焼けるように熱くなり、全身を雷撃が貫いたよ

うな感覚が襲つた。

「ルシ…… フア……」

最後の咳きは闇の中吸い込まれるように消えていった。

ゆっくり眠りに落ちる感覚をそのまま逆になぞるように意識が浮上してきた。

眠っている意識はないのに全身の感覚がない。目を開けようとしたのに開かない。音は……かろうじて鼓膜を揺らす波が感知出来た。「生きているのですか？」

「大丈夫だよ、ヴィックキー。でも、とても深刻な状態らしい」「……一体何があつたのですか、クラウド団長」

「それは私にも分からぬのだ」

言葉は認識される事のないまま右から左へと流れしていく。

「ライティーンは？」

その名前だけ微かに認識した。

少しずつ戻ってくる感覚は痛みと吐き気以外の何者も伝えない。もう一度意識を手放しそうになりつつ、すんでのところでこらえた。体が重い。鉛のようだとそんな用並みなものでは表現できないうらい動く気配がない。

自分が横になつているのかたつてているのか、何かの上にいるのか包まれているのか、そんな感覚もなかつた。

「彼も何とか無事だ。ラックが命を懸けて守つたからね」

「そうですか」

安堵したような声に、とにかく自分の無事を伝えたいと思つた。それなのに、痛みと重圧に支配された体は動いてくれない。唯一、あんなに毛嫌いしていた左手だけがピクリと動いた。

「ラック？」

それに気づいたクラウドさんが近寄ってきた気配がある。だいじょうぶだよ、そういうみたいのに喉すらも自分の思い通りに

ならないのか。

肘から先、ちょうどビースがくれた部分だけがかろうじて動いた。それと視覚以外の感覚を頼りにクラウドさんを探し当てる。

温かいその手をぎゅっと握り締めた。

「ああ、よかつた。大丈夫なんだね。そう言いたいんだね」うん、そうなんだ。

「でも今はゆっくりおやすみ。ライティーンは無事だ。安心するといい」

優しく握り返してくれた手から温かい心が流れ込んできた。全身が満たされていく。

痛みが少し和らいだような気がした。

「おやすみ、愛しい子……」

どこかで聞いた言葉を聞きながらもつ一度、今度は温かな気持ちで眠りについた。

もう夢の続きは見なかつた。

そこからの記憶はとても曖昧だ。

眠っているような浅い覚醒状態にあるような不思議な感覚の狭間を彷徨つて、時に誰かの声が聞こえたりもした。

それは聞いた事のある声だったり、初めて聞く声だったりしたけれどもう忘れてしまった。

引き取ってくれたフォーチュン家でただほとんど眠っていた。

覚えているのは、レーヴージュさんの暴走から10日近く経った日のこと。

初めて自分の足でベッドから降りてみるけた辺りからだった。

「大丈夫？ 無理しないのよ」

重症だった自分を屋敷に引き取り、ずっと付き添つてくれていたダイアナさんが心配そうな顔で見ている。

それでも、2・3歩進むうちに歩く感覚を取り戻していった。

「うん、だいじょうぶ」

これまでにもこんな事は何度もあった。

何度も何度も死線を彷徨つて、その度たくさんのヒトに助けられて現世に帰ってきた。

自分はやっぱり相当幸福な星の元に生まれたらしい。ねえちゃんがつけてくれた名前 ラック、といつ名前の通りに。

でもこんな風に死にそうになるまで戦つたと知つたら、またねえちゃんは怒るだろうか。

それとも生きていってよかつたと喜んでくれるだろうか。

数歩進んだところでまたベッドに戻り、腰掛けた。

「ねえちゃんに会いたいなあ……」

「まだ無理よ、ラック。まずは回復しなくちゃミーナ様の元には行けないわ」

そう言いながらダイアナさんは髪をといてくれた。

「漆黒星騎士団のヒトたちはどうしてるかな？」

「今も訓練所で一般志願兵の訓練に携わっているわ。ヴィッキーはよくここへ来てくれたのよ、覚えていないかしら？」

「んー……なんとなく」

「あと、可愛らしいカチューシャの女の子と小柄な男の子が来ていたわね」

「メリルとルークだ」

やつと頭が動き始めた。

「コインを失くした事、探し当てた事、それからライディーンが悪魔との契約に失敗して暴走した事

「ライディーンはどうしてる？」

「彼もこの屋敷にいるわよ。あなたと同じ、ずいぶん長い間眠っていたわ」

「……会える？」

「ええ。少しだけなら」

ダイアナさんに連れられて、自分が眠っていた部屋からすぐの扉に入った。

真っ白なシーツに包まれて、紅の髪が広がっていた。

固く閉じられた瞼は不安を誘った。

「……ライディーン」

静かに名を呼ぶと、かすかに瞼が動いた。

「ライディーン」

今度はまづすらと目を開けた。

藍色の瞳にはわずかに光が灯っていた。

「ラック」

かされるような声が喉から絞り出された。

ベッドの傍に跪いて、藍色の瞳をじっと見つめた。

「よかつた、生きてた」

心の底からほつとした。

「『じめんなラック……俺、失敗しちまつたよ』

「そんなことない。ちゃんと生きてる」

契約は死の危険を伴う。悪魔に殺される者や、暴走してやむなく処分される者も多いのだといふ。

ライディーンはちゃんと生きていこうしている。

「……ゼテキヤ王が先ほどここにいらっしゃったんだ」

「王様が？」

「まだその気があるのなら、レメゲトンの地位は残しておぐ。まだその魂が挫かれないのであらもう一度契約に臨むことも出来る、って言われた」

「王様はライディーンを信頼してるんだよ」

「ゼテキヤ王はすごいな。あの人の目を見ると全て見透かされた気になるよ」

ライディーンは自嘲的に微笑んだ。

「ラック、俺はまた回復したら挑戦してみる。命ある限り」

「そう」

ライディーンはやつぱり強い。一度失敗してもまた立ち上がることうがでわかる。

きつとこの数日でたくさん落ち込んで、いろんな痛みに耐えて、多くの事を考えたんだろうけれど。

最後にその結論にたどり着けるのは彼の強さだと思つた。

「おれもがんばるよ。戦場にだつて先に行く」

今ならアレイさんの気持ちが少し分かる。同じ位置に立てるようになるまで待つていい、と言つたときの気持ち。

逃がしてやる事は簡単だ。やめろって言葉も簡単だ。

でも、ライディーンは納得しないだろう。

サンに逃げ道を与えられた自分がそうだったように。

「ありがと、ラック。命がけで……助けてくれたって聞いた

ぽつりと呟いた言葉に笑顔で答えた。

きつと理由はそれだけでいい。

強くなれるのかとか、自分に力はあるのかとか悩むのはもうやめた。

守りたいから。強くなりたいから。

ただ、それだけでいい。

ライディーンがもう一度目を閉じたのを確認してから、部屋を後にした。

3日後には登城し、王に謁見を求めた。

王様はまた書類に囲まれた部屋で迎えてくれた。

「今回の事は大きな功績だ。破壊の悪魔レラージュを撃退し、被害を最小限に食い止めた。衛兵にも死者は出でていない。ラック、君とフォーチュン騎士団長の功績だよ」

「でも、神殿はめちゃくちゃになっちゃったよ」

「建物はまた建て替えればいい。だが、ライディーン＝シンの命は何者にも代えられない」

王様はこりと笑った。

「彼はきっとまた立ち上がり、国のために尽力してくれるだろう。今度は必ずレラージュを従えて」

「うん、そうだね」

きっとそうなるだろう。

強い心を持つ藍色の瞳の剣士は必ずまた立ち上がるだろう。

「あのね、王様。もう一つだけ言わなくちゃいけない事があるんだ」「何かな？」

「あの、おれの中にはもしかしたらもう一人悪魔さんがいるかもしないんだ。前からおでこが熱くなる事があつて、知らない声がしたりしてたんだ」

「それは以前、ファウスト女伯爵に報告を受けている」

「うん、それでね、最近夢を見るんだ。夢だから本当かどうかは分

からないんだけど、どうもそれはおれの過去らしい

「の中に、天使さんのか悪魔さんのか判らないヒトが出て来るんだ。銀髪で、6枚翼があつて…… そう、ミカエルさんにそつくりなんだよ」

闇の中に浮かぶ銀の光は柔らかく温かかった。

「夢の中でおれはそのヒトの名前を呼んだよ」

焦がれるように刃に向かつて、闇の中で痛みに耐えながら。

「おれと同じ名前だつたんだ」

繰り返し繰り返しその名を呼んだ。

「あの悪魔さんの名前はルシファ、つていうんだ」

王様の顔色は変わらなかつた。

でも、何かに耐えるように固く唇を結んでいた。

「ヴィッキーはリュシフルって言つたよ。とても有名なヒトらしい

「ラック」

王様はそこで割つて入つた。

「それはもう一度と口にしてはいけないよ。たとえファウスト女伯爵とクロウリー伯爵の前であつてもだ。そして、一度とその悪魔と話してはいけない」

金の瞳が黄金の煌きを呈した。

その威圧感に思わず声を失つた。

「ねえちゃんもダメなの?」

「すまない、ラック。できる事ならそれはもう忘れて欲しい
真剣な王様の顔はとても辛そつだった。

どうしたらいいんだろう。

忘れようと思つて忘れられるものではないけれど、とても思い出
したくて仕方のないものではない。

フランシュバックの嫌悪感を思い出してぶるりと体を震わせた。
「分かつた、もう言わないよ」

「ありがとう、ラック」

王様は険しい顔だった。

ルシファの名はあまり聞きたいものではないらしい。

ヴィックキーは魔界を作った墮天の悪魔だと言つた。

夢の中のルシファさんだらうと思われるは悪魔さんはとても優しかった。天使のミカエルさんと全く同じ姿かたちをして、同じ銀色のオーラを持っていた。

この夢は本当に過去なのか。

自分は本当にルシファさんと会つたのか。

いつたい過去、自分に何が起きていたのか

本当は知りたかったけれど、王様が言うのならこれを突き詰めていくとあんまりいい事は起こらないのだらう。

忘れよう、と思つた。

でも、深い群青の瞳のとても悲しげな視線だけは忘れられそうになかった。

SECT・27 ルーク・ハンバキア

それから一週間と待たず、自分は漆黒星騎士団の訓練に復帰した。
ライディーンはまだベッドから起き上がりがれず、フォーチュン家で
療養の日々が続いているはずだ。

自分はもう完全に回復していた。コインも全部戻つてきたし、先
日のレラージュとの戦闘で得たものは大きい。何より千里眼をいく
らか仕えるようになつた事は大きな自信に繋がっていた。

もう季節は夏真っ盛りだつた。

久しぶりに足を踏み入れた訓練所では、第4期の志願兵が訓練を行つていた。

立つてているだけで汗ばむ陽気だというのに、みな真剣に戦闘訓練を行つてゐる。これまで武器を手にした事もないようなヒトたちが何日かの訓練でそう強くなれるはずもない。

それでも、志願兵たちの必死な様子は自分と重なつた。

この国が好きで何かを守りたくて、少しでも力になれたらと兵役を志願するのだ。

「強くなりたい」

何度も呟いた台詞は、今でも一番願う事だ。
だから、ここに戻つてきた。

最初にクラウドさんに挨拶した。

「元気になつてよかつた。もうあんな無茶をしちゃ駄目だよ。私がアレイに怒られてしまつ」

「クラウドさんこそだいじょうぶだつた？ 右手……一回凍つたで
しう？」

「大丈夫だよ、君が治してくれたからね」

金髪の騎士団長はいつもの微笑みを見せた。

「さあ、みんな待つてゐるよ。早く戻つて元気な姿を見せるといい

……もう君はレメゲトンであることを隠す必要もない。ありのまま、好きに話しておいで」

「うん、ありがとっ」

クリウゼさんの居住を出ると、すぐ近くには馬小屋がある。

近寄つてみると、最初この場所に来たとき寄つてくれたヨハンそつくりな馬がまた嬉しそうに首を振つた。

「おいで」

手を伸ばすとすぐによつてきて鼻を押し付けてきた。

「ふふ、元気だつたか？」

「元気になつたよつだな、ラック」

「あ、ライガさん」

振り返ると青いバンダナの鷹部隊長たかがいた。

「そいつが好きか？」

「うん。すごくかわいい」

「じゃあその馬はお前にやるよ」

「え、いいの？！」

びつくりして目を丸くした。

「ただ、もう少し後だな。今は夏だが、冬が来て、それも過ぎて春になる頃にはそいつも立派な大人になる。そうしたら、戦場へ連れて行つてやってくれ」

「ありがとう！」

ねえちゃんの弟のヨハンによく似たまん丸な目を少しだけ細めて、

その馬は擦り寄つてくる。

「そのひびき前をつけたよ」とい

「うん！」

暑い時期が終わつて、秋が来て、冬が過ぎた頃。

その頃には自分は王様に認めてもらえたのだろうか。戦力として東へ向かう事を許されるだろうか……？

かひゅ
鴉部隊の宿舎に戻ると、ちょうど午後の訓練を終えた、ヴィックーとシアに会う事が出来た。

「ラック！ もう大丈夫なのか？」

「うん、もう平気。ごめんね、心配かけて」

「いや、無事で何よりだ」

白髪赤目の中尉はやつぱり無表情で、少し目を伏せただけだった。

「ねえ、メリルは？」

きょろきょろと見回して姿を探したが見当たらなかつた。

ヴィックーの表情が曇る。

「メリルは……」

練習後に汗を流して部屋に戻ってきたルークを捕まえた。驚いた顔をした黒猫をそのまま屋上に引きずつていった。ライディーンとよく稽古したこの場所で、黒髪金目の中尉は穏やかに微笑んだ。

「ラック、元気になつたんだね」

「……どこまで聞いたの？」

「レメゲトンの任務で大怪我したつて。ライディーンはそれに巻き込まれたつて言われたけど……本当は何があつたのかよく知らない。大丈夫、話せなんて言わなきから安心して」

ルークは以前より落ち着いた印象になつていた。

前ははじけるような元気を全身から発していて、小柄な体でちょっと走り回つている感じがあつたのに。

「ねえ、ルーク。メリルが騎士団を辞めたつてほんと？」

「……聞いたんだ。本当だよ。ついこの間、実家に帰つた」「何で？！」

ルークと一緒にいたいからつて、がんばって騎士になつたんじやなかつたのか。

もしかすると、もしかしなくても自分のせいなのか？

「大丈夫、ラックのせいじゃないよ」

その気持ちを感じ取ったかのようにルークは静かに言った。

「メリルは俺を信じてくれたんだ」

「ルークがメリル、と呼んだ。これまではずつと「姫」と呼んでいたのに。

「俺はこれまで逃げてたんだ。いつかメリルは俺を追うのを諦めてくれるんじゃないかなって。そうすればちゃんと身分の高い貴族と結婚して、一生幸せにめでたしめでたしつてなると思ってさ」

「メリルはずつと昔からルークが大好きだつたんだね」

「ああ、俺はそれを知つてもいた……でも、それに答えることは今までしてこなかつた。そうしてしまつたらもう戻れなくなると思って、逃げたんだ。故郷から遠く離れた王都の騎士団に入つたんだ」いくらか見ないうちにひどく大人びたルークは遠い目をした。その眼差しはびっくりするくらい美しく澄んでいた。

「でも、それは間違いだつた。メリルは俺を追つてきた。しかも、信じられないことに、俺はそれが嬉しかつたんだ」

「ルークもずつとメリルが一番大切だつたんでしょう？」

もしかするとメリルがルークを大切だと気づく前から。

ルークは自嘲気味に笑つた。

「そうだよ。でも、メリルのように一歩踏み出す事が出来なかつただけだ。俺のせいどころだけ傷つけたか分からない。それでもメリルは俺を見ていてくれたから」

「メリルはいつもルークのこと見てたよ。傍にいたいって、ずっと訴えてたよ」

若草色の瞳はいつでも黒猫の動きを追つていた。

傍から見ていても分かるくらい、全身でルークが好きだと語つていた。

「決めたんだ。俺が出世して、メリルを迎えて行くつて。これまで

がんばらせてばっかりだつたから、今度はおれががんばる番だ」

ルークは金の瞳を細めて笑つた。

「いつか騎士団長になつてメリルを迎えて行くよ。きっとそれなりメリルの両親だつて許してくれると思う」

自分には、身分とか世間の目とか貴族の制約とか、そんなものはぜんぜん分からぬ。レメゲトンの地位の高さとか、騎士団長の权限とか、貴族の上下も。

それは拘束する鎖のように重く人生にのしかかつてくるものらしい。好きな相手と一緒にいられなかつたり、なりたい職業に就けなかつたりすることもあるだろう。

でも、全部どうにもならないことじやないんだといふことも知つた。

騎士団長を目指せる才能を持ったルークや、偶然レメゲトンである自分と出会う事が出来たライディンは幸福なかも知れない。それでも彼らは変えようと努力を知つてゐる。

未来を見つめ、それをを目指すだけの力を養つてゐる。

「がんばってルーク。おれ応援するよ！」

「ありがとう、ラック。決心できたのはラックのお陰だ」

「？」

「あんな事がなければメリルが本音をぶつけてくれる事もなかつたし、俺がメリルに気持ちを伝えることもなかつたと思つ」

「おれは何もしてないよ」

全部、一人が互いを思う気持ちがあつたからだ。

お互いが相手を「ひとつだけ」に選び、大切に思う事が出来たら。

それはなんて素敵なことなんだろう。

「うん、すごく素敵だ！ いつかきっとメリルと一緒にいられる日が来るよ！」

「ありがとう！」

黒猫は微笑んだ。急に成長して大人になつてしまつた顔をして。

自分が強くなつてねえちゃんとアレイせんに会いに行くよつ。ルークもメリルに会いに行くんだろう。

しかし、何かが引っかかった気がした。

自分とねえちゃんはお互いが一番大切なんだ。でも、ルークとメリルの関係はそれとは少し違う気がした。

守りたい、守られたい 傍にいて欲しい。

胸の片隅が痛む。

何か新しい感情が芽生えようとしていた。

暑い暑い夏の日差しの中、訓練は続いていた。
自分はじきに鴉部隊の稽古に参加しなくなり、完全に鷹部隊と鶯部隊の練習を行き来する生活になじんでいた。
それからもいろんなヒトに出会った。

誰に会つても、聞く事がある。

それは「なぜ騎士になろうと思つたのか」と言つことだつた。
10人いたら10通りの答えがある。

それはとても興味深く、また、騎士と言つ職業に必要な心の強さを見せてもらひ機会でもあつた。

充実した日々に、時は矢のように過ぎていった。
やがて風が涼しくなり、木々の葉が色づき始めた。

この頃から、苦しい戦況が噂で伝わってくることになつた。すでにトロメオで籠城を始めてから4ヶ月近くがたとしているのだ。
それでも防衛ラインをカーバンクルまで戻すことはままならず、セフィロト国の攻撃をそれ以上進ませないだけで必死だつた。

冬に向けた食糧の備蓄のため、食事の量が減つていくことで戦を感じ取り、たびたび訪れる街が閑散としていくのを見て心を痛めた。
志願兵はすでに10期生までが戦地へ送られた。

ライディーンはまだ訓練所に姿を見せなかつた。
それほどひどい怪我だったのか、それとも……

雪が姿を見せ始める直前、一度だけライディーンと会つことができた。

この戦の時に神殿を修復している余裕はないらしい。ジユデッカ城の一室を占いの部屋としてあてがわれたじい様のところへ近況を報告しにいく折、ちょうど同じ田地を持つ紅髪の剣士と出会ったのだ。

久しぶりに見る藍色の瞳は、全く光を失つていなかつた。

「久しぶりだな、ラック。少し髪が伸びたか？」

「何だよ、元気になつたのなら顔くらい見せればいいのに…」

「…行きづらかったんだ。大口叩いたのに結局契約に失敗してラックを死ぬ目にあわせてしまつて。呑わせる顔がなかつた」少年の声は落ち着いたトーンに変わつていた。

ルークといいライディーンといい、ほんの3ヶ月見なかつただけでこれほど変わるのだと驚いた。

「春になる前にもう一度レラージュと契約する」

ライディーンは包帯が巻かれている両手を握り締めた。

「今度は大丈夫だ。あんな奴に負けたりしない」

「その手、大丈夫なの？」

自分がフラウロスさんの炎で焼き付けた手だ。

「ああ。ずいぶんかかつたが、もう前と同じように動かせる」

簡単に言つたが、きっとそれまでには苦痛のリハビリをこなしてきたはずだ。

すじく胸が痛んだ。

「ごめんね、ライディーン」

きつとすじく痛かつたはずだ。もしかしたらもう剣を握れないと絶望したかもしぬない。

それでも、ライディーンはまた戻つてきた。

もう一度契約すると言つてくれた。

「何でお前が謝るんだよ。俺はすじく感謝してるんだぜ？ お前のお陰でここまで来られたんだから。この命が今ここにあるのはお前に助けてもらつたからなんだから」

「おれは何もしてないよ」

これまで何度も繰り返した台詞をまた、繰り返す。

自分の無力をかみ締めて、それでも前に進む活力にするために。

「ラック、お前はワガママなのか氣を使うのか、自信あるのか消極的なのかよくわかんねえな。やっぱ面白い奴だ」

ライディーンは楽しそうに笑った。

が、ふとまじめな顔になつてぽつりと言つた。

「クラウド団長からお前の過去の話、いろいろ聞いたんだ」

「……そう」

自分の過去は別に隠してることでもないけれど、わざわざ話すことでもない。

「お前いろいろ苦労したんだな。何の苦労もせずグリフィスの名を手に入れたなんて言つて悪かつたよ」

「別におれは苦労したつもりはないよ。グリフィスの名が欲しいとは思わなかつたけど、ねえちゃんと一緒にいられるなら貰おうと思つた。おれはねえちゃんさえいればいい。それ以外は何もいらないんだ」

これは今でも揺らいでいない。

これからもずっと一緒にいるため。隣に並んで戦つため。今がその準備期間なのなら、喜んでおれは努力する。

それでも今すぐにでもねえちゃんの元へ飛んで生きたい気持ちは全く変わつていないので。

でもそこにさらにたくさんのお願いが重なつていても事実だつた。「おれは3年間ねえちゃんと一人で暮らしてた。でもある日突然この世界に放り込まれちゃつたんだ。最初はすごく戸惑つたしいやだつた。でもね……」

たくさんのヒトに出会つた。

大きな世界を知つた。

「今はこの世界がとても好きだよ。壊されたくない。だから、たくさんある大切なものを守りたいんだ。そのためにおれはねえちゃん離れてても我慢する」

大切なものがひとつではなくなつてしまつた。

それはとても大変なことだけれど、とても嬉しいことだつた。

「きっとみんなそんな風にして生きてるんだね」

ルークも、メリルも。

互いだけが大切だつたらあんなに悩んだりしなかつただろう。

「おれはまだがんばれるよ。まだ強くなれるよ」

あの紫の瞳のイジワルで優しいヒトを見上げたときと一緒にだ。近づくと、藍色の瞳は遠ざかる。

懐かしく思つて思わずにこりと微笑んだ。

「がんばろう、ライディーン。一緒にこの国を守りうー。」

「……ああ

ライディーンは複雑そうな笑顔を向けた。

そして少し目を逸らすと、ぼそりと言つた。

「ラック、お前がいつも俺に映して見てる相手はいったい誰なんだ？」

「？」

「え？」

「いや、何でもないよ」

ライディーンは少年の笑顔を見せた。

「さ、行こうか。ヴァイヤー老師が待つている」

「うん！」

ライディーンは一年で一番寒い時期が来ると同時に、契約に旅立つた。

瓦礫に埋まつてしまつている神殿地下になんとかスペースを見つけてじい様が魔法陣を描き、今度はおれもちゃんと見送る事が出来た。

黒い霧に包まれて魔界へ向かうライディーン。

その紅の髪が闇に呑まれるのを見届けてから、自分はまた訓練所に戻つた。

彼はきっと自分が訓練を休むことなど望んでいないだらうから。
馬上で冷たい風は頬を裂くように撫でていく。

どんより曇る空を見上げて、毎日想つ一人を灰色の空に描いてみた。

「ねえちゃん、アレイさん」

寒くなつたけど、元氣でいるかな。

怪我してないかな。

もうすぐ仲間が増えるよ。

ライディーンって言つんだ。まだヨハンと同じ年だけど、身長はアレイさんと同じくらいだよ。すごく強いんだ。

「会いたいよ……」

泣かないと決めた誓いがなければ涙が流れていたかもしれない。
それでも身を切る寒さと戦いながら、心の痛みを押し込めていた。

ライディーンはなかなか帰つてこなかつた。
不安はなかつた。

アレイさんも最初の契約で3ヶ月かかつたといつていたし、ライディーンが失敗するはずないと信じていたからだ。
そして、2ヶ月が経ち、今年最後の雪がジュデッカ城と訓練所を白く染め上げた。

外での訓練は中止になり、それでも凍えるような寒さの道場内で剣を振るつていた。

寒さに負けず練習を続けた中でもルークの伸びは目覚しく、ライガさんが驚くほど上達振りだつた。

「これならライディーンの抜けた分が埋まるな」

「冗談半分で言つたライガさんは、ライディーンがレメゲトンになつたことを知らない。」

突然騎士団から姿を消したライディーンをいぶかしむ者もいたが、惜しむ声のほうが多かつた。それだけ彼の才能は注目を集めていたのだ。

ライガさんは雪の降りしきる空を見上げ、ふと呟いた。

「あいつも今、何してるんだろうな」

その声で、なぜかどきんとした。

誰かに呼ばれたような、何かが届いたようなそんな不思議な感覚。

稽古後すぐにパラディソ・ゲートに向かつた。

雪の中馬に乗るのはとても辛かつたが、とにかくまつすぐ神殿跡に駆け込んだ。

「ライディーン」

白い雪の中、真紅の髪がふわりと揺れていた。

「おかえり」

「ただいま、ラック」

藍色の瞳が優しく微笑んだ。

待ち焦がれていた春が来た。

雪が溶け、空は青く澄み、緑が芽吹いて花は咲き乱れる。暖かな風は人々の心に安らぎをもたらすはずだった。

それなのに、東からもたらされたのはとうとうトロメオが陥落したという最悪のニュースだった。

いつもの書類に埋まつた部屋で。

時折しか見せない非常に険しい顔をした王様は静かに告げた。

「ラック＝グリフィス。レメゲトンとして戦地へ赴き、メフィア＝R＝ファウスト、アレイスター＝W＝クロウリー、ベアトリーチェ＝アリギエリの3名と共に軍と合流せよ。事態は一国を争う。精錬された力で持つて、トロメオを奪還せよ」

「御意」

跪いて、その命令を心に刻み付けた。

長かつた半年以上のときが確実に自分を後押ししてくれる。

ねえちゃんの屋敷ではすでに準備が整えられていた。

新しく採寸し、作つたばかりのレメゲトンの正装、新しくこじらえた皮作りの丈夫な籠手。

その全てを身につけ、見送るアイリスとリコリスに向かつて微笑んだ。

「んじや、行つてくれるよ」

「お気をつけて」

深く礼をした二人にぐるりと背を向けると、馬車に乗り込んだ。

漆黒星騎士団の訓練所に立ち寄つた。
「ラックルビー

馬を変えるためだ。

「さ、行こうか、マルコ」

ヨハンによく似た面差しの馬ににこりと笑いかける。嬉しそうに首を振る癖は小さいときから変わらない。

鞍と手綱をつけた様はどこから見ても立派な戦馬だった。

「マルコ、か。どうしてそんな名前に？」

青いバンダナのライガさんが不思議そうに聞く。

「クローセルさんが、マルコシアスさんのことをそう呼んでた。だから、マルコシアスさんみたいに強くて優しくなれるようだと思つて、マルコにしてみた」

「そうか……いい名だ」

ライガさんは唇の端をあげた。

「氣をつける。軍のいるカシオまではかなり距離がある。山も幾つも越えなくちゃなんねえ。戦場にたどり着く前に迷子になるんじゃないぞ」

「だいじょうぶだよ。おれ、田だけはいいんだ」

にこりと笑つてマルコの手綱を取る。

「行つて来ます！」

こつそり旅立ちたかつたから、他のヒトには言つていない。ライガさん一人の見送りで、自分は戦地に旅立つた。

東の都トロメオが陥落したいま、戦況は最悪だった。

道中も家を捨てて西や南へ逃げる人たちの集団を見かけた。大きな荷物を背負い、女性や子供、老人ばかりが目立つ旅団がいくつも西を目指していた。

それを見るたび心が裂かれた。

自然と足は速まる。

数日の行程の後、ようやく現在軍が駐留するカシオに到着した。

トロメオのすぐ東に位置するこの都市は商業都市であるため篠城には向かない。トロメオの奪還は最重要課題だつた。

兵士の間を通り過ぎて、主要メンバーが揃うカシオの中心の屋敷に足を踏み入れた。

王都の屋敷のような煌びやかさはなかつたが、古い歴史を持つ者だけに与えられる威厳がある。重層な建物の最奥で、作戦会議中らしい。

暗い廊下を通り過ぎて、大きな扉の前に立つた。
やつと会える。

長かつた、半年以上もの間ずつとずつと焦がれていた。
両側の騎士さんが扉を開けた。
目の前に、大きな円卓がある。
開いた扉の手前で跪いた。

「ラツク＝グリフィス、ただいま到着しました」

半年間、ヴィックキーに叩き込まれた敬語が自然に口からすべり出た。
顔を上げると、ずっとずっと会いたかったヒトたちがこちらを見ていた。とても驚いているような気がするのは気のせいなんだろうか。

立ち上ると、肩甲骨の辺りまで伸びた黒髪が頬にかかりた。
悪魔紋章が刺繡してある漆黒のドレスと漆黒のマント レメゲトンの正装だ。

今すぐにでもねえちゃんに駆け寄りたかったけれど我慢した。

「ただいまより炎妖玉騎士団長、フォルス＝レ＝バーディア卿の指揮下に入ります。よろしくお願ひします」
ガーネット

真紅の甲冑を身につけたヒトの前でもう一度跪いた。
これでやつと国のために戦える。

振り向いた時に紫の瞳と目があつて、にこりと笑いかけた。

一通りの挨拶を済ませて部屋を後にした。

「これで猫かぶりはおしまいだ。大きく息を吐いてから、一緒に部屋を出たねえちゃんの胸に迷わず飛び込んだ。

「やつと、追いついたよ。ねえちゃん」

「ラック……本当に大きくなつて……！」

手の感触が懐かしくて泣きそうになつた。懐かしく、甘い香りがした。

「暴走した悪魔を取り押さえたそうね。フォーチュン侯爵から聞いているわ」

「うん。すぐがんばったよ」

遠い道のりだった。

でも、自分はそれだけ成長して、大切なヒトを守る力を手に入れた。

ねえちゃんにあてがわれた部屋に戻つて、少し休んだ。
でも、ねえちゃんの傍を離れたりはしなかつた。お茶を入れる間
もずっと近くに寄り添つていた。

「もうどこにも行かない。ぜつたいねえちゃんと一緒にいる」

そう言つとねえちゃんは穏やかに微笑んだ。

まるでルシファさんのように優しい微笑みだつた。

「ふふ、ありがとう、ラック」

そして少し離れたところで不機嫌そうな顔をしている紫の瞳のヒトを指差した。

「ほら、あのでつかいヒトにも挨拶してきなさい。ずいぶんあなたのことばかり考えていたようだから」

「うん」

素直に頷いて、てくてくと長身の剣士の元へ向かった。

近づくと、やつぱり紫の瞳は少し遠かつた。
それでも今はピンヒールの靴だつたから思つたよりも近づいていた。

「アレイさん」

半年振りに会う漆黒の剣士は、ぜんぜん変わつていなかつた。
端正な顔も切れ長の眼に納まる紫水晶の瞳に灯る光も、記憶の中にあるままだつた。

「やつと、追いついたよ」

戦地に旅立つアレイさんが、行かないでと言つてしまつた自分に言つた言葉 待つてゐる。お前が自分で俺と同じ位置に立てるようになるまで。

それを頼りにここまできた。

「遅かつたな」

「仕方ないじやん。おれは未熟者だつたんだから」

「違ひない」

「もう！」

久しぶりに会つたつていつのこやつぱりアレイさんはイジワルだつた。

でもいいや。田の前にこのヒトがいるだけでとても嬉しいから。
そう思うと自然に笑みがこぼれた。

「阿呆面で笑うな。気が抜ける」

「いいじやん、アレイさんに会えて嬉しいんだ」

正直にそう言つと、アレイさんは大きなため息をついた。

こんなに素直に話すのは久しぶりかもしれない。自分は考えた事がすぐ口に出てしまうほつだけれど、漆黒星騎士団ではやはりそれなりに気を使つていたようだ。

「レラージュと戦闘したそうだな」

「うん、強かつた。勝てないかと思つたよ」

「ひどい怪我をしたんじゃないのか」

「おれは平氣だ。でも新しくレメゲトンになつたライティーンにひどい怪我させちやつた」

フランコスさんの炎で手を焼いてしまつたのだ。

「でも、ちゃんとそいつを救つたんだろ？？」

「うん、ちゃんと生きてた」

「なら何故そんな顔をする。お前は……よくやつた」

ぽん、と頭に手を置いてくれた。

温かくて大きな手はじんわりと優しさを運んできた。

「ほんと？」

アレイさんが褒めてくれるなんて珍しかつたから思わず聞き返してしまつた。

「ガキにしてはな

「ガキつて言うな！」

むつとして唇を尖らせると、アレイさんは少し唇の端をあげた。予想していなかつた微笑みに思わず心臓が跳ね上がつた。おかしいな、何でこんなにドキドキするんだろう。紫の瞳から目が離せない。

久しぶりに会つたから緊張しているんだろうか。

いや、そんなことない。

まるで吸い込まれるようにアレイさんを見上げていた。

「何だ、ほんやりして」

バリトンの声にはつとした。

不思議そうな顔が覗き込んでいる。

みるみる頬が熱くなるのを感じた。

「変な奴だな」

答えられない。何でだろう。心臓がすゞく卑くなつてている。

アレイさんに聞こえちゃうんじゃないだろうか。

「どうした」

「な、何でもないよ」

思わず後ずさつてしまつ。一歩近づいたら心臓が壊れるかもしない。

伸べられた手を避けるよつて一歩飛び退つた。

「あ……」

傷ついたような顔をしたアレイさん、「慌てて弁解しようとする。

「違うんだ！ 嫌なわけじゃないんだ！ でも、なんだかすゞく…

…

触れられたい、触れられたくない。

見ていたい、でも見ていると恥ずかしくなつてくる。

矛盾する気持ちが心の中で渦巻いた。

あんなに傍にいたいと思っていたのに、いざ田の前に現れたら心臓が壊れそうに拍動していた。

「すゞく……」

初めて持つた感情に名前をつけたる術を自分は持たない。

触れていいだらうか。

ドキドキしながら欲望のままに手を伸ばしてアレイさんの胸にそつと触ると、心臓の音が伝わってきた。

アレイさんの手が頬に触れた。

一瞬びくりとしたけれど、今度は逃げなかつた。

「何でいままで平氣だつたんだろ？」

とても不思議だつた。あれだけ近くにいて、あれだけ触れていてどうしてこれまで何も思わなかつたんだろ？

でもそれでも今も 触れて欲しいと思つ心は一体何なんだろ？

「不思議だな。すゞく……幸せなんだ」

温かい気持ちが全身を満たしている。

昔のヒトはこれになんていう名前をつけたんだろ？

心が導くままに一歩近づいた。

じつと見つめた紫の瞳には戸惑いが映つていた。

それを払拭するためにつまみと抱きついた。その瞬間に、泣きそ

うなくらいに何かがこみ上げてきた。その全部をぶつけられてしまう強く額を押し当てた。

「いつたいどうしたんだ」

困った声が響いていた。

それでも、アレイさんはぜんぜん嫌そうじやなかつたからすくへ嬉しかつた。

背と頭に当たられた手が優しかつた。

温かい腕に包まれて確信した。

アレイさんだけは特別だ

ライディーンに抱きしめられたときはすく怖かつた。抵抗できないと思つた瞬間に凄まじい恐怖が襲つた。

でも、アレイさんの腕の中ではそんな事はない。
だってここは世界で一番安心できる場所なんだ。

「もうどこにも行かないで」

すくママな言葉を言つてみた。

自分がそつするのアレイさんにだけだから。

ねえちゃんとすり見せないすくママな自分を受け止めてくれるのはアレイさんだけだから。

「仕方ないな」

あきれたようなバリトンを聞きながら、ほんの少しだけアレイさんに向ける気持ちとねえちゃんと向ける気持ちが違うことに気づき始めていた。

自分にはそれが何なのか分からなかつたけれど、今は自分の中に芽生えた気持ちと、大切なヒトと再会できた安心感でいっぱいだった。

田の前に迫つてるのは戦争という現実　自分はこれからどうしていくのか。

未来は全く見えなかつた。

この先に待つている最悪の結末をしリュシフェルが知つていた

と分かっていたなら、この時自分はもっと真剣にその気持ちと向き合えていたかもしれない。

でもこのときの自分は幸せに包まれていて、何も考えていなかつたんだ。

永遠なんて幻想だって、昔誰かが言っていたのに

- - - わ - - - (後書き)

to be continued . . .

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 <http://ncoode.syoisetu.com/n3660c/>
【LOST COIN - tail】 <http://ncoode.syoisetu.com/n3665c/>
【LAST DANCE - head】 <http://ncode.syoisetu.com/n4082c/>
【LAST DANCE - tail】 <http://ncoode.syoisetu.com/n4617c/>
【PAST DESIRE - head】 (本作)
【PAST DESIRE - tail】 <http://ncoode.syoisetu.com/n7899c/>
【WORST CRISIS - head】 <http://ncoode.syoisetu.com/n0921d/>
【WORST CRISIS - tail】 <http://ncoode.syoisetu.com/n0973d/>

順にお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6324c/>

PAST DESIRE -head-

2010年10月8日13時54分発行